発達心理学研究
2001，第12巻，第1号，1-11

原　著

養育者との相互交渉にみられる乳児の応答性の発達的変化：二項から三項への移行プロセスに着目して

塚田　みちる
（東京都立大学人文科学研究科）

二項的相互交渉に対象物が加わって，三項的相互交渉が成立していくプロセスを，月齢9カ月頃の乳児の応答性の変化に着目して記述した。特に，母親が対象物を提示したときの乳児の応答として，母親と対象物とに注視を切り替える交互注視と，情緒の表出を検討した。7組の母子を対象に，7カ月から12カ月までを縦断的に観察した。得られたデータを，二項的相互交渉，乳児が交互注視を行わない三項的相互交渉と，交互注視を行う三項的相互交渉に分類し，その生起時間と，母子間の行動の連鎖とを分析した。その結果，7，8カ月では，二項的相互交渉か，乳児の交互注視を伴わない三項的相互交渉が見られた。9カ月頃より，乳児が交互注視をして応答する三項的相互交渉が出現した。一方，9～11カ月頃は，二項的相互交渉で母親が対象物を提示すると，乳児が応答する傾向にあった。さらに，12カ月になると，乳児の交互注視と，対象物の提示などの行為が関連し，このとき肯定的情緒や声を表出する傾向にあることが明らかとなった。これらより，二項的な相互交渉が主に展開する7，8カ月から，9カ月頃の乳児の応答性の変化を軸に，三項的な相互交渉へと移行することが推測された。さらに，二項から三項へと移行する際の二項的相互交渉，および，肯定的情緒のもつ機能的意味や，乳児が母親の誘いにあえて応じないことの持つ意味について指摘した。

【キー・ワード】9カ月，乳児の応答性，交互注視，二項的相互交渉，三項的相互交渉

問　題

この20年ほどの間に，乳児は受け身的で他者に依存した存在というばかりでなく，自分の周りのものや人と，積極的に関わっていこうとする存在でもあると認識されるようになった。その結果，最近の乳児期における親子関係研究では，乳児は何を考え，何を感じ，何を体験しているのかといったその対人世界が中心的課題となってきている（Beebe, & Lachmann, 1994; Kaye, 1982 / 1993; 鯨岡，1997; Stern, 1985 / 1989a, 1989b, 1995;Zeanah, & Osofsky, 1994）。そのような動向の中で，Tomasello（1993）が「the 9-months miracle」と表現した9カ月頃の変化は，新たな乳児像を示すこととなった。「the 9-months miracle」とは，9カ月頃になると，たとえば，他者の見ているところに視線を向けたり（joint attention），他者が新奇なものに対応するしかたを参照したりすること（social referencing）などの現象を指す。これらの現象が生じる背景として，乳児が，他者を意図的行為者として理解することが指摘されている。この理解により，乳児の反応が，他者の意図を理解した応答的な反応になっていくと考えられている（Tomasello，1995 / 1999）。本研究では，この乳児の応答的な反応に着目し，それが，母子間の相互交渉の変化とどのように関連しているかを検討する。

日常生活での親と乳児との間には様々な相互交渉が見られる。特に，9カ月頃をはさんだ時期は，親と乳児の二項的な相互交渉（dyadic interaction）から，1つの対象物にともに関心を向けた三項配置の相互交渉（triadic interaction）へと移行する重要な時期といわれる。6カ月頃，二項的な相互交渉のなかに対象物が入ってくることで三項配置が始まり（Newson, & Newson, 1975），その後，13カ月頃に，目の前にある対象物について親とともに関心を向ける三項的な関わりが成り立つようになる（Bates, Camaioni, & Volterra, 1975; Harding, & Golinkoff, 1979）。この二項から三項への移行プロセスにおいては，多くの研究が，養育者の関わり方や感受性といった側面に焦点を当ててきた（Adamson,1995 / 1999; Adamson, & Bakeman,1985; Bakeman, & Adamson, 1984など）。そこでは，親と乳児とを非対称的関係ととらえて，関わりをリードする側である大人が，乳児に合わせて，どのようにやり取りを調整しているか，また，その発達はどのようなものかが検討されている。一方で，親子の関わりの構造的な変化には，乳児が，親の誘いかけに自ら応じるようになることも関連すると指摘されている（鯨岡,1999）。にもかかわらず，二項から三項への移行を，乳児の応答性の変化から取り上げた研究は少ない。そのため，9カ月頃の乳児の応答性に着目してこの期間の相互交渉について詳細に検討することは，二項から三項への移行プロセスに関する知見を深めることになるだろう。そこで，本研究では，対象月齢を7カ月から12カ月とし，9カ月頃の二項から三項へという相互交渉の変化をとらえることを目的とする。

三項的な関わりとは，ほかの人とコミュニケートするために，乳児―対象物―他者という三つの項の関係づけが成立することを指す。これは，誰かに何かを伝える関係であり，たとえば，一方がものを相手に提示して，もう一方がそれを受け取るといったやり貰いを中心とした関わりである（Adamson, 1995 / 1999; Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984; やまだ, 1987 など）。

対象物を介さない二項的関わりから三項的関わりへの移行については，親の働きかけの重要性が指摘されている。中でも，乳児の注意の方向性に応じた親の働きかけが検討されている（Adamson, 1995 / 1999; Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984）。なぜならば，6カ月頃から乳児は対象物に関心を持ち始めるが，この時期，母子が二項的相互交渉でうまく関わり合えるのとは対照的に，二項的相互交渉に対象物が入ると，乳児は対象物にのみ注意を向けて，周りの他者が誘っても応じにくいことが一部の研究で示唆されているからである（Kaye, 1982 / 1993; Kaye, & Fogel, 1980; 久保田, 1993; Stern, 1985 / 1989a; Tronick, & Cohn, 1989）。たとえば，乳児は母親がおもちゃのトラックに積み木を積んでいるときに，母親が誘っても，そのトラックを抱えることに夢中になっているといった具合である。したがって，この時期では，乳児は比較的対象物にのみ注意を向けやすいので，その対象物を親が操作するなどして，ようやく対象物を介して関わり合えるという。この親が乳児の注意の方向性に合わせて，1つの対象物に関わる形式は「支えられた共同の関わり」といわれる（Adamson, 1995 / 1999; Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984）。「支えられた」とは，三項的な関わりへの移行を生み出す足場として親の働きかけが機能することを示している。その一方で，親子の関わりの構造的な変化には，9カ月頃における親の誘いかけへの乳児の応答性も関連することが示唆されている（鯨岡, 1999）。そこで，乳児の9カ月頃における変化の説明に目を転じよう。

9カ月頃は，乳児の生活全般にわたる大きな変化が起きる時期といわれる。その変化は，一つ一つの行動について何かができるようになったというものではなく，乳児の外界への興味の持ち方そのものが変わるといわれる（鯨岡, 1999; Stern, 1985 / 1989a; Tomasello, 1993, 1995 / 1999; やまだ, 1987 など）。そして，その変化の背景には，乳児が，他者を意図的行為者として理解するようになることが指摘される。他者を意図的行為者として理解するとは，ある事象を誰が起こしたのかを乳児が理解することであり，事象間の因果関係の理解ともいえる（Tomasello, 1993, 1995 / 1999）。それは，乳児が交互注視をするところに如実に現れているという。交互注視とは，人と対象物との間で注意が往来することであり，たとえば，他者の指さしに追随注視し，他者と対象物の間で視線を交互に切り替えることなどを指す（Adamson, 1995 / 1999; Bates et al., 1975; Corkum, & Moore, 1995 / 1999）。この交互注視によって，乳児は他者が何に注意を向けているかに気づくようになる。つまり，9カ月以前の乳児は，人か対象物かのどちらかと関わる傾向にあり，両方に注意を向けることは難しい。それが，9カ月頃になると，乳児は，ある対象物を見ている他者に気づくようになる。他者が意図をもって対象物を見ていることに気づくのである。9カ月頃を越えることで最も異なることは，他者と対象物との間で交互注視を行い，他者が何に視線を送っているかを確認し，その対象物に乳児も意図的に，もしくは選択的に注意を向けるということである（Tomasello, 1993, 1995 / 1999）。二項から三項への移行には，まずもって1つの対象物を共有することが必要で，そのために，二者が共有されている対象物を見ていることに，お互いが気づくことが重要と考えられている（Corkum, & Moore, 1998; Tomasello, 1993, 1995 / 1999）。したがって，三項的な関わりへの移行には，乳児の交互注視が重要な役割を果たすと考えられる。

そこで，相互交渉の中で乳児がどのように交互注視を用いているかを扱った研究を概観すると，乳児の交互注視は，親と対象物とが同じ視野内であれば6カ月頃から見られるが（Newson, & Newson, 1975），母親が何を見ているかを確認するために交互注視を用いたり（Harding, & Golinkoff, 1979），日常頻繁に用いられるようになるのは12カ月ともいわれており（Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984），9カ月頃に，乳児が，どのように交互注視を発達させるのかは明らかになっていない。しかし，乳児の視線を扱った一部の研究から，9カ月頃では，自発的に交互注視を用いることは難しいが，大人の視線の変化に応じて出現しやすいことが示唆されている。ある方向に向いた大人の視線を，乳児が追うかどうかの追随注視の研究によれば（Corkum, & Moore, 1998），大人がある方向を向いたときに，乳児がそれと同じ方向を自発的に向くことができるのは10カ月以降であることが分かっている。さらに興味深いことに，8，9カ月でのみ，大人の視線の方向を見れば面白いもの（この場合はおもちゃが動く）があることを学習すると，大人の視線の変化に応じて乳児の追随注視は出現しやすいという。このことは，9カ月頃の交互注視は，自発的に用いるよりも，親が乳児の興味をうまく引きだすような誘いかけへの応答として生じやすいことを示唆する。また，生後1年に向かう時期においては，乳児の交互注視の発達を検討する指標として「相互交渉を展開する時間の長さ」が挙げられている（Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984）。なぜならば，乳児があるものや人に興味をもって注意を向けているかどうかは，

興味ある方向に視線を向け続けるところに現れていると考えられているからである。この指標を用いて6カ月から18カ月までを追跡した研究によれば（Bakeman, & Adamson, 1984），乳児の交互注視を伴った相互交渉が展開する時間は，6カ月から12カ月は非常に短いと示されている。しかしながら，この研究で取り上げられたのは，乳児が自発的に起こす交互注視であり，親の誘いかけに応じた交互注視は検討されていない。これらのことから，9カ月頃の交互注視は，親が乳児の興味を引きだすように誘いかけたときに生じやすく，このとき，交互注視を伴った相互交渉を展開させやすいことが推測される。

ところで，9カ月頃において二項から三項へと移行することは，乳児がいつ情緒を表出するかを扱った研究からも示唆されている。他者との関わりの中で，情緒表出を調整することは，乳児期を通して重要なコミュニケーションスキルであることは広く認められている（Beebe, & Lachmann, 1994; Saarni, Mumme, & Campos, 1998; Stern, 1985 / 1989a, 1989b, 1995; 須田，1999）。6カ月から12カ月を扱った研究を概観すると（Adamson, 1995 / 1999; Adamson, & Bakeman, 1985; Millar, 1988; Sullivan, & Lewis, 1989; Tarabulsy, Tessier, & Kappas, 1996），二項的相互交渉において，親に注意を向けて，乳児が発声，顔の表情，運動，肯定的情緒を表出した割合は減少する傾向にある一方で，本読みや電話ごっこのような対象物を介した遊びの間に，乳児はしばしば肯定的情緒を表出するようになることが示されている。しかしながら，乳児が自発的に起こす交互注視を伴った場合，6カ月から12カ月にかけては肯定的情緒の表出が少ないという（Adamson, & Bakeman,1985）。親の誘いかけに，乳児が交互注視をして応じた場合での乳児の情緒表出については検討されていない。

以上のことから，9カ月頃の乳児の応答性の変化に着目し，以下の2点を検討することにした。まず第1に，対象物を用いて親が誘いかけたときに，交互注視を伴って乳児が応答することを予想し，相互交渉の生起時間の変化を各月齢ごとに検討することにした。相互交渉は次の3つに分類した。対象物を介さずに2者が関わり合う「二項的相互交渉」（Tronick, & Cohn, 1989），乳児が対象物にのみ注意を向け，母親がそれに関わることで，2者が同じ対象物に関わり合う「三項的相互交渉（交互注視なし）」（Adamson, & Bakeman, 1985），さらに，母親が対象物を提示して誘いかけた直後に，乳児が注意を往来させて，2者が同じ対象物に関わり合う「三項的相互交渉（交互注視あり）」である。乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉は，9カ月頃から出現すると予想される。そして第2に，どのような相互交渉が展開しているときに，母子が声や情緒を表出するかの変化を検討することにした。そのために，乳児の発声と情緒の表出に着目し，それらが母親の働きかけに応じる連鎖を比較することにした。それぞれの相互交渉を比較すると，9カ月以降は，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉での連鎖率が高くなると予想される。

ただし，8，9カ月頃における二項から三項への移行形態には個人差が見られることが推測される。なぜならば，親が乳児の興味をうまく引きだすような誘いかけへの応答として，乳児が交互注視を用いていく様態は，各々の親子によって異なることが予想されるからである。実際，生後1年に向かうにつれて，応答時の行動の違いが顕著になることや（Suda & Kawakami, 1980），二項的，もしくは三項的な相互交渉を展開する時間は，乳児の性別によって異なることも顕著に示されている（Lester, Hoffman, & Brazelton, 1985; Tronick, & Cohn, 1989）。したがって，各々の親子がかなり異なった様態を示すことが予想されるため各事例ごとに検討することにした。先に述べた2点を数量的に検討し，さらに質的な変化も検討することで，よりつぶさに記述することにした。

方　法

観察対象

東京近郊に住む7組の母子の協力を得た。第1子であった（男児5人，女児2人）。協力を得た期間は，6，7カ月から12カ月である。なお，どの乳児も出生時に健康な状態であり，月齢7，9，10カ月時の健診より，その後の発達において深刻な問題がないことが確認された。

手続き

筆者が，月に1～2回，協力者の家庭を訪問し，乳児と母親の自然な遊び場面をビデオカメラで撮影した[1)]。母親には，できるだけいつものように振る舞うよう教示した。撮影場面は，母親が乳児に語りかけたり，おもちゃ（各家庭にある乳児が使い慣れたもの）を用いて遊んでいる場面を設定した。各母子の撮影回数と撮影時間の平均は，母子Aを10回で平均53.2分，母子Bを9回で平均55.5分，母子Cを8回で平均58.2分，母子Dを8回で平均52.1分，母子Eを9回で平均38.5分，母子Fを7回で平均40.2分，母子Gを10回で平均45.3分，その期間は1996年12月から1999年1月であった。

資料の整理・分析

得られた資料は，次のように整理し分析された。

(1) 分析場面の選択　6カ月時に観察可能であったのが5ケースであったため，分析の対象は全ケース観察可能であった7カ月からとした。観察された7カ月から12カ月の資料の中から，その月齢における資料の代表性を考慮するために，乳児の誕生日の日にちに最も近い日にちの資料1回分を選んだ。その中から，母親が場面からやむ

1) 1組は，中京大学大学院の久雅子氏の収集した資料である。

を得ず抜けるような中断箇所や，養育場面（おしめ替えや着替えなど）を除外し，母子がものを使わない遊びか，ものを使っての遊び場面を抽出した。その結果，抽出時間の平均は，母子Aで42.4分，母子Bで45.2分，母子Cで44.1分，母子Dで45.5分，母子Eで30.0分，母子Fで28.2分，母子Gで22.1分であった。生後1年以下の母子の相互交渉を扱ったほかの研究では，分析時間が5～10分であることを確認したため，各月齢の分析時間を10.0分と定めた（Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984; Bigelow, 1998; Jasnow, & Feldstein, 1986; Messinger, & Fogel, 1998; Vedeler, 1994）。なお，分析対象となった10.0分間は，連続した10.0分間である。原則として撮影開始直後を対象としたが，子どもの視線や顔の表情がはっきり撮影できなかった場面は除外した。

(2) コーディング　先行研究（Bornstein, Azuma, Tamis-LeMonda, & Ogino, 1990; Bridges, & Connell, 1991; Stern, 1985 / 1989a; Suda, & Kawakami, 1980; Vedeler, 1994）を参照し，Table 1に示したコーディング項目（計13項目）を用意した。

微細な時間水準での多様な行動の生起と，その時間的変化を記述するため，録画されたビデオについてマイクロ分析を用いた。抽出された分析対象場面のコーディングは1秒単位で行った。このとき，乳児の情緒に関する評定は，乳児の行動項目と母親の働きかけのすべてのコード化が終了した後に行い，乳児行動と情緒表出の評定とが独立のデータとなるよう扱った。

これらのコーディングが終了した後，さらに，3種類の相互交渉の生起時間を検討するために，以下の処理を行った（Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984）。① 二項的相互交渉；乳児が母親のみに注意を向けて関わる（e.g., 母親が乳児の身体をくすぐるなど）。コーディングシート上では，乳児の「母親への注意」もしくは「母親への接触」と，母親の「母親への注意の喚起」もしくは「動作的な働きかけ」が同時生起した場合，乳児の注意が母親からそれて，母親の働きかけが終了するまでとした。② 三項的相互交渉（交互注視なし）；乳児が母親に注意を向けることなく，乳児と母親が同じ対象物に関わる（e.g., ボタンを押すと音の鳴る電話の操作に夢中になる乳児のそばで母親がボタンを押すのを手伝うなど）。コーディングシート上では，乳児の「環境内の事物への注意」「環境内の事物への探索」と，母親の「指示的な働きかけ」が同時生起した場合，母親の働きかけが終了するまでとした。③ 三項的相互交渉（交互注視あり）；乳児が母親と対象物との間で視線を往来させて，乳児と母親が同じ対象物に関わる（e.g., 母親が本を見せると，乳児がまず本を見てそれから母親を見上げまた本を見るという動作を示し，母親が本を読み聞かせている間，何度か母親を見上げながら本に触るなど）。まず，母親の「指示的な働きかけ」と，乳児の「母親への注意」「母親の示す事物への注意」のみに着目した。そして，母親の「指示的働きかけ」がコード化されている場面の映像を再度ビデオで見て，乳児がその時注意を向けていないおもちゃを，母親が見せて誘っている場面を選択した。そして，この誘いの後，5秒以内に乳児が「母親への注意」と「母

Table 1　*マイクロ分析で用いた項目とその定義*

乳児の行動項目

①注意の方向性	・環境内の事物への注意
	・母親の示す事物への注意
	・母親への注意
②触覚的探索	・環境内の事物への探索
	・母親の示す事物への探索
③接触行動	・母親への接触
④声だし	・不快でない声だし

乳児の表現した情緒の評定項目

①肯定的な　（定義）乳児の顔の表情や発声などから明らかに肯定的な情緒が表出している（例えば，笑いながらリズムに合わせてからだを動かすなど）。

②否定的な　（定義）乳児の顔の表情や発声などから明らかに不快な情緒が表出している（例えば，顔をしかめて不快な声を出す，泣くなど）。

母親の働きかけの項目

①指示的な働きかけ　（定義）母親が言葉と身体を使って，乳児の注意を環境の中の事物に積極的に向けさせるよう働きかける（例えば，「ボール投げしよう」「～してみたら」「これはこうやって使うんだよ」など）。

②解釈的な反応　（定義）母親が乳児の意図や情緒に対し解釈を行って，それに対応して働きかける（「～を見ているの」「～してほしいの」と言っておもちゃを取って渡す，「うれしいね」「楽しいね」「怒ってるの」と言うなど）。

③母親への注意の喚起　（定義）母親が言葉と身体を使って，乳児の注意を母親に向けさせるよう働きかける。

④動作的な働きかけ　（定義）母親が乳児の声や動作を模倣をしながら働きかける。もしくは，母親が子どもの身体に積極的に接触し働きかける（例えば，「そうね」「よくできたね」などと言って子どもの頭をなでる，母親が歌を歌いながら子どもの身体を動かすなど）。

親の示す事物への注意」との両方を生起させている，もしくは，交互に生起させている場合を交互注視とみなした（Adamson, & Bakeman, 1985; Tomasello, & Farrar, 1986）。なお，交互注視の後も引き続き同じ対象物と母親との間で視線が往来している場合は連続した関わりとみなした。したがって，コーディングシート上では，母親の「指示的な働きかけ」が生起した後5秒以内に，乳児の「母親の示した事物への注意」，「母親への注意」，「母親の示した事物への探索」とが生起した場合，乳児の注意がその対象物からそれて，母親の働きかけが終了するまでとした。なお，このとき乳児が対象物から目を離して母親の顔を見たこと，この場面において同じ対象物で遊んでいることはビデオ上で確認している。

(3) コーディングの一致率　分析の信頼性を評定するために，筆者と，分析の経験を持つ2人（研究の目的を知らない大学院学生），計3人で独立に，分析対象以外の場面と分析対象場面を計720秒間をコード化した。そして，コーエンのκ係数によって一致率を算出した。その結果，13項目での3人の一致率の平均はκ=.913（.776から1.000の範囲）であった。

(4) 分析方法　それぞれの場面内において，乳児と母親の各行動の生起率（期待値；P exp）を算出した（生起率=ある行動Aの生起した数 / 分析対象時間（秒単位））。次に，乳児行動の母親行動への連鎖にSackett（1979）の時系列分析を用いた。ここでは，母親行動へ連鎖する乳児の微細な視線の動きをとらえるために，両者間の連鎖を1秒単位で求める手法（real time sequential analysis）を用いた。すなわち，母親の行動にかかわりなく起きる，乳児のある行動Aの生起率と，母親のある行動Bの1秒遅れの時点で乳児行動Aが観察された確率（連鎖率；P obs）とを求め，その両者を比較し，その差によって連鎖の強さを示すという手法である（連鎖率=母親行動Bの1秒後に生起した乳児行動Aの数 / 乳児行動Aの生起した数）。なお，Allison, & Licker（1982）の主張に従いZ1に変換した値も用いた（須田，1995）。

$Z1=Zs/(1-Pc)^{1/2}$　　Pc：基準行動の無条件確率

$Zs=(P\ observed-P\ expected)/SD\ expected$

$SD\ expected=\{P\ exp*(1-P\ exp)/N\ total\ criterion\}^{1/2}$

結果・考察

(1) 乳児の交互注視の出現時期

まず，乳児の注意の方向性に着目して，それぞれの相互交渉の生起時間の変化を検討する。すなわち，二項的相互交渉，三項的相互交渉のうち，乳児の交互注視が見られない場合と，母親の誘いかけに乳児が交互注視を伴って応答する場合とが生起した総時間量を，各月齢ごとにコーディングシート上でカウントした。その結果をTable 2に示す。どの事例においても，二項的相互交渉と，

Table 2　*各相互交渉の総生起時間*

		7カ月	8カ月	9カ月	10カ月	11カ月	12カ月
	二項的	9	46	33	59	38	30
A	三項的(交互注視なし)	94	90	117	44	49	49
	三項的(交互注視あり)	0	0	49***	73***	67	60*
	二項的	78	63	36	64	59	69
B	三項的(交互注視なし)	42	77	88	87	122	102
	三項的(交互注視あり)	0	3	53***	47**	46	62***
	二項的	32	30	54	46	25	0
C	三項的(交互注視なし)	69	82	70	48	70	47
	三項的(交互注視あり)	0	0	11	39***	151***	180***
	二項的	24	25	112	88	81	94
D	三項的(交互注視なし)	46	96	34	69	51	30
	三項的(交互注視あり)	0	9	7***	80	66**	60**
	二項的	60	40	33	61	51	22
E	三項的(交互注視なし)	42	126	50	125	30	50
	三項的(交互注視あり)	0	0	5	45	50***	95***
	二項的	101	11	24	0	19	5
F	三項的(交互注視なし)	117	68	88	145	15	35
	三項的(交互注視あり)	0	0	7	132***	5	121***
	二項的	169	124	126	117	102	0
G	三項的(交互注視なし)	132	157	137	148	92	168
	三項的(交互注視あり)	0	0	51	80	131**	99***

注．数値は分析場面(600秒)で生起した時間(秒)である。アルファベットは母子名である。
*p<.05，**p<.01，***p<.001

乳児の交互注視が伴わない三項的相互交渉では一貫した結果は得られなかったが，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉は，8カ月（母子B, D）もしくは9カ月より出現した。そこで，母子B, Dを対象に，母親の「指示的働きかけ」の5秒以内に，乳児の「母親への注意」「母親の示す事物への注意」とが連鎖する確率を，8カ月と9カ月で求めたところ，両ペアとも9カ月においてのみ期待値よりも高い連鎖が確認された（Z1 =母子B, 8.09: 73.94, $p < .001$, 母子D, 6.98: 15.86, $p < .001$）。また，ほかの母子においても，9カ月以降の月齢において，母親の「指示的働きかけ」の5秒以内に，乳児の「母親への注意」「母親の示す事物への注意」とが連鎖する確率は，期待値よりも高いことが確認された（Table 2）。したがって，9カ月に，母親がおもちゃを提示して誘いかけると，その直後に，乳児は，母親と対象物とを交互に注視して応答するといえる。これは，9カ月頃から，母親の見ている対象物に乳児も注意を向けて，同一の対象物に関わり合えることを示唆する。しかし，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉が9カ月頃に出現した当初，その生起時間は非常に短い（Table 2）。個人差はあるものの，それが，どの母子も12カ月頃になると，長く生起させる傾向がみられた。Bakeman, & Adamson（1984）が示唆するように，乳児の交互注視を伴った相互交渉は，徐々に成立することが推測される。

(2) 乳児の交互注視を伴った相互交渉の成立プロセス

では，この乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉は，どのように出現し成立していくのだろうか。その出現のプロセスを事例ごとに記述する。なお，これらはコーディングシートをもとにし，必要に応じてビデオ映像でも確認した。

〈母子A〉　7，8カ月では，母親がおもちゃを提示すると，そのおもちゃを見て手を伸ばすことはあっても，母親を見ることはなかった。ところが，9カ月時，二項的相互交渉（母親が乳児の名前を呼んで乳児の注意を母親に向けさせ一瞬見つめ合う）で母親がおもちゃを提示すると，乳児がそのおもちゃと母親とに交互に視線を移し，それを受け取って遊ぶ様子が示された。

〈母子B〉　8カ月に，乳児が注意を向けているおもちゃを，二人で操作しているときに，母親が別のおもちゃを提示すると，乳児は1度だけそのおもちゃと母親とを交互に注視し少しの間（3秒）触った。ところが，9，10カ月に，母親が二項的相互交渉（乳児の身体動作を模倣する）でおもちゃを提示すると，乳児が交互注視をして，そのおもちゃを手に持って遊び始めるようになった。

〈母子C〉　7，8カ月では，母親がおもちゃを提示すると，そのおもちゃと別のおもちゃの間では何度も視線を走らせるが，母親を見ることはなかった。9カ月に，母親が，二項的相互交渉（乳児の発声に母親が声を返し二人で一瞬見つめ合う）でおもちゃを提示すると，乳児は，そのおもちゃと母親とに交互に視線を移し，それを持って遊ぶようになった。

〈母子D〉　すでに8，9カ月において，母親がおもちゃを提示すると，乳児は，そのおもちゃと母親とを交互に注視し，それを短い時間触る様子が見られた（9秒と7秒）。10カ月に，母親が，二項的相互交渉（乳児と母親が顔を近づけて一瞬見つめ合う）でおもちゃを提示すると，乳児は，そのおもちゃと母親とに交互に視線を移し手に持って遊ぶ時間を急激に増加させた。

〈母子E〉　9カ月に，乳児はおもちゃと母親とを交互に注視し，5秒間だけそれを触っていたが，10カ月に，母親が二項的相互交渉（乳児と母親が一瞬見つめ合う）でおもちゃを提示すると，乳児がそのおもちゃと母親とに交互に視線を移し手に持って遊んだ。

〈母子F〉　8カ月では，母親がものを提示すると，それに視線を走らせることはあったが，母親の提示したおもちゃと母親とに交互注視が見られたのは9カ月であった。10カ月になると，交互注視をして遊ぶ時間を急激に増加させたので，コーディングシートとビデオ映像を見たところ，乳児がものを提示する行為が4回確認された。このとき，乳児が提示したおもちゃを母親がもらい，今度は母親が別のおもちゃを提示すると，乳児はそれを交互に注視してから受け取る様子が観察された。

〈母子G〉　7，8カ月に，母親が二項的相互交渉でおもちゃを提示したが，乳児はもののみに注意を向け，母親を見ることはなかった。9カ月に，二項的相互交渉（乳児と母親が一瞬見つめ合う）で母親がおもちゃを提示すると，乳児がそのおもちゃと母親とに交互に視線を移し，それを受け取って遊ぶ様子が見られた。

以上の内容を整理すると，9カ月頃では，乳児が交互注視を行って対象物で遊ぶ場面は，母親が，二項的相互交渉の中でおもちゃを提示したときに出現する傾向を窺うことができる。このことは，たとえば見つめ合いのような二項的相互交渉が成立し，そのとき母親が，乳児の視線を対象物に誘うことで，母親 - 対象物 - 乳児の関わりが展開しやすいことを示唆する。そこで，各母子ごとに，すべての月齢を対象に，二項的相互交渉の後，1秒以内に乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉が連鎖する確率を求めた。その結果をTable 3に示す。個人差はあるものの，9，10，11カ月で，二項的相互交渉と，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉との連鎖が確認された。7，8カ月と12カ月では連鎖は見られなかった。9カ月から11カ月の期間のみ，二項的な状況から引き続いて，乳児が母親と対象物との両方に注意を向けた遊びが展開することが明らかとなった。つまり，7，8カ月頃の母子の関わりは，二項的な遊びが主流であるが，9カ月頃から，母親が提示した対象物と母親とを交互に注視できるように

Table 3　*二項的相互交渉と三項的相互交渉（交互注視あり）とが連鎖した母子数*

7カ月	8カ月	9カ月	10カ月	11カ月	12カ月
0	0	3	6	2	0

注．9カ月に連鎖した母子名：A, C, G　10カ月：A, B, C, D, E, G
11カ月：D, G　連鎖の確率は期待値よりもp<.001の水準で高いことを確認した。

なり，これが，1つの対象物に共に注意を向けた母親―対象物―乳児の相互交渉を可能にする。だたし，9カ月から11カ月では，二項的な中で母親がおもちゃを提示したときに，乳児は，交互注視を出現させる傾向にあることが分かった。したがって，この移行期間を経て，12カ月では，二項的な関わり合いを十分に行わなくても，乳児は対象物を用いた母親の誘いかけに自発的に応じることができると考えられる。すなわち，乳児の交互注視を伴った相互交渉は12カ月頃に成立すると推測されるので，以下で検討することにした。なお，母子Fは，二項的相互交渉と，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉での連鎖は見られなかった。これは，8カ月以降の二項的相互交渉の生起時間がほかの母子よりも著しく短く（Table 2），二項的相互交渉自体があまり展開しなかったためと思われる。

(3) 母子の情緒表出場面の変化

もし，9カ月から11カ月頃に乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉へと移行し，12カ月頃に成立するのであれば，12カ月に近づくにつれて，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉のなかで，母子は情緒や声を表出すると推測される。なぜならば，生後1年に近づくにつれて，二項的相互交渉より，対象物を介した相互交渉でのほうが，乳児の情緒や声が表出しやすいことが示されており，情緒表出の場面が変化することは，相互交渉そのものの質の変化を物語る1つの指標と考えられるからである（Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984）。

乳児の情緒表出のうち，肯定的情緒は全ケースで表出が見られた。そのため，分析の対象は肯定的情緒のみを取り上げ，母親の働きかけの4項目すべてを対象にして，その内のどれか1つの働きかけの1秒後に，乳児の「不快でない声だし」もしくは「肯定的情緒」が連鎖する確率を求め，さらに，Z1値に変換して期待値よりも高い項目を確認した。その上で，それらの項目が，各々の相互交渉の中で表出した秒数をカウントした。その結果をTable 4に示す。数値は，各月齢での表出総秒数における割合（%）である。なお，肯定的情緒と発声の両方において有意な連鎖が確認された場合は，各々の表出秒数の合計値の割合を提示した。

全体として，11，12カ月になるにつれて，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉での表出が顕著となった。非常に興味深い点は，二項的相互交渉で母親が声をかけると，乳児が声を出したり微笑したりする傾向は，月齢が低いときのみならず（たとえば，7，8カ月），11カ月頃になっても連鎖が高いことである。先のTable 3において，二項的相互交渉と乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉との連鎖が確認された月齢では，Table 4の二項的相互交渉での母子間の連鎖も高いことが示された。たとえば，母子Cでは，二項的相互交渉と乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉の連鎖は，9，10カ月でのみ示された（Table 3）。そして，発声や情緒の連鎖は，7カ月では二項的相互交渉の中でのみ示されるが，9，10カ月では，二項的相互交渉と乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉で示され，その後の月齢では，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉でのみ連鎖が示されるということである（Table 4）。9，10，11カ月頃は，二項的相互交渉が，1つの対象物に共に注意を向けた相互交渉にとって重要な役割を果たしていることが，この結果からも窺えた。

さらに，12カ月頃になると，母子間の声や肯定的情緒の連鎖は，主に，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉で示された。このことは，12カ月頃には，乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉への移行が完了することを示唆する。そこで，三項的関わりの成立を示す子どもの行動として，指さし（pointing），提示（showing），手渡し（giving）などが指摘されていることから（やまだ，1987），ビデオ映像に戻り，これらの行動が11，12カ月の乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉の分析場面中に出現しているかを確認した。その結果，母子Aでは，積み木の手渡しが始めて観察され，このとき，乳児は歓声を上げながらやり取りに参加する様子が観察された。母子Cでは，乳児は交互注視の後，母親に自分の持っていたおもちゃを提示しながら肯定的情緒を表出する様子が観察された。母子EとFでは，ボールのやり取りが観察され，ボールを投げるときに乳児は満面の笑みを見せた。したがって，9カ月頃に，母親の誘いかけに応じて乳児の交互注視が出現することで，母親が注意を向けた対象物に乳児も注意を向けることが可能となり，その後，移行期を経て，12カ月頃を交互注視を伴った三項的相互交渉の成立時期と考えることができよう。

なお，否定的情緒を表出したのは3ケースであった（母子B, C, F）。表出の状況についてビデオ映像にて確認したところ，母子Bは7カ月時37秒，8カ月時32秒のみ表

Table 4 *各相互交渉で母親の働きかけに子が声および肯定的情緒を表出して応答した時間の割合*

		7カ月	8カ月	9カ月	10カ月	11カ月	12カ月
A	二項的	0.0	13.9***	13.9***	11.2***	8.2	16.3
	三項的(交互注視なし)	16.7	8.3	5.6***	6.7***	16.4***	0.0
	三項的(交互注視あり)	—	—	8.3	7.9	16.4**	62.5***
	総秒数	30	36	36	89	122	80
B	二項的	24.0***	18.2***	1.1	30.5***	6.2	0.0
	三項的(交互注視なし)	0.0	3.6	12.6***	3.8	2.7***	15.4***
	三項的(交互注視あり)	—	0.0	10.3***	2.9***	1.8***	23.1***
	総秒数	50	55	87	105	226	91
C	二項的	19.4***	5.3	10.9*	2.9*	8.3	0.0
	三項的(交互注視なし)	8.3	22.8***	0.0	2.9	0.0	0.0
	三項的(交互注視あり)	—	—	1.8*	19.0*	54.2***	84.1***
	総秒数	108	57	110	105	24	151
D	二項的	0.0	5.5	73.1***	46.7***	7.2	0.0
	三項的(交互注視なし)	0.0	40.7***	3.7	5.7	22.4	3.7
	三項的(交互注視あり)	—	0.0	0.9	31.1*	24.8***	17.1***
	総秒数	6	91	108	122	125	82
E	二項的	0.0	5.3	9.2***	45.9***	10.9	11.9
	三項的(交互注視なし)	0.0	9.8	0.0	2.6	0.0	0.0
	三項的(交互注視あり)	—	—	0.0	35.7***	4.9	77.4***
	総秒数	98	132	76	196	184	84
F	二項的	88.4***	2.4	3.4	0.0	5.8	0.0
	三項的(交互注視なし)	2.9	5.5***	8.8***	38.2**	1.7	0.0
	三項的(交互注視あり)	—	—	0.7	14.7	5.0	69.7***
	総秒数	69	127	147	34	120	76
G	二項的	50.0***	44.4***	54.3***	40.3***	30.0***	0.0
	三項的(交互注視なし)	1.0	5.1	8.6	25.2	8.6***	28.5***
	三項的(交互注視あり)	—	—	18.1***	5.0***	35.9***	22.8***
	総秒数	100	99	116	119	220	123

注．総秒数とは，各月齢の中で，乳児の不快でない声だし，肯定的情緒，もしくはその両者が表出した合計値である。それ以外の数値は，合計値の割合（%）である。なお，—は生起していないことを指す。アルファベットは母子名である。
*p<.05, **p<.01, ***p<.001

出が見られ，このとき母親は観察者への人見知りと解釈していた。また，母子Cは8カ月時38秒のみ表出が見られ，これは乳児がうまく身体の向きを変えられないことへの不満の現れと母親が解釈し，実際，母親が抱き上げて乳児を立たせたところ泣き止んだ。母子Fは7カ月時42秒，8カ月時30秒，9カ月時41秒，10カ月時47秒，11カ月時40秒，否定的情緒の表出が見られた。特に，11カ月は母親が乳児の注意を向けたおもちゃに関わろうとする，もしくは，乳児が持っているおもちゃとは別のものを提示して誘うと，乳児が不快な声を出すか，視線を母親からそらす行為を頻繁に示していた。対象物に関連して否定的情緒の表出が見られたのは，この母子の11カ月のみであった。

全体的討論

本研究では，二項から三項への関わりの移行に，9カ月頃の乳児の応答の変化がどのように関連するかを検討した。その結果，9カ月頃になると，乳児が対象物と母親との間で注意を切り替える交互注視は，母親の誘いかけの直後に出現することが明らかとなった。しかし，この交互注視は，9，10，11カ月頃では，二項的な中で母親が提示したおもちゃへの応答として現れた。ところが，12カ月になると，二項的相互交渉が展開していなくても，母親の誘いかけに，乳児は即座に応答し，おもちゃと母親とを交互に注視しながら遊ぶことも明らかとなった。また，母親に応じて乳児が声や情緒を表出することも，12カ月頃に近づくにつれて，乳児の交互注視を伴って応答

する三項的相互交渉での表出へと変化していく様子が示された。これらの結果から，7カ月から12カ月では，二項的相互交渉が主に展開される7，8カ月頃から，9，10，11カ月頃，母親の誘いかけに応じて対象物と人との両方に注意を向けたり，情緒を表出したりできるようになるという乳児の応答性に変化が生じることで，12カ月頃に乳児の交互注視を伴った相互交渉が成立することが示唆された。

従来より，6カ月頃から生後1年までの間での二項から三項への移行には，奇妙な発達的なギャップがあるといわれてきた（Adamson, 1995/1999; Adamson, & Bakeman, 1985; Bakeman, & Adamson, 1984）。つまり，二項的相互交渉で過ごす時間が6カ月以降，徐々に減少する一方で，乳児が対象物と母親の両方に注意を向けながら関わることができるのは，生後1年頃と示されてきたからである。そして，この間は，乳児が注意を向けている方向に母親が合わせることで，ようやく三項的な相互交渉が展開するとみなされてきた。ところが，本研究の結果から明らかとなったことは，母親が対象物を使って誘いかけると，その対象物に乳児も注意を向けて三項的な相互交渉を展開することであった。したがって，本研究では，7カ月から12カ月において，乳児の応答性の変化を軸に，二項から三項への移行プロセスを示したところに意義があったと思われる。

また，本研究での結果で興味深かった点として，三項的な関わりへの移行における二項的相互交渉の役割について言及したい。特に，9，10，11カ月頃においては，乳児の応答的な交互注視を引きだすためには，まず二項的相互交渉の中で母子が関わった後，母親がおもちゃを提示することが重要であった。このことは，二項的相互交渉は母子が一体感を体験するための関わりであるばかりでなく，三項的関わりの出現において機能的な役割を果たしたと考えられる。ただし，1ケース（母子F）のみであったが，二項的相互交渉と乳児の交互注視を伴った三項的相互交渉での連鎖が見られず，乳児が注意を向けているおもちゃに合わせて母親が関わる中で，別のおもちゃを提示すると，乳児は交互注視をして応答する様子が見られた。また，二項的相互交渉も，母子間での見つめ合い，声のかけ合い，身体的な模倣と様々であった。このような移行形態における個人差が見られたものの，いずれの形態においても，母親が，乳児自身，もしくは乳児の関心事へ十分に関わっていることに，乳児が気づけるように働きかけていることの現れと考えられる。したがって，今後は，この移行形態における個人差を説明する要因や基準などをより考慮に入れた上で，二項的相互交渉の機能的役割についての検討が課題となるであろう。

さらに，本研究で得られた結果から2つの問題点を指摘したい。1つめは，情緒と後の象徴的コミュニケーションとの関連である。本研究から，乳児の肯定的情緒の表出が，交互注視を伴った三項的相互交渉の生起時間の長さと関連することが示唆された。三項的な関わりが後に発達する象徴的コミュニケーションの基盤となることは多くの研究者によって指摘されている（Tomasello, 1995 / 1999; Corkum, & Moore, 1995 / 1999, 1998；長崎，1993）。一部の母子ではあったが，母親に向かって乳児がものを提示したときに微笑を伴うことがあった。対象物に関係して，特に肯定的情緒が表出しやすいことをとらえて，Adamson, & Bakeman（1985）は情緒の機能化を指摘している。つまり，二項的相互交渉の中での母子の微笑み合いは，母子が一体感を体験するために，それ自体が重要なテーマであったが，対象物に関係した微笑は，共有している対象物へのコメントの役割を持つと考えられている。象徴的コミュニケーションへの移行において情緒がどのように働くかは，今後，より知見を積み重ねたうえで議論していきたい。2つめは，対象物を介して母子が声をかけ合ったり，乳児がおもちゃを提示しながら肯定的情緒を表出したりするような関わり合いの様態に着目することが，逆に，母親の誘いかけに応えない状況を際だたせていたことである。たとえば，一部のビデオ映像では（e.g., 母子Bの11カ月，母子Gの11，12カ月），乳児が母親と対象物との間で交互注視をした後に，その対象物に手を伸ばさず，自分が手に持っていた対象物で遊ぶことも示された。その後，母親が何度か誘うと，母親を見ることはあっても，今自分のしていることを止めることはなかった。この間，乳児は不快な情緒を出すわけでもなく，ただ応じなかったのである。本研究では，母子が関わり合う様態をとらえることを目的としたため，このようなエピソードについての詳細は定かではない。しかし，9カ月において，乳児が他者を意図的行為者として理解する能力を獲得していることを前提とすれば，母親の誘いかけている意図を了解しながら，乳児があえて応じないと考えられる。母子間の相互交渉のギクシャクしたように見える瞬間が持つ肯定的機能を重視することは，いくつかの研究からも示唆されており（Tronick, & Cohn, 1989; 鯨岡，1999），三項的な関わりにおける子どもの応じない姿の意味についても検討が必要であろう。今後とも，長期的に議論を展開していく予定である。

文　献

Adamson, L. B. (1999). *乳児のコミュニケーション発達 —— ことばが獲得されるまで*（大藪泰・田中みどり，訳）．東京：川島書店．(Adamson, L. B. (1995). *Communication development during infancy.* Boulder, Colo.: Westview Press.)

Adamson, L. B., & Bakeman, R. (1985). Affect and attention: Infants observed with mothers and peers.

Child Development, **56,** 582-593.

Allison, P. D. , & Licker, J. K. (1982). Analyzing sequential categorical data on dyadic interaction. *Psychological Bulletin,* **91,** 393-403.

Bakeman, R., & Adamson, L. B. (1984). Coordinating attention to people and objects in mother-infant and peer-infant interaction. *Child Development,* **55,** 1278-1289.

Bates, E., Camaioni, L., & Volterra, V. (1975). The acquisition of performances prior to speech. *Merrill-Palmer Quarterly,* **21,** 205-226.

Beebe, B., & Lachmann, F. (1994). Representation and internalization. *Psychoanalytic Psychology,* **11**(2), 127-165.

Bigelow, A. E. (1998). Infants' sensitivity to familiar imperfect contingencies in social interaction. *Infant Behavior and Development,* **21**(1), 149-162.

Bornsterin, M. H., Azuma, H., Tamis-LeMonda, C. S., & Ogino, M. (1990). Mother and infant activity and interaction in Japan and in the United States: I. A comparative microanalysis of naturalistic exchanges. *International Journal of Behavioral Development,* **13,** 267-287.

Bridges, L. J., & Connell, J. P. (1991). Consinstency and inconsistency in infant emotional and social interactive behavior across contexts and caregivers. *Infant Behavior and Development,* **14,** 471-478.

Corkum, V., & Moore, C.(1998). The origins of joint attention in infants. *Developmental Psychology,* **34** (1), 28-38.

Corkum, V., & Moore, C. (1999). 乳幼児における視覚的共同注意の発達. *ジョイント・アテンション ── 心の起源とその発達を探る* (pp.57-76) (大神英裕, 監訳. 香野 毅, 訳). 京都：ナカニシヤ出版. (Corkum, V., & Moore, C. (1995). In C. Moore, & P. J. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development.* Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.)

Harding, C., & Golinkoff, R. (1979). The origins of intentional vocalizations in prelinguistic infants. *Child Development,* **50,** 33-40.

Jasnow, M., & Feldstein, S. (1986). Adult-like temporal characteristics of mother-infant vocal interactions. *Child Development,* **57,** 754-761.

Kaye, K. (1993). *親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするか* (鯨岡俊・鯨岡和子, 訳). 京都：ミネルヴァ書房. (Kaye, K. (1982). *The mental and social life of babies.* Chicago: University of Chicago Press.)

Kaye, K., & Fogel, A. (1980). The temporal structure of face-to-face communication between mothers and infants. *Developmental Psychology,* **16** (5), 454-464.

久保田正人. (1993). *二歳半という年齢 ── 認知・社会性・ことばの発達.* 東京：新曜社.

鯨岡 峻. (1997). *原初的コミュニケーションの諸相.* 京都：ミネルヴァ書房.

鯨岡 峻. (1999). *関係発達論の展開.* 京都：ミネルヴァ書房.

Lester, B., Hoffman, J., & Brazelton, T. B. (1985). The rhythmic structure of mother-infant interaction in term and preterm infants. *Child Development,* **56,** 15-27.

Messinger, D S., & Fogel, A. (1998). Give and take: The development of conventional infant gestures. *Merrill-Palmer Quarterly,* **44** (4), 566-590.

Millar, W. S. (1988). Smiling, vocal and attentive behavior during social contingency learning in seven and ten months old infants. *Merrill-Palmer Quarterly,* **34,** 301-325.

長崎 勤 (1993). 健常乳幼児とダウン症乳幼児における相互的注視行為の発達 ── 追随注視による共同注視とアイコンタクトの成立過程の分析を通して. *教育心理学研究,* **41,** 161-170.

Newson, J., & Newson, E. (1975). Intersubjectivity and the transmission of culture. *Bulletin of the British Psychological Society,* **28,** 437-445.

Saarni, C., Mumme, D. L., & Campos, J. J. (1998). Emotional development: Action, communication, and understanding. In N. Eisenberg (Volume Ed.), *Handbook of child psychology* (5th ed.), *Vol.3: Social, emotional, and personality development* (pp.237-309). Chichester: John Wiley & Sons.

Sackett, G. P. (1979). The lag sequential analysis contingency and cyclicity in behavioral interaction research. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development* (pp.623-649). New York: Wiley.

Stern, D. N. (1989a). *乳児の対人世界 ── 理論編* (小此木啓吾・丸田俊彦, 監訳. 神庭靖子・神庭重信, 訳). 東京：岩崎学術出版社. (Stern, D. N. (1985). *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology.* New York: Basic Books.)

Stern, D. N. (1989b). The representation of relational patterns: Developmental considerations. In A. J. Sameroff, & R. N. Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood: A developmental aapproach* (pp.52-69). New York: Basic Books.

Stern, D. N. (1995). *The motherhood constellation: A unified view of parent-infant psychotherapy.* New York: Basic Books.

須田　治. (1995). 情緒の調整にみられる幼児行動のダイナミック・システム. *発達心理学研究,* **6** (1), 48-57.

須田　治. (1999). *情緒がつむぐ発達 —— 情緒調整とからだ, こころ, 世界*. 東京：新曜社.

Suda, O., & Kawakami, K. (1980). Developmental study of social behavior in twin infants. *Japanese Psychological Research,* **22** (4), 178-187.

Sullivan, M W., & Lewis, M. (1989). Facial expressions during learning in 1-year-old infants. *Infant Behavior and Development,* **2**, 209-214.

Tarabulsy, G. M., Tessier, R., & Kappas, A. (1996). Contingency detection and the contingent organization of behavior in interactions: Implications for socioemotional development in infancy. *Psychological Bulletin,* **120** (1), 25-41.

Tomasello, M. (1993). On the interpersonal origins of self-concept. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge* (pp.174-184). Cambridge: Cambridge University Press.

Tomasello, M.(1999). 社会的認知としての共同注意. *ジョイント・アテンション —— 心の起源とその発達を探る* (pp.93-117) (大神英裕, 監訳. 山野留美子, 訳). 京都：ナカニシヤ出版. (Tomasello, M. (1995). In C. Moore, & P. J. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development.* Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associtas.)

Tomasello, M. & Farrar, M. J. (1986). Joint attention and Early language. *Child Development,* **57**, 1454-1463.

Tronick, E. Z., & Cohn, J. F. (1989). Infant-mother face-to-face interaction: Age and gender differences in coordination and the occurrence of miscoordination. *Child Development,* **60**, 85-92.

Vedeler, D. (1994). Infant intentionality as object directedness: A method for observation. *Scandinavian Journal of Psychology,* **35**, 343-366.

やまだようこ. (1987). *ことばの前のことば —— ことばが生まれるすじみち1*. 東京：新曜社.

Zeanah, C. H. & Osofsky, J.D. (1994). Introduction to constructions of the infant's representational world. *Infant Mental Health Journal,* **15** (1), 4-5.

付記

本論文は，東京女子大学大学院文学研究科に1997年度提出した修士論文を，一部加筆修正したものです。論文作成にあたりましては，中京大学古澤頼雄教授にご指導いただきました。また，東京都立大学須田治教授にも適切なご指導とご助言をいただきました。心から感謝いたします。最後に，研究にご協力いただきました皆様にも深謝いたします。

Tsukada, Michiru (Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University). *Development of Infants' Responses during Interactions with Mothers: The Transition from Dyadic to Triadic Interactions.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol. 12, No.1, 1 - 11.

This research examined the developmental progression from dyadic to triadic interaction, focusing on infants' coordination of their attention between a social partner and an object of mutual interest, and with emotional expression. In interactions of the mothers and 7 - 12 month old babies, 7 mother-infant pairs were observed in natural settings. Three kinds of interactions (dyadic, triadic with coordination of attention, triadic without cordination) were examined from a microanalytic veiwpoint. From 9 months, most infants became capable of coordinating attention in relation to their mothers' showing of objects. Up until 12 months, infants were able to quickly coordinate their attention to the showing or giving of objects, and to express positive emotion contingent on mothers' behavior. The discussion focused on how dyadic interactions may be a transition to triadic interactions, and on how affective communication may continue to be used. Finally, it was pointed out that infants may not be responding intentionally to their mothers.

【Key Words】 Mother-infant relationship, Infant development, 9 month-old, Dyadic interaction, Triadic interaction

1999.6.4 受稿，2000.11.28 受理

発達心理学研究
2001，第12巻，第1号，12-23

原　著

母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ

菅野　幸恵
（白百合女子大学文学部）

母親が子どもに対してもつ否定的感情は，子どもの成長や母親としての適応に悪影響を及ぼすだけなのだろうか。本研究では，母親が育児の中で当たり前に経験する感情として子どもに対する不快感情を取り上げ，不快感情が母子関係の中でポジティヴな役割を果たしている可能性について，不快感情の内容とそれに対する説明づけ（accounting）から記述的に検討した。まず，母親の不快感情は育児場面のどのような状況での，子どものどのような行動に対して生じているのかについて検討した。不快感情は就寝時や食事中など日常的課題場面での子どもの不従順な行動や，課題がない場面での以前と変化した行動に対して生じていた。次に受け止め方を不快感情と説明づけとの関連から検討した。母親は不快感情を契機に子どもの育ちや自らの関わり方を振り返っており，その振り返り方は課題の有無によって異なることが明らかとなった。日常的課題場面での行動に対して母親は自分のやり方を確認した上で，そのやり方を貫こうとしているが，課題なし場面での行動には譲歩的であることが明らかになった。二つの振り返り方により子どもの見方や自分の関わり方の安定や修正が図られていることが考えられた。
【キー・ワード】子どもに対する不快感情，母子関係，説明づけ（accounting），母親としての適応

問　題

母親が子どもに対してもつ否定的感情は，子どもの成長や母親としての適応に悪影響を及ぼすだけなのだろうか。本研究では，母親が育児の中で当たり前に経験する感情として子どもに対する不快感情を取り上げ，親子関係における不快感情の意義について再検討する。

母親が子どもに対して感じる否定的な感情は，マタニティブルー（池本・飯田・菊地・高橋・高橋，1986），産後の抑鬱（Cutrona, 1984；O'Hara, Neunaber, & Zekoski, 1984; Atkinson, & Rickel, 1984; Hisata, Miguchi, Senda, & Niwa, 1990），育児不安（牧野，1982），育児ストレス（佐藤，1988；佐藤・菅原・戸田・島・北村，1994）といった，母親の精神衛生の面で注目されてきた。しかし，そのような育児や子どもに対する否定的な感情やストレスは必ずしも常に異常心理と結び付くものではなく，多くの母親に経験されることである（佐藤，1988）。特に母親は日常生活の中で父親と比べ子どもや育児に対してアンビバレントな感情をもち（柏木・若松，1994），中でも専業主婦は有職主婦に比べるとそのような感情を強く持っている（永久，1995）。親は子どもに対していつも「よい」関わりばかりができるものではない（園田・数井・無藤・宇佐美，1995）。本来親子関係はダイナミックなものであり，その関係は親和的なだけでなく時には反発的な関係にもなる（根ヶ山，1995）。親にとって子はかわいいものであると同時に，親の生活を脅かす存在でもある（柏木，1995）のである。精神分析においては早くから親子関係の両極性を注目してきた。特にMahler, & La Perriere（1965）の分離個体化仮説では，母子間に対立関係が生じることは正常なかつ重要なプロセスであるとされている（根ヶ山，1995）。

にもかかわらず，日本では親は常に子どもに対していつも良い関わりをする存在としてあるべきだという面ばかりが強調され，「子どもをかわいいと思わない親」「子どもよりも自分のことを優先に考える親」はあってはならない存在として非難されてきた（山田，1997）。子どもの発育が悪ければそれはすぐに親（たいていの場合母親）の責任となり，子どもや育児に対する否定的感情は持ってはならぬものとされてきた。そうしたなか，大日向（1988）や牧野（1982）は育児不安や育児ストレスの研究を通して，母親の子育てに対する否定的態度が母親個人の責任にあるのではなく，伝統的性役割観とそれをよしとする社会構造によってもたらされたことを明らかにした。大日向や牧野の研究によって母親の否定的感情の存在が明らかとなったが，否定的感情が母子関係において積極的な役割を果たすことについて具体的な検討を行った研究はまだ少ないのではないだろうか。

近年，子育てを今まであまり触れられてこなかった側面から理解しようとする動きが出てきている（Trivers, 1972；根ヶ山，1995）。根ヶ山（1997）は，子育てを子別れの過程としてとらえ，親子の対立や分離に注目し，子の身体刺激に対する親の不快感情の増大が親子の分離を促進していることを明らかにした。また，子の退行とそれに続く親子の対立が子に新たな行動様式をもたらす（Rijt-

Plooij, & Plooij, 1993）ことや，子どもと離れてやりたいことができていると感じている母親ほど，育児不安を感じていないことも報告されている（牧野，1982）。いずれの研究でも今まで親子関係の中ではよしとされていなかった現象が，実は子育てによい結果をもたらすことを示している。本研究では，育児のなかで当たり前に知覚される感情として，母親の我が子に対する不快感情を取り上げ，不快感情が育児の遂行にポジティヴな役割を果たしている可能性について，母子関係が比較的密である段階の乳幼児期の母子を対象に検討していく。ここで本研究で取り上げる不快感情は，母子関係の中で当たり前に生起し，育児のある状況における子どものある行動に対して経験されるものであるとする。それは育児不安のように持続する状態ではなく，また必ずしも母親にとってストレスであると感じられるものでもない。さらにその感情は子どもがどの年齢になっても，その内容に変化があるとはいえ同じように経験されるものであると考える。

また本研究では不快感情のポジティヴな役割を検討するため，母親の受け止め方として説明づけ（accounting）に注目する。我々は，普段何かにつけ自分の行為や他人の行為を説明づける（南，1992）。説明づけとは目の前の事態の原因と結果についての推論や言い訳であり，人々は説明行為によって自分のしていることに合理性や正当性・一貫性を作り上げ（南，1996），その説明が次の場面の行為の土台となる（山田・好井，1991）。毎日の子どもとの生活は決して楽なものではない。子どもがどうして泣いているのか分からなかったり，うまくいかないことのほうが多いかもしれない。母親は目の前のどうしようもない現実に対して，自分の気を楽にしてくれる「ものの見方」を身につける（南・澤田・鹿島，1993）。それらは，論理的に一貫しているというよりは，その場しのぎであるかもしれないが，母親の生活の中では子どもとのにっちもさっちもいかない現実を切り抜ける有効な手段である。

本研究では，母親が育児の中で子どもに対して持つ当たり前の感情として不快感情を取り上げ，不快感情が育児の遂行や母子関係にポジティヴな影響を与えている可能性について，不快感情の内容とそれに対する説明づけから検討する。本研究では萌芽的段階として，母子関係における不快感情のあり方，具体的にはその構造や母親の受け止め方，について明らかにしていくが，その記述を重ねることにより育児における不快感情の果たす機能を示すことができ，その上で虐待のような極端な行動に結びつくような感情との違いについても言及できると考えている。

本研究では母親の子どもに対する不快感情の母子関係におけるポジティヴな影響について検討するが，それは以下の3点で重要だと思われる。第一に，親子関係を母親の視点で捉える点である。従来の親子関係に関する心理学的研究の大半は子どもの視点から親子関係について考察したものであり，“親”はもっぱら子どもの発達に影響を与えるものとして注目されてきた（柏木・若松，1994；大日向，1991）。だが，子どもが生まれると自動的に親として適切な行動が備わるのではない。近年親の発達（Demick, Bursik, & DiBiase, 1993; 柏木・若松，1994），親への移行（Deutsch, Ruble, Fleming, Brooks-Gunn, & Stangor, 1988; Levy-Shiff, 1994; Fledman, & Aschenbrenner, 1983），適応（Fleming, Ruble, Flet, & Wagner, 1990；氏家・高濱，1994；氏家，1996）など親に注目した研究が多くなされ，それらの研究の結果，親もまた新しい役割をとるなかで成長し（柏木・若松，1994），子どもとの相互作用を通じて自己概念を変革し母親として適応していく（Duetsch et al.,1988）ことなどが明らかになっている。さらに，父親よりも母親の方が親となることのインパクトを強く感じている（柏木・若松，1994；牧野・中原，1991）にもかかわらず，母親達の声は研究レベルに引き上げられることは少なかった（中山，1992）。そこで本研究では不快感情を切り口に母親たちの声を引き上げてみたい[1)]。

第二に，親子関係・子育てを反発的側面から捉える点を挙げる。従来親子関係においては，快感情をもつことが親和的で不快感情を持つことが反発的であると考えられてきた。本研究では，親和的側面だけなく反発的側面を検討し，親子関係における反発的側面の積極的意義を示す。

第三に挙げるのは，母子の生活を記述する点である。佐藤（1988）は，母親の精神衛生の視点からだけではなく，母親の生活の一般的な記述の視点から育児における母親のネガティヴな経験について研究することも重要であるとしている。また尾見・川野（1994）は現状の心理学の枠組みではあてはめにくかった人々の「生活」を丹念に記述していくことの意義を述べている。本研究では，母子の生活を不快感情という毎日の生活の中で経験されていることから検討していきたい。

以上のことから本研究では，育児における不快感情について以下の2点から検討する。

1）不快感情の内容の検討（分析1）不快感情が生起する育児場面の構造について，不快感情が生起した状況およびその時の子どもの行動から検討する。

1）母親としての適応を考える際，父親（夫）との関係が重要であることは最近の研究で明らかになっている。本研究であえて対象を母子関係に限定したのは，まず母子関係において母親の否定的感情がどのような意義をもっているのかを明らかにし，その上で夫との関係性などの考慮をしていったほうがよいのではないかと考えたからである。

2）説明づけの検討（分析2）分析1の結果明らかになった不快感情を母親がどのように受け止めているのかについて，説明づけから検討する。

方　法

調査対象　S市のコミュニティ保育「N」に参加しており，かつ2，3歳児のいる母親に面接調査の依頼をし，70名中34名から調査協力の承諾を得た。今回はそのうち24名と筆者と知り合いの母親の計25名が調査対象となった。2，3歳児の母親を対象としたのは，いわゆる反抗期にあたる子どもに直面している母親の方が，子への否定的感情を語りやすいのではないかということと，育児不安や育児ストレスの研究においても概してその年齢の母親を対象にしていること（例えば牧野，1982；佐藤，1988；田中，1994，1997など）から判断した。調査対象者の主な属性は以下の通りである。母親の年齢（調査時）は，平均で33.3歳（25－43歳），ほとんどが専業主婦であり（25名中20名），フルタイムの就業者はいない。子どもの年齢は，平均で3.85歳（1歳5カ月－12歳11カ月），分布は，0－1歳：7（9.3%）[2]，2－3歳：37（49.3%），4－6歳：23（30.7%），7歳－：8（10.7%）となっており，対象となった子どものほとんど（87.7%）は育児不安や育児ストレス研究の対象となっている0－6歳にあてはまる。2，3歳児のきょうだいに対する語りも分析の対象としたため，子どもの年齢に幅ができることとなったが，今回はこのまま分析することとした。その理由は，前述の通り不快感情は子どもの年齢に関係なくどの母親でも経験するものであり，今回は全体として不快感情とはどのようなものであり，母親はそれをどのように受け止めているのかについて検討することを目的としていること，親子の関係性というものは単に一対一で出来上がるものではなく，きょうだいがいる場合にはその関係を無視することはできないのではないかと考えたからである。

調査時期と場所　1996年6月から8月の間に大学内の実験室で実施した。25名中5名については筆者が家庭に訪問して面接を行った。

手続き　著者が個別に育児や子どもに関する内容の半構造化面接を行った。澤田（1995）は面接の場を作るための要件の一つとして「自分とは異なる世界が存在していることを意識する」ということを挙げている。筆者は未婚で育児の経験はない。そこで今回の面接で筆者は，育児の先輩である母親たちから教えてもらうという心つもりで面接に臨んだ。自分の知らない経験したことのない世界を見聞きする機会として捉えたのである。そのことは面接のはじめに，「育児の先輩から後輩に教えるつもりでお話ししてください。」という言葉で伝えた。そのため相手に対する評価的言動やアドバイスは極力避けた。面接は十分にラポールをとった上で開始し，終始リラックスした雰囲気で行われた。「イヤになること」に関する話しも，母親には「どんな母親でも育児をしていく上では子どもをかわいいと思うときとイヤだと思うときの両方がある」ということを確認した上で，はじめに前者の話しをその後で後者の話しをしてもらうようにした。

面接内容はすべて調査対象承諾の上，カセットレコーダーに録音した。面接時間は対象者一人あたり30分から80分であった。面接内容はすべてテープに記録した上で逐語録にし，分析の対象となる言語化資料とした。

分析の枠組み作り　分析の対象となるのは，「子どものことをイヤになるのはどんな時ですか」という質問に対する母親の語りである。今回は母親が不快感情をもった出来事を1エピソードとして計107のエピソード[3]を得た。本研究では各エピソードを不快感情が起こった状況・その時の子どもの行動・それに対する母親の説明づけの3点から分析する。そのため面接で得られた全てのエピソード（107）を対象に，以下の作業を行った。①カテゴリの作成：まず，各エピソードにおいて不快感情をもたらした行動と状況それぞれに注目し分類を行い，まとまったグループに名前をつけそれを状況および行動カテゴリとした。次に同じ107のエピソードを最終的にどう結論づけたかに注目し，同じく分類を行い説明づけカテゴリを作成した。分類作業はパイルソート法のボトムアップソート（Weller, & Romey，1988）に準拠した方法で行った。具体的にははじめに小さなグループをつくり，さらに可能なものは上位のグループにまとめグループの名前をつけた。上位グループをつくるのは，母親の語りを活かせるよう最小限にとどめた。カテゴリ名は，先行研究（前田・上田，1987；佐藤，1988など）も参考にした。また作成したカテゴリは子どもの年齢や個人の偏りがないように配慮したが，カテゴリ全体の内容は，今回対象となった年齢の母子関係において特徴的な子どもの行動やそれに対する母親の反応を示したものであることを確認しておく。②双対尺度法の実施：作成したカテゴリ間の関係を見るために，107（エピソード）×61（行動カテゴリ28，状況カテゴリ13，説明づけカテゴリ20）の1/0データマトリックスを双対尺度法により整理した。双対尺度法の計算には，井上（1993）の解析プログラムPATTERN 3（1991版）を使用した。双対尺度法とは数量化Ⅲ類に類似した方法で，行と列に同時に最適尺度化を行うものである。従って，双対尺度法では行変数（ここではエピソード）と列変数（カテゴリ）を同一空間上で解釈することができる。この分析により，各カテゴリの関

2）数字はエピソードの数，（　）内は子どもの総数に対する割合。
3）この質問に対する答えの中には，我が子に対する不快感情とよその子どもに対する不快感情の双方が含まれている。従って分析の枠組み作りのために使用した107のエピソードには，我が子とよその子双方に対する不快感情が含まれていることになる。

Table 1　*カテゴリの名称および定義と頻度*

項目	カテゴリ	定義	頻度	%
状況	子ども同士	自分はその輪の中に入っていない，我が子同士のやりとり	6	9%
	日常的課題がない場面	日常的課題がない状況	16	25%
	母親の状態	母親自身の状態だけが問題になっている状況 ex) 疲れている	3	5%
	交渉なし	自分とは交渉がない子ども（母子）をたまたま見かけている状況	0	0%
	他の母子	公園など他の母子との相互交渉場面	4	6%
	うちに遊びに来て	よその子がうちに遊びに来ている状況	0	0%
	日常的課題場面	母親もしくは子どもに達成すべき明確な課題がある状況 ex) 就寝時，忙しい	36	55%
行動	暴力・意地悪	他児の我が子や他児に対する暴力や意地悪	0	0%
	泣く	泣く	2	3%
	同胞や他児とのトラブル	我が子の同胞や他児への自己主張や意地悪	8	12%
	裏表のある行動	親のいないところで悪いことをする	2	3%
	非社交的行動	引きこもりや逆に過度に愛情を示す	0	0%
	常識のないこと	常識のないことをする	0	0%
	生活習慣に関する不従順	生活習慣を守れない，できない	11	17%
	無理な要求	ぐずる・駄々をこねるなど母親に無理な要求をする	22	34%
	口答え	母親に対して口答えする	3	5%
	行動 free	行動は関係ない	3	5%
	似ている	自分や我が子のイヤなところに似ている行動	2	3%
	好みの主張	好き嫌いの主張	1	2%
	接し方	他の母親のその子どもへの接し方	0	0%
	べたべた	ベタベタ甘えてくる，後追い	6	9%
	ぐずぐず	ぐずぐずのろのろした行動	2	3%
	いたずら	いたずら	3	5%
説明づけ	子どもに原因を帰属	子どもの能力や性格に帰属 *注意力散漫なんですよね (36)*	12	18%
	我慢・遠慮	相互作用の相手に対する遠慮の語り *あんまり余計なことも<中略>近所同士だからお互い角が立ちますよね (51)*	1	2%
	批判	相互作用の相手に対する批判的語り *親はどういうしつけをしてるんだ (2)*	0	0%
	補完	子どもの不快ではない他の部分についての語り *その子もすごくいいところがやっぱしあるんで (98)* *真ん中は一番怒られないかもしれないかな (80)*	3	5%
	開き直り・いいわけ	事態をこれ以上どうしようもないとする語り *そういうのいけないなと思うんだけど，毎日のことだとそう耐えていられない (102)*	11	17%
	反省・後悔	自分の対応について反省するような語り *私が変わらないと子どもも変わらないのに (4)*	4	6%
	ほっておく	子どもを突き放す語り *勝手にしなさいみたいな (77)*	3	5%
	確認	我が子の行動について確認するような語り *自分の子はやっていないかしら (47)*	0	0%
	子どもの気持ち	子どもの気持ちについての語り *寂しいのかなとか思いますけどね (16)*	14	22%
	気にしない	その出来事にあまりこだわらない語り *泣いてないからまーいいやー (61)*	0	0%
	見通し	事態収拾について先を見越すような語り *結局怒られて寝るんじゃないから，眠たくなって寝るから (91)*	4	6%
	迷い	事態に対してどの様に対応するのか悩んでいる語り *自分を見つけてくれるにはどうしたらいいかな (44)*	7	11%
	自分自身に原因を帰属	自分に原因があるとする語り *私が叱りすぎたせいかな (25)*	2	3%
	どうして	事態が起こってしまったことに対する訴えの語り *なんでこんなになっちゃったんだろう (35)*	4	6%

注．斜体は，母親の語りの例。(　) の数字は，エピソード番号を示している。

係を全体的に捉えることができる。双対尺度法の結果から，カテゴリの内容を検討し同じカテゴリとして統合してもよいと判断したカテゴリをまとめ[4]，状況，行動，説明づけの3項目計37カテゴリを得た。各カテゴリの名称と定義はTable 1に示した[5]。

分析対象　今回は面接で得られた107のエピソードのうち母親が我が子に対して不快感情をもった66のエピソードを分析の対象とする。以下の分析ではエピソードが分析の単位となる。またエピソードの内容が3項目で分析するのに不十分であった一つのエピソード[6]を分析の対象から外し，以下の分析では計65のエピソードについて3項目37カテゴリにより整理する。

結果と考察

予備的分析　現象の基礎的把握

分析の枠組作りで得た各カテゴリの頻度を算出し，本研究で扱う現象の基礎的把握を行った。各カテゴリの頻度はTable 1の通りである（以下文中で使用する具体的なカテゴリ名は「　」で示す）。状況に関してみると，母親が不快感情をもつ状況としては「日常的課題場面」や「課題がない場面」での頻度が高く，それと「他の母子」や「交渉なし」での頻度を比べると，母親は我が子に対する不快感情を他児やその母親がいる場面ではあまり経験しないことが分かる。行動に関してみると，「非社交的行動」や「暴力・意地悪」といった行動に対して不快感情を持っていない。佐藤（1988）は母親に育児ストレスを与える行動として我が子の反社会性，非社会性を挙げていたが，不快感情をもたらす行動としては我が子の反社会性，非社会性に関するものは見られない。このことは育児ストレスと不快感情の違いを示しているのかもしれない。

分析1　不快感情の内容

分析1－1　不快感情が起こる状況と子どもの行動　ここではまず，不快感情とはどのような内容のものであるのかを検討するために行動および状況の関連を分析する。予備的分析で得た行動および状況カテゴリについて，各エピソードに該当するものを符号化し[7]，65（エピソード）×23（行動カテゴリ16，状況カテゴリ7）の1/0データマトリックスを得た。このデータマトリックスから頻度が全体の5%に満たないカテゴリを除き，65（エピソード）×12（行動カテゴリ7，状況カテゴリ5）の1/0データマトリックスを双対尺度法により整理した。その結果，状況のうち「母親の状態」と行動の「行動free」，状況「子ども同士」「他の母子」と行動「同胞や他児とのトラブル」がそれぞれ対応してⅠ軸負方向に偏って布置された[8]。このような偏りがあらわれたのは，それぞれのカテゴリの結びつきが強いためであると考えられる。つまり，この結果は母親の状態が悪いときは行動に関係なく不快感情が起こり，他の母子がいる場面や同胞同士の場面では子ども同士のトラブルにのみ不快感情が起っていることを示している。残りのカテゴリについて検討する前に，まずこれら5つのカテゴリについて以下で検討する。母親が不快感情を持つ子どもとして，母親自身の状態が悪い時の子ども，きょうだい間でのトラブルや，友達とのトラブルを起こす子どもの三つが考えられる。典型的エピソードを示しながら議論を進める。

エピソード1（母親の状態が悪い）；自分が夕方で疲れているのに，私の後をちょこちょこついてきたりすると『もーうるさい』と思う。同じことしても朝は笑っていられたのに，夕方同じことされると無性に腹が立ったりする。

エピソード1の母親のように，母親自身の肉体的・精神的疲労が強い状況では母親は子どものどんな行動に対しても不快感情をもつ。また母親は，エピソード49のようなきょうだい間でのトラブルやエピソード15に見られるような友達とのトラブルに対して不快感情をもつ。

エピソード49（きょうだいけんか）；きょうだいけんかしてるとき。年も近いしけんかはしょっちゅう。何が原因なのかもよく分からないけど，けんかをしているのを見ると悲しくなる。

エピソード15（友達とのトラブル）；お友達と衝突したときに，もうちょっとちゃんと謝れればいいと思う。

次に他のカテゴリ間の関係を見るために，その偏りを考慮し，上記の5つのカテゴリ及び該当するエピソードを除き，52（エピソード）×7（行動カテゴリ5，状況カテゴリ2）について，再度双対尺度法により整理した。第Ⅱ軸までの寄与率は54.47%であった。結果はエピソードとカテゴリを2次元空間上に同時布置した（Figure 1）[9]。

4）統合したカテゴリは，双対尺度法を行った際に近くに布置されたものである。双対尺度法では近くに布置されるということは，同じ内容を表しているか，補完的なものであるかのどちらかであると考えられる。その点を考慮した上で，本研究では同じ内容であると判断したカテゴリを統合してまとめた。

5）最終的なカテゴリは妥当性の確認のため母子関係を研究している別の研究者に内容を検討してもらった上で決定した。具体的には生成したカテゴリと定義の内容が今回対象となっている年齢の子どもの行動および母親の反応として妥当であるかどうかについて検討してもらった。

6）分析の対象から外したエピソードは，今回使用したカテゴリを当てはめるには面接時の母親の語りが不十分であった。その母親の他の語りについて問題はなく，重要な情報が逃れている可能性は低いと考えている。

7）分析の対象となったエピソード（65）の約半数（28）について筆者と心理学専攻の大学院生との間で各カテゴリの一致率を検討した。最終的な一致率は状況：96.4%，行動：89.2%，説明づけ：85.7%となった。

8）この状態をFigure 1に当てはめると，ここにあげた5つのカテゴリが左側に偏って布置されている状態であると考えられる。

9）年齢により布置に方向性がみられるかについて検討したが，特定の方向性はみられなかった。

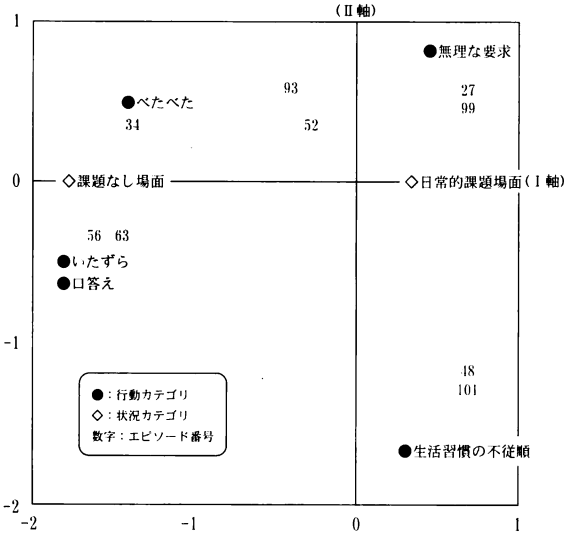


Figure 1　*不快感情をもたらす状況・行動およびエピソードの布値*

注．図中には典型的エピソードの番号のみ示した。
図中に示さなかったエピソードも同様に布置されている。

Figure 1 では第Ⅰ軸（X 軸）負方向に状況「日常的課題がない場面」が，行動では「口答え」「べたべた」「いたずら」が布置している。エピソードでは，63，56，34 がそれぞれ布置している。

エピソード 63；痛いとこをついてきたり理屈を言ったりする

エピソード 56；いたずらがすごくてなんでも持ってきちゃう。掃除しててもちょっと目を離すと掃除機を持っていってしまう。

エピソード 34；近づいてべたべたしてくる時にイヤだと思う。まとわりついてくると『やめてよー』って思う。

エピソード 63 では“理屈を言ってくる子ども”，エピソード 56 では“何でも持ってきちゃう子ども”，エピソード 34 では“べたべたしてくる子ども”にそれぞれ不快感情を持っている。日常的課題がない場面で母親は，口答えやべたべた，いたずらをする子どもに対して不快感情を持っていることがうかがえる。一方，Figure 1 の第Ⅰ軸正方向には，状況「日常的課題場面」，行動では第Ⅱ軸（Y 軸）正方向に「無理な要求」，負方向に「生活習慣に関する不従順」が布置している。エピソードでは，27，99，48，101 が布置している。

エピソード 27；喘息がひどいのに『水遊びをする』と言う。『具合が悪くなるからやめなさい』と言っても具合悪くならないと意地を張る。

エピソード 99；お店の中で『これ買って』とぐずる。ほっておくと勝手に開けてるときもある。

エピソード 48；一回注意したことを守れない時。玄関の戸を閉めなかったとか，テレビの電源をつけたままとか。

エピソード 101；夜なかなか寝ない時。9 時ならもう寝る時間がきても昼寝とかしちゃうとなかなか寝ない。

エピソード 27 では“具合が悪いのに水遊びをすると言う子ども”，エピソード 99 では“お店の中でこれ買ってとぐずる子ども”，エピソード 48 では“朝から友達の家に遊びに行きたいという無理な要求をする子ども”，101 では“夜寝て欲しいのに寝てくれない子ども”に母親は不快感情を持っている。Ⅰ軸正方向に布置された行動はいずれも母親の要求への不従順であると考えられる。

ここで，母親が不快感情を持つ子どもをまとめると，次の 5 つになる。①母親の状態が悪い（たとえば疲れているなど）時の子ども，②きょうだいげんかをしている子ども，③友達とうまく遊べない子ども，④日常的な課題はないがある特定の行動（例えば，べたべたしてくるなど）をする子ども，⑤日常的課題があるのに不従順な子どもの 5 つである。①②③は母親と子どもの直接のやりとりというより，どちらか一方の状態だけが問題になっているといえる。母親自身の問題や子ども（きょうだい，友達）同士の関係が問題になっており，母親と子どもの関係は直接的ではない。一方④⑤では，母子双方の直接のやりとりが見受けられる。これらの感情はいずれも母子の関係性の中で経験されるものであると考えられる。本研究では中でも母子双方の直接のやりとりがある④⑤に注目し，以下の分析ではこれに該当する 52 のエピソードについて検討していく。④⑤に注目するのは，育児における不快感情の構造について検討するためには母子の直接的な関係の中で経験される不快感情について検討することが重要であると考えたからである。

母親の受け止め方について検討する前に，日常的課題の有無は何を示すのかについて検討する。ここではその手がかりとして，発達的展望に関する語りに注目する。ここで発達的展望とは，母親の語りのうち過去から未来にわたる時間軸で子どもをとらえているものをさす。

分析 1－2　発達的展望との関連　母親の語りに現れた発達的展望[10]と，課題の有無について考察する。各エピソードに現れた発達的展望を抽出・分類し，未熟，成長，過熟，現在，過去，未来の計 6 つの発達的展望カテゴリを作成した。カテゴリの名称と定義を Table 2 に示す。本研究で分析の対象となっている 52 のエピソードのうち発達的展望が含まれていたものは 27 であった。

まず，日常的課題があるエピソードと課題がないエピ

10) 今回分析の対象とする発達的展望はすべて自発的に語られたものである。

Table 2　*発達的展望カテゴリの名称および定義*

カテゴリ	定義
未熟	子どもの未熟さを示す ex) まだ～だから
成長	子どもが成長しつつある様子を示す ex) だんだん～するようになってきた
過熟	子どもがもう十分大きくなったことを示す ex) もうお兄ちゃんだから
現在	問題となっている子どもの行動を現在・今に限定する ex) ～するのは今だけ
過去	過去の子どもの行動と今問題になっている行動を比較したり，過去の育ちについて言及する ex) 以前は～だったのに，今までは～
未来	子どもの将来の行動について予測する ex) 大きくなったら

Table 3　*発達的展望と状況カテゴリのクロス表*

状況カテゴリ／発達的展望	アリ	ナシ	未熟	成長	過熟	現在	過去	未来
日常的課題場面	13	23	3	4	0	3	3	0
日常的課題がない場面	14	2	0	2	2	3	6	1

注．アリ/ナシは，発達的展望の有無である。

ソードで発達的展望の出現率に差があるのかについて，カイ二乗検定を行った（$p<.001$）。日常的課題がない場面において発達的展望がなされていることが読み取れる。

次にそれぞれのエピソードにおいて，どのような内容の発達的展望がなされているのかについて検討する。以下の分析では発達的位置づけが含まれている27のエピソードを対象に進めていく。発達的展望と状況の関係を見るため，27（エピソード）×8（状況カテゴリ2，発達カテゴリ6）の1/0データマトリックスを作成し，そのデータマトリックスから企画分類法（西里，1980）により発達×状況カテゴリの頻度型データマトリックスを得た。企画分類法とは解析するデータをある仮説をもって作る方法である。例えば，特定の一属性と表のデータの関連を見たいときに，表のデータと属性をクロス集計してそのデータについて解析をするような方法である。発達的展望と状況カテゴリのクロス表をTable 3に示す。

日常的課題場面で母親の要求に不従順な子どもに対しては，子どもの未熟さや成長について言及している。例えば，エピソード48ではだんだん分かるようになってはいるもののまだ約束が守れない我が子について言及している。

エピソード48；一回注意したことを守れないとき。部屋のドアやトイレを開けっ放しにして出てくる。だんだん言わなくても分かるようになってきているんだけど，やっぱりめんどくさいというか，したいことが先なので，ついついでしょうね。

一方課題がない場面で母親がイヤだと思うことをする子どもに対しては，過去の行動や育ちと比較したり，もう大きく育ちきってしまったとしている。例えばエピソード34では今まで子どもがおかれていた状況を“甘えられなかった”とし，エピソード63では子どもを“対等な感じ”“もう六年生”というように受け止めている。エピソード16では兄の入園という生活の変化に伴い，今まで見られなかった行動が見られるようになってきたことがわかる。

エピソード34；今まで甘えられない状態だった。下の子がいたから，甘える暇がなかった。(手が) 空いたころには，もう6歳になっていて甘える状況じゃなくなっていた。

エピソード63；一番上の子はもう反抗期みたいな感じ。もうほとんど対等な感じ。結構痛いとこついてくるし，理屈を言うし。

エピソード16；お兄ちゃんが幼稚園に入って急にべたべたし始めた。それまでは平気で独りで遊びにいってたのに，急に離れられなくなって。

以上のことを母子の関係性をふまえ考察すると，日常的課題場面でのエピソードにおいて，母親は子どもを未熟なもの成長途上のものとして受け止めており子どもと母親の関係に変化はない。一方課題がない場面においては，子どもを過去・以前とは異なるものとして受け止め，子どもと母親の関係は変化している。日常的課題場面においても過去についての言及があるが，それは子ども自身の変化で，母親との関係の変化ではない（例えばエピソード48）。以上のことから考えると，課題の有無は関係

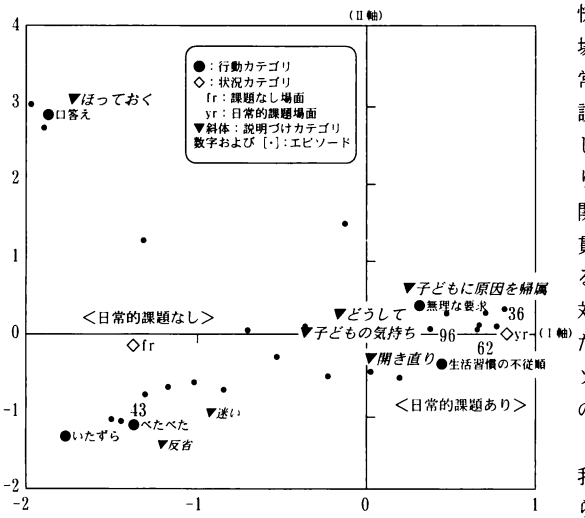


Figure 2　*不快感情とそれに対する説明づけおよびエピソードの布値*

性の変化の有無によるといえるのかもしれない。つまり課題がない場面においては関係性の変化によって不快感情が経験されていることが考えられるのである。今回のデータでは十分に検討する事が出来ないが，課題がない場面で発達的展望が多くなされていることも上記のことを支持する。今後検討するのに値する問題であると考えられる。

分析2　不快感情と説明づけ

ここでは分析1の結果明らかになった不快感情をもたらす子どもを，母親がどのように受け止めているのかを説明づけから検討する。不快感情と説明づけの関係を明かにするため52（エピソード）×14（行動カテゴリ5，状況カテゴリ2，説明づけカテゴリ7）のデータマトリックスを双対尺度法を用いて整理した。第Ⅱ軸までの寄与率は32.57%であった。分析1同様，結果を2次元空間上に同時布置した（Figure 2）。

まず，Figure 2の第Ⅱ軸正方向に行動「口答え」と説明づけ「ほっておく」が布置している。これは子どもの口答えにはほっておくという説明づけをすることを示している。「口答え」が課題なし場面の他のカテゴリと離れここに布置しているのは，母親の受け止め方が他のカテゴリと異なることを示している[11]。

次にFigure 2の第Ⅰ軸負方向には課題がない場面で不快感情をもたらす行動が布置し，正方向には日常的課題場面で要求に不従順な行動が布置している。この軸は“日常的課題のある，なし”に関連するものであると言える。説明づけの布置ではⅠ軸負方向に「反省」「迷い」が布置し，正方向には「子どもの気持ち」「どうして」「開き直り」「子どもに原因」が布置している。この軸は“自分の関わりを反省し，改めようとするか，自分の関わり方を貫こうとするか”に関するものであるといえる。そう見ると，母親は課題がない場面での子どもの特定の行動に対しては，自分の関わりややり方を反省したり，どうしたらいいか迷っていることがうかがえる。例えば，エピソード43では急にべたべたし始めた我が子に対する母親の戸惑いを見ることができる。

エピソード43；べたーっと甘えてくるのと，じーっと我慢している差が激しいのでどう対応していいのか分からない。

一方，課題場面で不従順な子どもには子どもの気持ちを察したり，不従順さを子どもの属性に帰属したり，自分のやり方を貫こうとしている。

エピソード96；父親が早く帰ってきたときは，父親が好きなんでなかなか寝ない。

エピソード36；ご飯食べるのにすごく時間がかかる。食べてても何かが気になって注意力散漫なんです。

エピソード62；トイレットトレーニング中が一番イライラする。とにかくイヤだ。

エピソード96では，父親好きな子どもの気持ちを察し，エピソード36では子どもの属性（注意力散漫）に原因を帰属している。エピソード62を見ると，トイレや食べないといった子どもの行動には自分の要求を押し通したい母親の姿が見て取れる。この軸は子どもの行動に対して譲歩的かそうでないかであるともいえる。課題がない場面での特定の行動に対しては譲歩的あるいは迷いが見られるが，課題がある場面での不従順に対しては自分の要求を押し通したいという姿勢が見られる。

以上のことから不快感情を持つことが母親にとってどのような意味があるといえるのだろうか。母親は，不快感情を契機に自分の育児や子どもの育ちについて振り返っていることが考えられる。育児というのは必ずしも報酬的なものではない（氏家，1995）。時には自分の育児のやり方に不安を覚えることもあるだろう。自分の要求に不従順な子どもや，特定の行動する子どもに出会った時に母親は，自分の今までの育児のあり方や子どもの育ちについて振り返るのではないだろうか。エピソード43の母親は，子どもがべたべたしてきたことで今までの育児のやり方を振り返っている。エピソード36の母親は性格特性を確認し，エピソード96の母親は子どもの内的状態を察している。エピソード62の母親は，子どもの不従順に直面しながらも自分のやり方を再確認している。この

11）ここに布置したエピソードの子どもの年齢は比較的年長であったが，今回はその数も少ないことやこの他には年齢による布置の偏りが見られなかったことから，子どもの年齢との関係についてはここではとくに扱わないこととする。

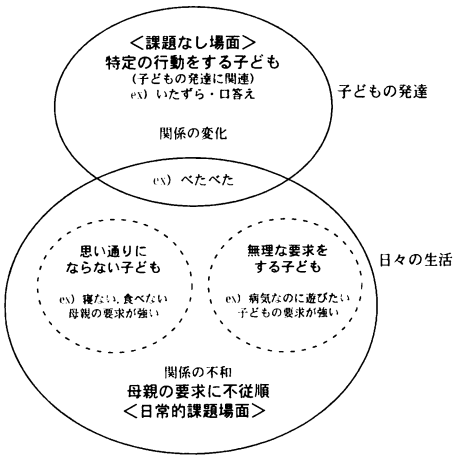


Figure 3　*母親に不快感情をもたらす育児生活の構造*

ように母親は，子どもに対する不快感情を契機に，子どもの状態や自らの関わり方について振り返り，子どもの状態の確認や自分の行動の安定，場合によっては修正を図っているのではないだろうか。さらに今回の結果では，課題の有無によって母親の振り返り方が異なることが示されている。課題がある場面で母親は自分の要求を押し通そうとする一方，課題がない場面では譲歩的になるのである。

全体的考察

母親の子どもに対する不快感情と受け止め方について検討した結果，母親の不快感情は日常的課題場面での不従順な行動，課題がない場面での特定の行動に対して生じ，母親は課題なし場面では子どもを過去とは異なったものとして受け止めていることが明らかになった。また受け止め方の分析からは，母親は不快感情を契機に子どもの育ちを展望したり，自らの育児について振り返っており，その振り返り方は課題の有無によって異なることが明らかになった。ここでは以上の結果から，母子関係における不快感情について，まず1）母親が不快感情を持つ育児生活の構造について検討し，次いで2）母子関係における不快感情の意義について検討する。

1）母親がイヤになる子ども

分析1，2の結果をふまえ，母親に不快感情をもたらす育児生活の構造をFigure 3に図示した。

まず，「日常的課題場面で母親の要求に不従順な子ども」と「課題がない場面で特定の行動をする子ども」の2つのタイプがある。ここでは前者から検討する。「要求に不従順な子ども」は，「思い通りにならない子ども」と，「無理な要求をする子ども」の二つに分けられる。「思い通りにならない子ども」では，子どもの要求に比べ課題を達成させようとする母親の要求が強い。例えば，母親が忙しいときにぐずぐずしているなどがそうである。逆に「無理な要求をする子ども」では母親の要求よりも課題達成を阻む子どもの要求の方が強いことが推測される。例えば，子どもが体の具合が悪いのに遊びに行きたいというエピソードは典型であろう。課題場面では課題を達成させようとする母親の要求とそれに対する子どもの要求とのせめぎ合いによって不快感情が引き起こされているのである。

一方，「課題がない場面で特定の行動をする子ども」は分析1-2の結果を考慮すると，発達的展望と関連していることが考えられる。子どもを過去とは異なったものとして受け止めることによって，母子の関係も変化し不快感情が生じている。例えば，べたべたしてくる子どもに不快感情をもっている場合，母親はもう大きくなったから抱っこしたりする必要はないと考えているが，子どもはべたべたしたいと思っているのかもしれない。「課題がない場面で特定の行動をする子ども」では，子どもの成長や生活上の変化に伴い母子の関係性が変化し不快感情が引き起こされているのである。

では「課題がない場面で特定の行動をする子ども」および「日常的課題場面で母親の要求に不従順な子ども」という二つのエピソードはまったく独立したものなのだろうか。今回の結果ではいくつかの子どもの行動が双方のエピソードにまたがって生じていた。例えば，「べたべた」してくる行動に対して母親は課題場面となし場面の双方で不快感情をもっていた。子どもの成長や生活上の変化に伴い，はじめは課題場面で不快感情をもっていた行動が，課題がない場面でも不快感情をもつようになるというように，母子の関係性の変化に応じて変わっていくのかもしれない。中でも子どもが母親に「べたべた」するような接近行動と反発性の関係の重要性については，Mahler, & La Perriere(1965)やRijt-Plooij, & Plooij (1993) で述べられている。その関係性の変化は，単純に子どもの年齢が上がるのと並行して起こるのではなく，その時々の状況や生活に応じて起こるものであろう。今回は乳幼児期の母子を中心に検討したが，今後は子どもの年齢を含め母子の関係性の変化について詳細に検討していきたい。

以上のことから考えると，不快感情は母子の間のズレによって引き起こされているといえるだろう。日常的課題場面では課題達成によって，日常的課題がない場面では関係性の変化によってズレが引き起こされているのである。母親は子どもに対してこうなってほしいという発達期待やよいこ像を持って育児を行っている（清水・前中・松永・依田，1994)。実際の生活の中はそんなにうま

くはいかない。思い通りにならない我が子や無理な要求をする我が子に直面し，また関係の変化によって特定の行動に対して，不快感情を持つのである。

2）母子関係における不快感情の意義

1）において不快感情は母子のズレによって引き起こされていることが考えられた。母親はズレによって引き起こされた不快感情を契機に母親は子どもの育ちを展望したり，自らの育児のやり方を振り返る。例えば，べたべたしてくる子どもに不快感情を持った母親は，子どもと自分との過去の関係（下の子がすぐに生まれてあまりかまえなかった）を思う。自分が忙しいときにぐずぐずしている子どもに不快感情を持つ母親は，子どもがそういう性格特性であることを再認識する。すぐに原因の所在や対処の仕方が分からないこともある。例えば，具合が悪いのに遊びたいという子どもに対しては，どうしてそんなに無理な要求をするのかわからないと嘆く。そうした不快感情を契機とした振り返りにより，その後の育児の方向性が定まるのではないだろうか。子どもの育ちや状態を確認することで明日の育児への情報が増え，自分の関わりについて内省し関わり方が安定することもあるだろうし，場合によっては改善する必要も出てくるかもしれない。母子の生活は実際には一致することよりもズレていることのほうが多いのかもしれない。そのようなズレが，子どもの育ちや自らの子育てを振り返るきっかけを作り，育児を方向づけるのである。

不快感情を経験することが契機となり育児が方向づけられるということは，子どもの発達や親自身の発達にもつながるかもしれない。例えば親は思い通りにならない我が子に直面し，子どもの内的状態を察することで子どもの他者性を認識する。関係の変化は子どもの自立を促しているかもしれない。また，育児が方向づけられることで親自身の発達も可能になる。親の行動は一旦身に付ければよいものではなく，親への適応はもっと持続的で積極的な発達的意味をもつ（氏家・高濱，1994）。そのように考えると，親としての適応にも不快感情は役に立っているのかもしれない。

本研究の目的は不快感情が育児にポジティヴな役割を果たしている可能性を示すことであった。結果から今後検討可能ないくつかの事柄を導き出すことができた。今後検討すべきこととして四点を挙げる。第一に母親としての適応のプロセスとして，不快感情の内容とその受け止め方がどのようなプロセスをたどるのかについて記述していくことを挙げる。例えば初めて子どもを産む女性がイヤな子どもをどのように受け止め，育児を行っていくのかについて，子どもの発達などとの関連性をふまえて検討することが可能であろう。第二に快感情との関連を挙げる。本研究では不快感情の役割について検討したが，不快感情が反発的関係を示すだけではないとしたら，快感情についても同様に親和的関係だけを示すことではないかもしれない。不快感情と快感情の関連を検討することで新たな知見が得られるだろう。第三に本研究では母親の側から母子関係における不快感情を検討したが，子どもにとって不快感情はどのような意味があるのか検討することを挙げる。子どもの側からの検討を加えることで母子のダイナミックな関係性がより明らかになると考える。最後に臨床的観点からの検討を挙げる。今回は育児を続けている母親に焦点を当てて検討したが，育児を続けていくことのできなくなった母親に焦点を当て，研究することも重要な課題であるといえる。

文　献

Atkinson,A.K., & Rickel,A.U. (1984). Postpartum depression in primiparaous parents. *Journal of Abnormal Psychology*, **93** (1), 115-119.

Cutrona,C.E. (1984). Social support and stress in the transition to parenthood. *Journal of Abnormal Psychology*, **93** (4), 378-390.

Demick, J., Bursik, K., & DiBiase, R. (1993). *Parental development*. Hillsdale, N J. : Lawrence Erlbaum Associates.

Deutsch, F., Ruble, D.N., Fleming, A.S.,Brooks-Gunn, J., &Stangor, C. (1988). Information-seeking and maternal self-definition during the transition to motherhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55** (3), 420-431.

Fledman, S.S., & Aschenbrenner, B. (1983). Impact of parenthood on various aspects of masculinity and femininity short-term longitudinal study. *Developmental Psychology*, **19** (2), 278-289.

Fleming,A.S., Ruble, D.N., Flet, G.L., & Wagner, V.V. (1990). Adjustment in first-time mother: Changes in mood and mood content during the postpartum months. *Developmental Psychology*, **26** (1), 137-143.

Hisata, M., Miguchi, M., Senda, S., & Niwa, I. (1990). Childcare stress and postpartum depression-an examination of the stress-buffering effect of marital intimacy as social support. *Research in Social Psychology*, **6**, 42-51

池本桂子・飯田英晴・菊地寿奈美・高橋三郎・高橋清久．(1986)．いわゆるマタニティブルーの調査 ── その1 出現頻度と臨床像．*精神医学*，**28** (9), 1011-1018.

井上裕光．(1993)．集計データの記述 (1)：データ記述法としての双対尺度法．*東京都立大学心理学研究*，**3**, 13-30.

柏木惠子．(1995)．親子関係の研究．柏木惠子・高橋惠子（編著），*発達心理学とフェミニズム* (pp.18-52).

京都：ミネルヴァ書房.

柏木惠子・若松素子.（1994).「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, **5**, (1) 72-83.

Levy-Shiff, R. (1994). Individual and contextual correlates of marital change across the transition to parenthood. *Developmental Psyochology*, **30** (4), 591-601.

前田和子・上田礼子.（1987). 親の知覚する子どもの問題行動の推移 ── 満1歳から11歳までの縦断的調査から. *小児保健研究*, **46**, 388-394.

Mahler, M.S., & La Perriere, K. (1965). Mother-child interaction during separation-individuation. *Psychoanalytic Quaterly*, **34**, 483 - 494.

牧野カツコ.（1982). 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安. *家庭教育研究所紀要*, **9**, 1-13.

牧野暢男・中原由里子.（1991). 子育てに伴う親の意識の形成と変容. *家庭教育研究所紀要*, **12**, 11 - 19

南　博文.（1992). 素朴心理学再考 ── ハイダーの着想からエスノメソドロジーの展開へ. *対人行動学研究*, **11**, 1-12.

南　博文.（1996). エスノメソドロジー. 浜田寿美男（編), *別冊発達20　発達の理論 ── 明日への系譜*（pp.135-154). 京都：ミネルヴァ書房.

南　博文・澤田英三・鹿島達哉.（1993). 母親の素朴な発達観の特徴と構造について（4）── 母親の素朴な信念の変遷とはたらき. *日本発達心理学会第3回大会発表論文集*, 313.

永久ひさ子.（1995). 専業主婦における子どもの位置と生活感情. *母子研究*, **16**, 50-57.

中山まき子.（1992). 妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識 ── こどもを〈授かる〉・〈つくる〉意識を中心に. *発達心理学研究*, **3** (2), 51-64.

根ヶ山光一.（1995). 子育てと子別れ. 根ヶ山光一・鈴木晶夫（編著), *子別れの心理学*（pp.12-30). 東京：福村出版.

根ヶ山光一.（1997). 子どもの身体性刺激に対する親の不快感情から見た子別れの心理機制 ── 大学生と幼児の比較. *日本心理学会第61回大会発表論文集*, 235

西里静彦.（1980). *質的データの数量化 ── 双対尺度法とその応用*. 東京：朝倉書店.

O'Hara, M.W., Neunaber, D.J., & Zekoski, E.M. (1984). Prospective study of postpartum depression: Prevalence, course, and predictive factors. *Journal of Abnormal Psychology*, **93** (2), 158-171.

大日向雅美.（1988). *母性の研究*. 東京：川島書店

大日向雅美.（1991). 親としての発達. *児童心理学の進歩 Vol. 30* (pp.153 - 179). 東京：金子書房.

尾見康博・川野健治.（1994). 人びとの生活を記述する心理学 ── もう一つの方法論をめぐって. *東京都立大学心理学研究*, **11**, 1-12.

Rijt-Plooij, H.H.C., & Plooij, F.X. (1993). Distinct periods of mother-infant conflict in normal development : Sources of progress and germs of pathology. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **34**, 229-245.

佐藤達哉.（1988). 育児期母親の育児関連ストレス・対処・サポートについての基礎的研究. *児童育成研究*, **6**, 42-55.

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島　悟・北村俊則.（1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, **64** (6), 409-416.

澤田英三.（1995). 生涯発達における面接法. 無藤　隆・やまだようこ（編), *講座生涯発達心理学1：生涯発達心理学とは何か*（pp.214-225). 東京：金子書房.

清水弘司・前中央子・松永顕子・依田　明.（1994). 幼児を持つ母親の「よい子」「よい母親」「よい父親」概念. *家庭教育研究所紀要*, **15**, 33-43.

園田菜摘・数井みゆき・無藤　隆・宇佐美芳子.（1995). 母子相互作用における働きかけの質が子どもの愛着に及ぼす影響. *日本教育心理学会第37回総会論文集*, 432.

田中昭夫.（1994). 保育園児の母親の育児援助に関する基礎的研究 ── その蓄積的疲労兆候と育児不安を軽減するために. *保育学研究*, **32**, 107-115.

田中昭夫.（1997). 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. *乳幼児教育学研究*, **6**, 57-64.

Trivers, R.L. (1972). Parental investment and sexual selection. In B.Cambell (Ed.), *Sexual selection and the descent of man* (pp.136 - 179). Chicago: Aldine.

氏家達夫.（1995). 乳幼児と親の発達. 麻生　武・内田伸子（編), *講座生涯発達心理学2：人生への旅立ち 胎児・乳児・幼児前期*（pp.99-128). 東京：金子書房.

氏家達夫.（1996). *認識と文化4：親になるプロセス*. 東京：金子書房.

氏家達夫・高濱裕子.（1994). 3人の母親：その適応過程についての追跡的研究. *発達心理学研究*, **5** (2), 123-136.

Weller, S.C., & Romey, A.K. (1988). *Systematic data collection*. Newbury Park, CA: Sage.

山田昌弘.（1997). 援助を惜しまない親たち. 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘（著), *未婚化社会の親子関係*（pp.7-96). 東京：有斐閣.

山田富秋・好井裕明.（1991). *排除と差別のエスノメソドロジー*. 東京：新曜社.

付記

1 本論文は1996年度東京都立大学修士論文として提出したものに，加筆，修正をしたものである。

2 本論文作成にあたり貴重なご助言ならびにご指導を頂きました，白百合女子大学の繁多進先生，東京都立大学の須田治先生に深く感謝いたします。また国立精神・神経センター精神保健研究所（現所属）の川野健治室長，東京都立大学人文学部（現所属）の岡本依子さんには研究計画の段階から貴重なご助言を頂きました。また双対尺度法とプログラム pattern3 の使用の際に千葉県立衛生短期大学の井上裕光先生にご快諾頂きました。ここに感謝いたします。最後に8月の暑い最中調査にご協力頂きましたお母様方に心よりお礼申し上げますとともに，お子様方の健やかなご成長をお祈りいたします。

3 本研究の一部は，日本心理学会第61回大会，第62回大会，日本発達心理学会第9回大会において報告した。

Sugano, Yukie (Shirayuri College). *The Effects of a Mother's Negative Feelings Toward Her Child on the Mother-Child Relationship.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol. 12, No.1, 12 - 23.

This study examined the positive effects of mother's negative feelings toward children on the mother-child relationship. Mothers (N = 25) were interviewed about times when they felt negatively towards their children. Narrative accounts were analyzed for their contents, and for accountings mothers gave about negative feelings. Mothers reported that negative feelings emerged when children were disobedient on an everyday task or when there was a change in children's behavior. In addition, the negative feelings reflected on maternal child-rearing styles and the children's growth. Two different patterns depended on the existence of a task as follows. When given a task, mothers tended to perform their own way, whereas mothers were more lenient with their children if a task was not given to them. These two different patterns of reflection resulted in a counterbalancing mechanism in the mother-child relationship.

【Key Words】 Negative affect, Mother-child relationship, Accounting, Transition to motherhood

1998.9.21 受稿，2001.1.12 受理

発 達 心 理 学 研 究
2001，第12巻，第1号，24-35

原　　著

3, 4歳男児の友だち集団の特徴：個人行動及び二者関係と優勢順位との関連

謝　文慧　　山崎　晃
（広島大学教育学研究科）　（広島大学教育学部）

本研究では，特定の3，4歳男児の友だち集団について，遊びの共有化過程に影響するといわれている各成員個人の行動特徴と成員間の二者関係が集団内の優勢順位とどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。3歳男児9名による1つの友だち集団は2月から3月まで自由遊び場面を通して観察された。集団全体の構造的特徴として優勢順位を用いて，それに基づき個人の行動特徴と集団成員間の関係について検討を行った。結果として，集団全体の活動は優勢順位の上位者を中心に行われており，成員間の優勢順位の開きが大きいほど自己開示が生じにくく，優勢順位は集団全体の活動とも集団成員間の行動とも関連していた。観察集団の中で，集団の中心的存在を示す子がおり，彼が多くの成員と親密的，調和的な相互作用を行っていた。それと同時に，彼が優勢順位の最上位でもあり，成員を統制する行動も多かったことが示された。集団成員が優勢順位での自分の位置づけに基づいて，相手によって相互作用を行った。優勢順位が集団内の社会的行動を制御する働きは3，4歳ごろにすでに現れていることが示された。成員個人の行動特徴や成員間の二者関係が集団全体の優勢順位から影響を受けると同時に，親密度の高い二者関係が優勢順位の変遷を促す可能性や，また，その二者関係が個人の行動特徴によって決められている可能性も示された。

【キー・ワード】幼児，集団，個人の行動特徴，二者関係，優勢順位

問　　題

子ども同士で対人関係を築くことは，その過程において，社会的相互作用を有効に行うための基本的スキルの発達，社会的支持や安心感の確保，自己概念の発達が達成されるという点で，重要な発達課題である（Bukowski, & Hoza, 1989）。これまでの研究では，この子どもの仲間関係をそれぞれ個人レベル，二者レベル，あるいは集団レベルで取り扱ってきた。仲間関係を個人レベルで捉えた研究の中には，グループ遊びに必要とされる統合性のスキルを獲得していく（e.g., Parten, 1932）様子を追跡したものや，仲間への社会的影響から個人の行動を検討したものがある（e.g., Vaughn, & Waters, 1981）。二者レベルから検討した研究では，相互に選択し合う友だちを持つ子はそのような友だちを持たない子と比較して，よりポジティブな社会的感情を持ち，より望ましい社会的適応を示したという結果が得られている（e.g., Parker, & Asher, 1993）。集団レベルで検討した研究においては，ターゲット児が他児からどの程度選択されるかという一方向的選択による仲間受容度に基づいたものがほとんどであり，受容度の低い子よりも高い子のほうが，より社会性のある行動特徴を示し，また，より多くの友だち関係を持っていることが示されている（e.g., Ladd, Kochenderfer, & Coleman, 1997）。

このように，個人レベルから二者レベルへ，二者レベルから集団レベルへと，着目する関係性の規模が大きくなるにつれて，分析基準となるユニットは前のレベルを包含する形となり，より多くの視点から検討できる。すなわち，集団レベルのアプローチは，個人レベルと二者レベルのどちらか，あるいは両方を分析のユニットとして扱うことができるため，多層性を持つ仲間関係を把握するのに最も適切であると言えよう。また，日常生活での幼児の社会的行動は，3人以上の成員を含むことが多いという現実や，各個人の行動は参加集団内での社会的関係によって大きく影響される（Kenny, & La Voie, 1984）という研究結果からも集団レベルでの分析の必要性が指摘できる。ところが，先に述べたように，集団レベルで検討を試みた従来の研究は，仲間受容度に基づくものが多く，且つ，成員間の相互的関係に基づいた集団を特定したうえでの検討があまりなされてこなかった。Strayer（1980）は社会的行動を個人，二者間，集団内といった様々な構造レベルから概括的に検討することの必要性を強調している。以上から，仲間関係に関する今後の研究は，集団全体の特徴や，集団内での個人行動，または他児との二者関係に着目しながら，全貌を捉える必要があると考えられる。

集団成員各個人の行動特徴という個人レベルと集団成員間の二者関係という二者レベルが集団全体の構造的特徴という集団レベルに含まれる。その包含関係を明らかにするために，個人的行動と二者関係を集団レベルに基

づいて検討することが必要であろう。そこで本研究では，第1に幼児が所属している集団の構造的特徴を明らかにし，第2に集団の構造的特徴に基づいてそれぞれの集団成員の個人行動を検討し，第3に集団の構造的特徴に基づいて集団成員間の二者関係を分析することによって，集団成員の個人行動及び二者関係と集団の構造的特徴とどのような関連があるのかを明らかにする。

また，幼児が友だちと一緒にいる時間の長さによって親密度に相違がみられる（Hinde, Titmus, Easton, & Tamplin, 1985）ため，本研究では，共通のテーマを持って遊びを展開している一時的な遊び集団ではなく，成員同士が普段から頻繁に遊んでいて関係が安定している友だち集団を取り上げる。なお，対象児は入園後10ヶ月経ち，友だち集団が形成されていると判断される3歳児クラスの幼児とする。以下，焦点化する3つの側面について詳細に説明する。

(1) 幼児が所属している集団の構造的特徴

安定した友だち関係を持った3人以上の集団を友だち集団とし，成員間の相互作用によってできあがる集団全体の関係を集団の構造的特徴と定義する。Strayer (1980) は，McGrew (1972) の研究の流れに沿って，幼児集団の社会的構造を，凝集性，分散性の2つの機能から検討することを提案した。つまり，オリエンテーション，アプローチ，接触といった集団成員間の凝集性を高める親密行動と，攻撃，脅迫，争いといった集団成員間の分離を強める拮抗行動（agonistic behavior）とを査定して，集団内構造の質的差異を捉えるのである。Strayer (1992) は，自然場面を観察して，1歳から5歳までの幼児集団の構造的特徴を上記の2つの機能から横断的に検討した。その結果，拮抗行動によって形成される社会的優勢関係は，1, 2歳児の集団においてすでに観察され，親密行動によって形成される親密関係は2, 3歳になってから現れることが示された。この結果から，本研究で取り上げた3歳児集団においては，集団の社会的構造を説明する親密関係と優勢関係とがすでに形成されていると推測できる。

しかし，本研究は園生活でよく一緒に遊んでいた幼児たちによって形成された1つの集団を取り上げており，集団成員間の関係は集団外の子に比べて親密であることが前提となっている。従って，集団の構造的特徴として親密関係を検討することができないであろう。しかし，集団成員間では親密度に相違があると考えられるため，親密関係については，二者関係レベルでの検討材料とする。

一方，集団成員間の拮抗的状況に偏りが生じると，優勢関係や優勢順位が形成される。優勢関係は仲間集団内の個々の成員間にみられる不均衡な社会的関係であり，優勢順位は仲間集団を構成するすべての成員間の不均衡な社会的関係を統合したものである。優勢順位は，仲間集団を構成する安定した社会的次元の中で最も早く発達するものとされており，70年代から多くの研究者が，幼児の集団の構造的特徴を示すものとして社会的優勢順位を重視してきた（Strayer, & Strayer, 1976: Vaughn, & Waters, 1981: Strayer, & Trudel, 1984）。安定した対人関係が形成された集団の中で，共同遊びを展開していくためには，共通のテーマを巡って成員同士で合意したり交渉したりすることを通して遊びを共有化していく過程が不可欠であろう。この共有化の過程においては，調和性に満ちた話し合いのような向社会的行動によってスムーズに遊びを展開していく場面もあれば，意見の対立や物の所有を巡る葛藤場面も考えられる。前者の向社会的場面のみならず，後者の葛藤場面においても，早い時期から形成される優勢順位が集団単位で展開する遊びの共有化過程に影響を及ぼすことは十分考えられる。そこで，本研究では，子どもが所属している集団の構造的特徴を検討するために，集団内の優勢順位に注目することとする。

(2) 優勢順位に基づく個人の行動特徴

個人のネガティブな行動に注目した社会的優勢関係に関する研究では，攻撃的行動や競争的行動の頻度と子どもの優勢順位との間に正の相関を見出している（Strayer, 1992）。一方で，注目度や人気度のようなポジティブな社会的行動に関しては，優勢順位との間には相関はみられなかった（Vaughn, & Waters, 1981）。その理由の1つとして，前述したように，集団単位で展開する遊びの共有化過程においては，調和と対立といった対極的な交渉が含まれると考えられるが，優勢関係に関する研究のほとんどは，対立が生じた葛藤場面にのみ注目し，主張がどの程度実現できたのかを問題にしてきたためと考えられる。遊びの共有化過程にみられる調和的交渉の側面が抜け落ちてしまうため，従来のように，拮抗関係の不均衡のみから優勢関係を算出する方法は不十分といえよう。そこで，本研究では，個人が所属している集団の優勢順位と個人の行動特徴との関連を検討する際に，優勢順位に関しても個人行動に関してもネガティブな指標だけではなく，ポジティブな行動指標をも取り入れてより網羅的に分析することとする。

安定した対人関係に基づいて，共通のテーマを持って遊びを展開している集団成員の間では，遊びの進行方向を決める役は誰か，葛藤が生じる同士の中に入って仲裁する役は誰か，自分は物・場所の所有を巡る争いの中で自己主張をどこまで押し通せるかなどについて暗黙のルールが存在しているであろう。つまり，遊び集団を維持するためには，各成員が集団内の相互の位置関係を適切に認知する必要がある。

Strayer (1984) によると，幼児期の優勢順位は，児童期以降に比べて，より単純で，おおざっぱに分化してい

るものの，幼児はその優勢順位での自分の位置づけをよく理解しており，集団内地位の構造に対する認知も高い一致率を示している。さらに，凝集性の高い集団内の優勢順位に関する子どもの評定は安定していて（Weisfeld, Muczenski, Weisfeld, & Omark, 1987），優勢順位の確立が集団内の争いを減らす機能を果たすことも示されている（LaFreniere, & Charlesworth, 1983）。これらの研究から，凝集性の高い集団内の優勢順位は個々の成員によって明確に認知されており，この優勢順位での位置づけによって個々の行動が大きく影響されることが考えられる。本研究では，幼児の社会的関係が最も現れると考えられる自由遊び場面に着目し，集団成員間の相互作用を観察することによって，集団の優勢順位と関連づけながら個人の行動特徴や集団成員間の関係を捉えることとする。

(3) 優勢順位に基づく二者関係

特定の二者間の相互作用に基づいて形成される関係を二者関係と定義し，友だち集団内の関係はこうした二者関係の組み合わせにより形成されると考えられる。この二者関係に基づく社会的関係に関する従来の研究には，特定の相手との関係という特定性の視点からのアプローチがある。なぜなら，ある相手との相互作用パターンに基づいて別の相手との相互作用パターンを予測することは不可能（Kenny, & La Voie, 1984）だからである。また，関係が形成されてからの時間が経てば経つほど，相互作用を行う二者が持つそれぞれの個人要因の影響が弱くなり，それに対して，二者間の関係要因の影響が強くなる（Ross, & Lollis, 1989）。社会的関係を厳密な手法で検討した研究としては，実験室場面における2人から4人までの集団に適用する関係性モデルを考案したKenny, & La Voie（1984）の研究が挙げられる。その関係性モデルによると，関係性に関わるのは，個人要因，二者間要因，集団要因，そして場面要因の4つの要因であり，加えて，この関係性は，二者関係が2人の個人要因を加算しただけでは導けないような非加算的特徴を持っていることが示されている。本研究は，遊び集団の成員数が4人以上の場合もあり，集団の成員が入れ替わる場合もある自由遊び場面を取り上げるため，Kenny, & La Voie（1984）の関係性モデルを直接適用することはできないが，関係性の非加算的特徴に注目したいと考える。

この二者関係に着目する先行研究のほとんどが，誰が誰にといった行動の方向性から，アクター効果とパートナー効果を検討している（Kenny, & La Voie, 1984: Strayer, 1992）。しかし，「お互いがどのくらい親密であるか」といった関係の状況について，両者が仲良く一緒に遊んでいるという方向性のない行動も含まれていると考えられるので，方向性の明らかな行動のみでは説明できない部分もあろう。加えて，世評や関係が成立した後の集団を扱う場合では，たとえ誰かが誰かを遊びに誘い込むという方向性のある行動であっても，それは二者間の関係性効果を踏まえた上でのものでなければならないと考えられる。これまで，自然場面での二者関係については，この関係性効果の視点からほとんど検討されてこなかった。そのような中で，Park, & Waters（1989）は自由遊び場面での二者間行動を評定する尺度を考案している。この二者関係Q-setは関係が形成された後の二者について，行動のポジティブ性，ネガティブ性および関係の状況といった3つの側面から二者間関係を測定する尺度である。また，この尺度は，本研究が集団の構造特徴として用いていない親密行動を評定できる凝集性項目も含んでいるため，集団成員が親密度によって異なる対処行動を行うかどうかも検討できよう。そこで本研究では，現実の友だち集団での優勢順位とそれぞれの成員間の二者関係との関連を検討するために，Park, & Waters（1989）をもとにYoungblade, Park, & Belsky（1993）が作成した二者関係Q-setを参考に検討することとする。

また従来，就学前児では同性の遊び仲間が好まれ（Maccoby, 1990），そのうえ，親密度の高い友だち関係の発生は同性であるかどうかによって左右される（Hinde et al., 1985）ことが示されている。以上のことは，日常生活の中で頻繁に相互作用を行う集団は同性によるものが多いことを示している。さらに，女児よりも男児のほうが拮抗行動を多く示し，また，仲間のいざこざ行動に近づき，傍観することが多いとされている（Farver, 1996）。そのため，友だち集団の構造的特徴を優勢順位から測定する本研究においては，男児集団に絞って縦断的観察を行うこととする。

以上の問題意識から，本研究では，特定の3, 4歳男児の友だち集団について，遊びの共有化過程に影響するといわれている個々の成員の個人行動特徴と二者関係とがどのように友だち集団の中で構成され，調整されているのか，優勢順位とはどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。

方　　法

観察対象とセッティング　観察対象としたのは，東広島市のF幼稚園3年保育の1年目に入園した年少男児基本成員7名と，この7名と交渉を行った同クラスの男児3名であった。観察時の平均月齢は50.8ヶ月（レンジ：47－55ヶ月）。観察を始める前に予備調査として保育者及び観察クラスの子どもたちに「よく一緒に遊んでいる友だち」を指名してもらったところ，男児同士がお互いを指名し合い，普段から集団単位で遊びを展開する場合が多いことが分かった。基本成員は，観察当初3歳児クラス10名の男児の中で，観察日数の90%以上の出席があった8人からさらに1人遊びを好んでいた1名を除く7名とした。

観察期間は友だち関係が安定していると考えられる進級直前の2月から3月までの2ヶ月とし，観察時間帯は朝の9時30分から10時40分までの自由遊び時間とした。観察期間中，基本成員7人についてそれぞれ15分間の観察を4回行い，計28の事例の収集にあたった。観察順はランダムであり，観察対象児を含む友だち集団を構成する成員間の相互作用はVTRで記録した。なお，それぞれの事例に含まれる成員数が異なるので，成員ペアの観察回数はペアごとに異なる。

二者関係の測定方法　二者関係は二者間の相互作用パターンの繰り返しから想定されるものと考えられる。二者関係Q-setは，幼児の友だちペアの自由遊びデータをソートする尺度である。しかし，日常保育場面で繰り広げられる友だち集団は3人以上の場合が多く，集団の規模を2人に限定することは集団レベルでの関係を把握し切れない。日常保育の中の自由遊び場面における2人以上の友だち集団成員間の二者関係をこの二者関係Q-setで評定する信頼性については，事例からランダムに抽出した20ペアの関係を2名でソートし，スピアマン・ブラウン公式（Block, 1978）によって平均信頼値を算出した結果，.82（レンジ：.45 ～ .94）であった。本来であれば，毎回の観察でみられた各成員ペアの相互作用を二者関係Q-setの55アイテムからソートしなければならない。しかし，本研究で収集された28の事例から得られたペアの総数は295と多く，各ペアの相互作用について15分間の事例を通してアイテムごとにソートすることは困難である。さらに，1つの事例において集団成員数が多ければ成員ペアごとの相互作用の量も異なるがゆえに，“どちらとも言えない”と評定する項目数が規定よりも多い場合も考えられる。従って，自由遊び場面での友だち集団の二者関係を評定するにあたって，規定数に合わせるために評定項目に重みをつけるようなソート法には限界があるのではないかと考えられる。そこで，本研究は，集団成員間の二者関係を測定するために，Youngblade et al. (1993) をもとに作成した二者間行動評定尺度を用いて，各事例にみられた各成員ペアの相互作用について，評定内容に当てはまる・どちらとも言えない・逆転内容に当てはまるの3段階評定を行った。また，自由遊びを行う友だち集団の成員が毎回異なることも予測されるので，安定した成員間関係を測定するために数回の観察を行い，平均評定値を求めることとする。次に，計28の事例において，各成員ペアの二者関係得点を加算し，それを各成員ペアの観察回数で除して平均二者関係得点を求めた。この二者間行動評定尺度は，以下の7クラスター項目から構成されるものである：「ポジティブな社会的態度」 ── 分与やいたわりのような向社会的行動か非難などの拒否的行動か，「凝集性」 ── 二者の興味が相手個人と遊び内容とのどちらにあるか，「調和性」 ── 問題を有効に解決したり提案や請求をして遊びを展開したりするか，問題を返報したりエスカレートしたりするか，「統制」 ── 相手に対して身体的攻撃や脅かしを用いるか許可を求めたり提案したりするか，「応答性」 ── 相手の要求に積極的に応ずるか無視するか，「自己開示」 ── 個人の情報や遊び内容に関連する既有知識を相手に呈示するかどうか，「統合遊び」 ── 独り遊びよりも，二者で遊ぶ時のほうが遊びの内容がより複雑で，構造化されているかどうか，によって，1点か-1点とする。各項目において，以上のような行動がみられない場合は0点とする。データの48%にあたるランダムに選んだ142ペアについて2名で評定したところ，評定者間の一致率はκ= .87であった。残りのデータについては観察者個別に評定を行った。

優勢関係の算出方法　物の所有をめぐる争いのような競争は親密関係とも拮抗関係とも相関を持つ（Strayer, 1992）ため，本研究では，集団を構成する成員ペアごとの優勢関係の強弱を判定するにあたって，葛藤場面の勝ち・負けにだけ焦点を当てるのではなく，遊び場面でのリード・追従に基づく基準も採用した。従って，毎回の優勢関係の順位を決めるのに，葛藤がある場合は勝った側を上のランク，負けた側を下のランクに，葛藤がない場合は遊びをリードする側を上のランク，それに従う側を下のランクに配属した。また，ペア間の社会的関係が均衡な場合はその両者を同ランクに配属した。

優勢順位の得点化　Strayer, & Strayer（1976）の線形相対規則（linear transitivity rule: AがBより優勢であり，また，BがCより優勢であれば，AがCよりも優勢である）に基づき，優勢順位について以下のような定義を行った。1つの事例にみられた成員がA，B，…Xであるとき，各成員の優勢関係得点をD_A，D_B，…D_Xとし，二者（e.g., AとB）が同ランクに属する場合には優勢関係得点が等しく（i.e., $D_A = D_B$），二者が異ランクに属する場合には，ランク差分の優勢関係得点の差があると仮定した（e.g., AがBより1つ上のランクにいれば，$D_A = D_B+1$）。また，毎回の事例における集団成員間の優勢関係得点を標準化するために，$D_A+D_B \cdots +D_X=0$と仮定した（e.g., A, Bが同ランクにいて，CがA, Bより1つ上のランクにいれば，$D_A=D_B$, $D_C=D_A+1= D_B+1$, $D_A+D_B+D_C=0$）。これらの仮定から，まず毎回の事例において成員各自の優勢関係得点を評定者2名の平均得点で算出した。次に，計28の事例中で個人が得た優勢関係得点を加算し，それを個人が観察された回数で除して平均優勢関係得点を求めた。さらに，ペアを組んだ二者の優勢順位における差異と，ペアの平均的な順位位置を検討するために，ペアごとに優勢関係の差とその平均を算出した。

なお，本研究では，観察対象10人中3人以上の集団単位での相互作用が観察されなかった男児1人を分析から除外したため，集団の成員数は9人となり，成員ペア数

は36となった。

結果と考察

分析対象となった36ペアの組み合わせ（幼児の出席番号で表示）と観察された回数（“( )”の中で表示）を以下に示す: 4-5(3), 4-6(5), 4-8(1), 4-9(3), 4-10(2), 4-15(2), 4-16(3), 4-18(5), 5-6(4), 5-8(1), 5-9(1), 5-10(1), 5-15(1), 5-16(3), 5-18(4), 6-8(9), 6-9(14), 6-10(13), 6-15(10), 6-16(16), 6-18(17), 8-9(9), 8-10(12), 8-15(10), 8-16(10), 8-18(9), 9-10(10), 9-15(8), 9-16(12), 9-18(12), 10-15(18), 10-16(13), 10-18(15), 15-16(12), 15-18(11), 16-18(16)。

幼児が所属している集団の構造的特徴

幼児が所属している集団の構造的特徴を検討するために，36成員ペアの二者間行動評定尺度の各クラスター項目の評定平均値と，優勢関係の差の評定値と，優勢関係の平均の評定値との間のスピアマンの順位相関係数をTable 1に示した。ポジティブな社会的態度と調和性との間に高い正の相関がみられ，相手を配慮した親和的な行動と調和的な関係とが相互に影響していることがうかがえる。よって，以下ではこの2つの項目を併せて調和的相互作用（interaction with harmony）と称する。また，凝集性と応答性と統合遊びとの間にも高い相関が示され，相手と密接に交渉することが，統合遊びを持続することと関連していると考えられるため，以下ではこの3つの項目を併せて親密的相互作用（interaction with affiliation）と称する。さらに，調和的相互作用の2項目と，親密的相互作用3項目の，それぞれの間で正の相関がみられた。この結果から，調和的相互作用と親密的相互作用とは関連があり，相互に影響し合うことが推測される。また，優勢順位におけるペアの平均位置を表す優勢関係の平均は，ポジティブな社会的態度と優勢順位の差以外の全てのクラスター項目と正に相関していた。ペアの平均的な順位位置が高いということは，優勢順位の上位者とペアを組むことを意味している。従って，集団全体の活動が優勢順位での上位者を中心とした成員間で多く行われたと考えられる。さらに，自己開示は親密的相互作用の3項目，優勢関係の平均と正の相関を示し，優勢関係の差と負の相関を示していた。自己開示は，優勢順位での上位者を中心とした成員間の親密的相互作用の中で生じやすいが，優勢順位間の開きが大きいほど，生じにくいこともうかがえる。幼児が所属している集団の構造的特徴をまとめてみると，調和的相互作用の多さや親密的相互作用の多さは，両者の優勢順位での平均的位置に関係しており，集団内の相互作用が優勢順位の上位者を中心に行われていた。一方，優勢順位における二者の順位の開きが大きいほど自己開示がみられなかった。以上のように，優勢順位は集団全体の活動とも，また，集団成員間の行動とも関連していると考えられる。

優勢順位における個人の行動特徴

優勢順位における個人の行動特徴を検討するために，個人の平均優勢関係得点を高い順で並べたところ，出席番号が18, 16, 8, 15, 10, 6, 4, 5, 9の線形的優勢順位が得られた。この9人集団の平均優勢関係得点の平均値は−.11，標準偏差は.69（レンジ: −.99 ～ 1.31）であった。集団の構造的特徴の分析と同様に，ポジティブな社会的態度と調和性との平均得点を求めて，調和的相互作用の得点とし，凝集性と応答性と統合遊びとの平均得点を求めて，親密的相互作用の得点とした。二者間行動評定尺度の4測定項目得点の平均値（*M*）と標準得点（*SD*）を以下に示す：調和的相互作用—*M*=.01, *SD*=.16: 親密的相互作用—*M*=.26, *SD*=.37:統制—*M*=.14, *SD*=.24:自己開示—*M*=.04, *SD*=.07。優勢順位の違いと二者間行動評定尺度の4測定項目との関連を究明するために，各測定項目の値が平均値より標準偏差の2分の1以上大きい値を示していたペア（●で表示）及び，平均値よりも大きい値を示していたペア（●で表示）を選出し，集団成員間の優勢順位に当てはめてネットワークを作成した（Figure 1-a～1-d)。各優勢順位ネットワークの交差値は，個人とほかの集団成員との相互作用の程度を示しており，その程度

Table 1 *Intercorrelations Among Variables*

Variables	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. Positive Social Orientation		.34*	.67***	−.03	.43**	.21	.39*	−.08	.23
2. Cohesiveness			.53***	.37*	.81***	.35*	.76***	.19	.57***
3. Harmony				.07	.63***	.22	.57***	.01	.40*
4. Control					.29	.17	.21	.26	.41*
5. Responsiveness						.49**	.77***	.03	.50**
6. Self-disclosure							.49**	−.36*	.29*
7. Coordinated Play								.04	.43**
8. Dominance Difference									.27
9. Dominance Average									

Note ; Correlations are for the whole group of 36 pairs.
*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

が評定項目の平均より大きい場合は丸で表示している。また，丸の数が多いほど相互作用を行う相手が多いことを示している。その結果，18, 8, 15, 10, 6, 9の間には調和的相互作用が示されたのに対して，16, 5との間にはほとんどみられなかった（Figure 1-a）。親密的相互作用については，18は5以外の7人の集団成員と親密的相互作用を行ったのに対して，ほかの成員の場合では相手の人数がそれほど多くなかった（Figure 1-b）。また，18, 16, 6の3人を中心にほかの成員との間に統制関係がみられた（Figure 1-c）。自己開示は，18, 16, 8, 15, 10, 6の6人の間で多く行われ，特に16, 8, 15の3人を中心にほかの成員と個人情報を分与し合うことが多かった（Figure 1-d）。

次に，優勢順位での位置と個人の行動特徴との関連を検討するために，この9人の集団を平均優勢関係得点に基づいて群分けしたところ，優勢得点が平均値より標準偏差の2分の1以上の優勢順位上位群2名（18, 16），優勢得点が平均値より標準偏差の2分の1以下の優勢順位下位群2名（5, 9），それ以外の優勢順位中位群5名（8, 15, 10, 6, 4）が設定された。各群の優勢順位ネットワークについて検討したところ，上位群，特に最上位者の18はどの評定項目においても多くの集団成員と相互作用を行い，集団の中心的存在であることが示された。最上位者の18は多くの成員と調和的，親密的相互作用を行ったのに対して，2位の16はほかの成員との間に調和的相互作用がほとんどみられず，親密的相互作用を行った相手も18より少なかった。同じ上位群に属していても18と16では行動特徴が異なることがうかがえるが，2人とも中，下位群を統制していたという点は共通していた。中位群に関しては，上位群に統制されていたが，中位群の中では，また，6を除く下位群との間では統制がほとんど見られなかった。この中位群同士の調和的相互作用が目立っており，特に8, 15, 10の3人の間で親密的相互作用と自己開示もみられた。中位群は集団の中で拮抗関係のほとんどない成員である一方，上位群と統制関係にあるということは上位群との拮抗行動の多さを再度示唆するものである。中位群の中で唯一下位群と統制がみられた6は，下位群の9との間に調和的，親密的相互作用および自己開示もみられた。18, 6のように，自分より下位の者に対して統制を行いながらも調和的，親密的相互作用を行うことは，集団がまとまっていく一因であると考えられる。優勢順位と深く関係している統制と優勢順位間の開きとの関連を検討すると，ほかの成員と統制関係にあ

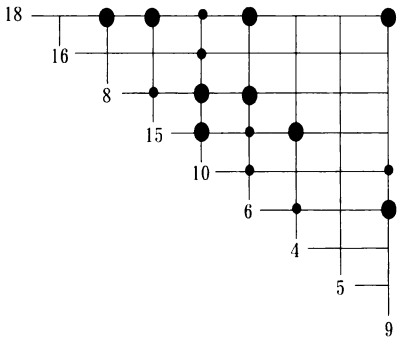


Figure 1-a *The dyadic interaction with harmony within the dominance hierarchy*

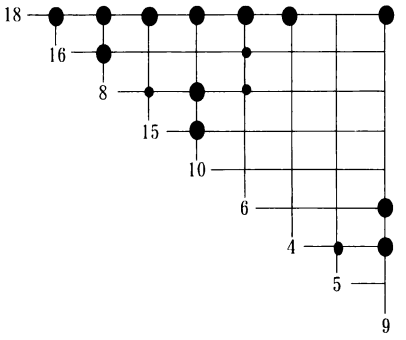


Figure 1-b *The dyadic interaction with affiliation within the dominance hierarchy*

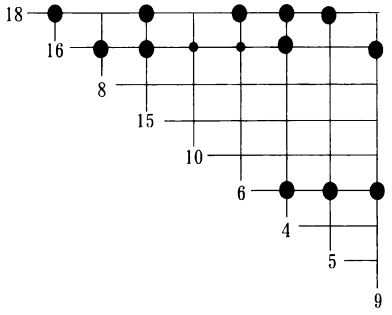


Figure 1-c *The dyadic interaction of control withi n the dominance hierarchy*

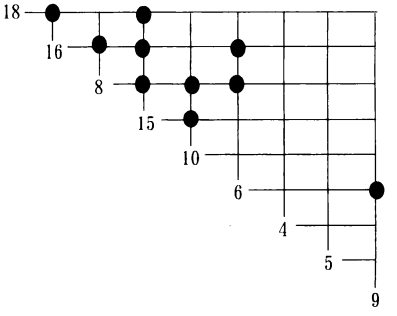


Figure 1-d *The dyadic interaction of self-disclosure within the dominance hierarchy*

った18, 16, 6に関しては，順位間の開きが小さい18と16との間で親密的相互作用はみられたが，調和的相互作用はみられなかったのに対して，順位間の開きが大きい18と6との間では親密的，調和的相互作用の両方がみられた。優勢順位の上位にいる16と下位にいる6とでは，最上位者の18との相互作用の質が異なっていた。つまり，18に対して，16が異議を唱えたり拮抗行動をしたりすることと対照的に，6はポジティブな，調和的行動を示した。以上のことから，個人の行動が優勢順位の形成に影響を及ぼす一方で，個人が優勢順位に基づいて行動するといった，個人の行動と優勢順位との相互的関連性が推測できる。しかしながら，個人の行動と，二者間の優勢関係が関連しているとも考えられる。以下，二者関係における成員個人の行動特徴と優勢順位との関連を検討する。

優勢順位における二者関係

事例で得られた各々の二者関係と優勢順位との関連を検討するために，優勢順位に深く関わる始発的拮抗行動（以下“I”で示す）及びそれに対する応答（以下“R”で示す）について，行動内容が応答側にとってポジティブかネガティブか（以下各々“P”と“N”で示す），行動始発者が応答者に比べて優勢相互順位の上位者か下位者か（以下各々“上”と“下”で示す），行動始発者の主張が通ったかどうか，の3つの視点から分析を試みた（Table 2）。結果として，始発的拮抗行動の生起率は優勢相互順位の上位者のほうが下位者の2倍も多く，ポジティブな始発的拮抗行動の成功率は，優勢相互順位の上位者においても下位者においても高かったが，ネガティブな始発的拮抗行動の成功率は，上位者には83%もあったのに対して，下位者には32%しかなかった。優勢相互順位の上位者が下位者よりも拮抗行動を多く示し，また，拮抗状況において，上位者のほうが自分の主張どおりの終結を導きやすいことが示唆される。

1. **優勢順位が遊び全体の進行方向にいかに影響を及ぼすか**

優勢順位の上位者は物事に対する決定権がほかの成員たちよりも強いと考えられる。従って，集団成員間で葛藤が生じた場合，上位者が味方する側が有利になる場合が多いであろう。次の事例は，成員間のいざこざに直接関わっていなかった上位者が，一方に加担し，他方の成員を攻撃するようにほかの集団成員に呼びかけた場面である。

事例1（観察日：1997. 3. 1）：18, 16, 15, 10, 6, 4, 5がスコップを使って水たまりから砂を掘り出す作業をしていた。4が不意に16に泥水をかけてしまったことに対して，16が靴や服を拭きながらブツブツ怒っていた。

・18は4に「もう，なんてことをするの，人の足を汚すなんて」と責める。
・10「汚すなんて失礼だよ」と4を注意。15と6も「うん，失礼だ」とコメントをした。
・/I/しばらくして，18は「よし，まだ間に合うぞ」と遊びの再開を皆に呼びかけたが（上→下，P），4を指して「お前はだめだ」と4の参加を拒絶。（上→下，N）
・/R/4「もう，おれ，…，Tちゃん，ごめんね」と16に謝った。
・/I/18「もう許さないよ」と依然拒絶。（上→下，N）
・/I/10「もう許さないもん」と18を真似し4を拒絶した。（上→下，N）
・/R/4は黙り込んでいた。
・/I/15「もうごめんねと言ったんだから，許してあげたら」と提案した。（下→上，P;15→18, 16）（上→下，P;15→10, 6, 5: 4）
・/R/18「でもね，だめだよ，もう遅いけん」と15の提案があっても依然と拒否。
・/I/それでも遊びを続けようとする4を，18「あっち行けよ」と押した。（上→下，N）
・/I/6「あっちへ行けよ」と18のまねをして，4を拒絶。（上→下，N）
・/R/4「もう僕にもさせてよ」と頼んでいた。
・/I/18「意地悪じゃけん，だめ」と4の要求を断った。（上→下，N）
・/R/4「友だちがいないのに，僕，もう」と離れていこうとした。
・/I/15「先生に言ってき，先生に言ってき」と4に向かって提案した。（上→下，P）
・/R/4「先生，先生…」と保育室の方へ走っていった。

Table 2 *Summary of Initiated Agonism*

Initiator	Positive Social Orientation	Success Rate	Negative Social Orientation	Success Rate	Sum
Higher Ranker	131(124)	95%	87(72)	83%	218(196)
Lower Ranker	83(71)	86%	34(11)	32%	117(82)
Middle Ranker	10(6)	60%	0		10(6)
Sum					345

Frequencies of behaviors whose result corresponded with initiator's wish are given in parentheses.
Middle ranker=initiator whose behavior toward both higher and lower rankers.

・/ I / 15「やつが出てきたら，かわいそうだから許してあげよう」と再度提案。（下→上，P;15 → 18, 16）（上→下，P;15 → 10, 6, 5, 4）
・/ R /皆が 18 のほうをみた。18 は何も言わなかった。
・しばらくして戻ってきた 4「みんなお友だちなんでしょう」と先生の言葉を借りて皆に言った後，少しずつ砂を掘り始めた。そのとき，
・/ I / 16「あ，仲間になっちゃってる」と一緒に遊んでいる 4, 5, 15 のことを 18 に言いつけた。（下→上，P;16 → 18）（上→下，N;16 → 4, 5, 15）
・/ I / 18「もうなんてことをするの，うちのコンクリーターですか」と 4 を注意。（上→下，N）
・/ I / 10「うちのコンクリーターなんですか」と 18 を真似して 4 を注意。（上→下，N）
・/ R / 4 は砂場を離れた。　…（しばらくして）…
・/ I / 18 は砂を水にほうり込んだ 5 に「砂を入れたらだめ，もう，あっち行ってよ」と怒った。（上→下，N）
・/ I / 6 が 5 を指して「お前は仲間に入れない」と拒絶した。（上→下，N）
・/ I / 18「そうよ。2 人で遊び」と先ほど仲間はずれされた 4 のことを指した。そして，5 を砂場の外まで追い出した。（上→下，N）
・/ I /しばらくして，5 が戻ってきたところで 18 は「こいつを仲間に入れてあげないでねえ」と皆に言った。（上→下，P;18 → 16, 15, 10, 6）（上→下，N;18 → 5）
・/ I /それを聞き，5 は近くにいる 6 を叩きながら「ばい菌」と怒った。（下→上，N）
・/ R / 6 も 5 を叩き返しながら「ばいばい菌。もう許さない，入ったりしたらだめ」と喧嘩。
・/ I /そこに 18 がやってきて「(6 が）許さないと言ったんだよ」と 5 を押した。（上→下，N）
・/ I / 18 が自分の位置に戻った途端，5 が再び 6 を叩いた。（下→上，N）
・/ I / 18 がそれをみて「よし，皆でやつに水をかけよう」とほかの成員に指示をした。（上→下，P;18 → 16, 6, 15, 10）（上→下，N;18 → 4, 5）
・/ R /皆も加わって，5 対 2 で 4, 5 を攻撃した。結局 4, 5 が逃げていった。

最上位者の 18 が，争っている 16, 4 及び 6, 5 に対して，それぞれ 16 と 6 に加担していた。18 が 4, 5 を拒絶していた際，10 と 6 は 18 について 4, 5 を責めていた。また，15 が 4 の加担をしたが，最終的に 18 が同意しなかったため，4 は仲間に入れてもらえなかった。

この事例では，優勢最上位者が成員への強い統制を示しており，その上，いざこざに直接関わっていなかったほかの成員（10, 15, 6）も最上位者に従って行動した。また，上位者からの拮抗行動に対する下位者の反撃は，順位間の開きが大きい相手（5-18）よりも，より小さい相手（5-6)に向けられていた。以上のことは，優勢順位の上位者が遊び全体の進行方向に影響を与え，成員が優勢順位に従ったかたちで行動することを示している。

2. 優勢順位での相互順位によって二者関係が影響されるのか

以上から，集団の中で最上位者に追従した行動が多いことがうかがえた。以下，ほかの成員の始発行動と優勢相互順位との関連を検討する。次の事例は，ある成員が遊びを展開するうえで，集団成員によって異なる対処行動をとった場面である。

事例 2（観察日：1997. 3. 5）：18, 16, 8, 6, 9 は砂場で“海”を広くする作業をしていた。水を海に注ぐために，18 がホースを使っていたが，途中からホースを揺らしながらふざけていた。ほかの成員たちがそれをみて喜んでいた。

・18 がホースを自分のお腹に近付けて，「おしっこ」とふざけた。
・/ I / 8 が 18 に「K ちゃんもやろうか」と自分の行動を提案した。（下→上，P）
・/ R /しかし，18 は何の応答もせず，ホースを譲らなかった。
・/ I / 18 を眺めていた 6，9 に対して，16 が「早く仕事しろ」と命令した。（上→下，N）
・/ R /命令された 6，9 は 16 のほうをみたが，特に動き出さなかった。
・/ I / 16 はホースを持っている 18 と，18 をみている 8 の間を通り抜けて，6 と 9 の耳を摑んで「早く仕事しろ，お前ら」と再び催促した。（上→下，N）
・/ R / 6，9 はただ耐えていて，何もしなかった。
・/ I / 16 が砂を水の中に入れて「あ，これを入れたら，泡が出る」と 18 に言った。
・/ R // I / 18 がそれをみて，「よし，皆でしよう」と泡を出しはじめた。（上→下，P）
・/ R // I / 8 もスコップで水に砂を入れたが，跳ねた泥水が 16 のズボンを汚した。
・/ R // I / 16 がすぐに「駄目よ，お前」と怒り出して，8 を攻撃した。（上→下，N）
・/ I /しばらく経っても怒りが収まらない 16 に対して，18 が「この人は悪い人じゃないよ」と 8 のことを擁護した。（上→下，P）
・/ R / 16 はそれ以上怒らなかった。
・その間このいざこざを 6，9 はただみていた。

優勢順位 2 位の 16 が，停止している遊びを展開するために，6, 9 に命令や攻撃をしたが，順位 1 位の 18 と 3 位の 8 には何の行動もしなかった。また，8 を怒っている 16 に対して，18 はしばらくしてから介入した。それに対し

て，6,9は16に直接命令されても，16が他者に対して怒るのをみてもただ黙っていた。

この事例からは，同一の対象児が，優勢順位において自分よりも上位にいる者（18-16）に対してと，下位にいる者（16-6,16-9）に対してとでは，異なる行動をとることが示された。上位者へは強制しない，従うといった行動を示したのに対して，下位者へは命令や身体的攻撃を行っていた。また，優勢順位の開きが小さい場合（16-8），両者の優勢関係は比較的あいまいで，不安定なものであるため，二者間の関係は場面に影響されやすいと考えられる。以上のことから，最上位者以外の成員の始発行動においても，優勢順位による影響が示唆される。

3．優勢順位に沿わない行動はどういった状況でみられるのか

優勢順位が確立された集団の中では，成員が自分と相手との優勢関係に基づいて行動することが多いと考えられる。しかし，Table 2で示したように，優勢順位の上位者の主張が通らなかったり（上位者始発行動全体の10%を占める），下位者が順位に逆らった行動をとったり（観察された始発行動全体の10%を占める）する場面も観察された。そこで，こういった優勢順位に沿わない行動がどのような状況で生じるのかを紹介する。

事例3（観察日：1997. 3. 4）：10, 8, 5は濡れた砂場で通路を作ることにした。15が歩いて渡るためのパイプを保育者に求めている間，8はスコップを持って濡れた靴と靴下を脱ぎ，10は跳び箱の上に座っていた。そこに16がやってきた。

・/I/10が8に近づき「これ，僕のだったけど」と8が傍においてあるスコップを指した。
・/R//I/8は「エイ，ちょっと貸してよ」。
・/R/10は「いいよ」。その後，8と10が笑いながら砂場へ向かった。
・10「T（15の名前），道路の橋になるんだ」と15に話し掛けた。
・15「あ，R（10の名前）も橋を渡るか，これ，どうするんだ」とパイプを持って10に聞いた。
・/I/そこに16がやってきて，「はい，よし，皆，はめよう，ここに」と指示した。（上→下，P）
・/R/15はパイプを水で濡れていた砂の上に並べていた。
・10は15の作業をみていて喜んでいた。そして15が並べていたパイプを渡ろうとしたとき，
・/I/16「通らないで，このばか者」と10を怒り，そしてそのパイプを並べ替えようとした。（上→下，N）
・/R/10「（これを）通るんだ。Tがね，通るために作ってるんだよ」と説明。
・/I/16「通れるわけがないじゃないか」と否定。（上→下，N）
・/R/10「通れるんだよぉっだ」と小さな声で口答えをした。その後，パイプを渡ることをやめて，15と泥水の中を裸足で歩きまわっていた。
・/I/16は8に「ねー，K（8の名前）」と通れないことについて8に同調を求めた。（上→下，P）
・/R/8は「ううん，通れるんだ」と頭を振って，16には同意しなかった。
・/R//I/それを聞き，10「通れるんだよ。Tが作ったんだから」と先より大きな声で主張。（下→上，N）
・/R//I/16「落ちるんだよぉ」と言い返した。（上→下，N）
・/R//I/8「K（自分の名前）だって落ちんもん。やってみようか，ここならやってみようか」と提案。（下→上，P: 8→16）（上→下，P: 8→15, 10）
・/R/15「いいよ」と8に応答。その後，8と15がそれぞれそのパイプを無事に通った。
・16がそれをみて「裸足はいいけどさあ…」。結局，16も靴や靴下を脱いで泥水に入った。

優勢順位上位の16は，開始していた遊びに途中から参加し，指示を出した。8, 10, 15は最初16に従っていたが，10が15のアイディアに従ったことに対して16が異議を唱えてから，8, 10, 15の3人がお互いに助けあいながら自分たちの考えを16に主張した。結局，16は3人の主張を受け入れて，遊びを継続していた。

この事例では，優勢順位の上位者の異議に対して（16-10, 16-15），下位者は親密度の高い子の味方（10-15）になって上位者に主張を訴えたり，中位者（8）は両者の意見の食い違い（10, 15 vs. 16）を収めるような言動をとった。以上のことから，親密度の高い成員同士や下位者同士が団結することによって優勢順位に逆らう行動を起こしうることが示唆される。加えて，この場面には優勢順位の最上位者の18が参加していないため，優勢順位間の開きが小さい成員同士間でこのような優勢順位に沿わない行動が起こりやすいのではないかとも考えられる。

総合考察

幼児の友だち関係を概括的に捉えるために，本研究では，個人の行動特徴と集団成員間の関係を所属集団の構造的特徴に基づいて検討した。本研究で扱った集団は，園生活でよく一緒に遊んでいた3，4歳男児によって形成されたものであった。まず，二者間行動評定尺度を用いて集団成員間の関係を捉え，その成員間関係と集団の優勢順位との関連を検討した。その結果，本集団は成員間の優勢順位が線形的であり，また，集団全体の活動は優勢順位の上位者を中心に行われているという，集団の活動と優勢順位との関連性が得られた。また，クラスの男児が10人と少なかったことにも一因がある可能性があ

るが，対象とした集団は凝集性が高いという特性を持っていた。以上の結果は，凝集性が高く（Pettit, Bakshi, Dodge, & Coie, 1990），優勢順位が成立した（Strayer, 1984）集団では，成員は優勢上位者に従うことが多いという見解を支持するものであった。

優勢順位に基づいて個人の行動特徴と集団成員間の二者関係を検討したところ，優勢順位最上位の18は，ほかの成員と比較してより多くの相手と親密的相互作用を行い，集団の中心的存在であることが示された。これは，所属集団において成員との凝集性が特に高い子どもが，年齢に関係なくどの集団にも存在する（Strayer, & Trudel, 1984）という見解と一致するものであった。また，18はほかの多くの集団成員と親密的，調和的相互作用を行いながらも，強い統制を持って集団全体の活動を左右していた。このことから，18が成員と親密的な関係を結びながら集団内での優勢地位を高めた（Strayer, 1992）と推測され，優勢関係が単なる拮抗行動から決定されるものではなく，成員といかに調和的に交渉するかも重要な影響要因であることを示唆している。一方，集団の中心的存在である18と同様に優勢順位の上位群である16に関しては，ほかの成員との間に統制はみられたが，調和的相互作用はほとんどみられず，18と対照的な行動パターンを示した。この結果から，優勢関係は拮抗行動とリーダーシップ的行動という対極的な社会的行動によって決定されるという規則が導かれる。このように，優勢順位が高い成員間に2つの行動パターンが存在していることが示されたが，集団形成後の時間の経過につれて，この二者の集団内の優勢順位がどのように変遷するのかについては，更なる縦断的研究が必要である。

また，事例1, 2で示したように，優勢順位最上位である18の存在や介入が，集団遊びの方向性やルールを決定する場面が多かったことから，優勢関係が集団内の社会的行動を制御するという働きは4, 5歳ごろ（LaFreniere, & Charlesworth, 1983; Strayer, & Trudel, 1984）以前の3, 4歳ごろに既に現れることが示された。なお，優勢順位の上位者とほかの成員との間に統制がみられたことから，優勢順位の上位者は多くの場合，葛藤場面において自分に有利な終結を導くよう働きかけるとも考えられる。しかし，この9人という人数の多い集団での優勢順位がどのくらい安定的に持続するのかについては，より長期的な比較研究が必要とされる。

6は，優勢順位の上位群に統制されながら下位群を統制する一方で，両方の優勢関係の相手とも親密的関係を持っており，相手によって異なる相互作用を行っていたと推測できる。優勢順位での自分の位置づけに基づいて相手に柔軟に対応することは，集団成員との関係を持続する有効な方法の1つと考えられる。これに関連して，事例2での16は，自分より上位にいる者へと，自分より下位にいる者へと異なる行動を示しており，優勢順位が二者関係に影響を及ぼすことが示唆される。つまり，6と16が自分の優勢順位を正確に認識し，それを活用していることを示していると考えられる。Strayer（1984）が指摘したように，3, 4歳の子どもも優勢順位での自分の位置づけをよく理解していることがうかがえる。

以上のように，成員個人の行動や成員間の二者関係が集団全体の優勢順位に影響を受けると考えられる。その一方で，事例3のように，親密関係にある下位者同士が優勢順位に逆らう行動をとる場面もみられたことから，優勢順位が絶対的に集団の社会的行動を決定するのではなく，二者関係が優勢順位の変遷を促す可能性や，またその二者関係が個人の行動特徴によって決められている可能性も考えられる。本研究は，既に友だち関係が形成されている男児集団をターゲットとし，各優勢順位に属する子がどういう行動を行うかという視点から研究に取り組んだのであるが，その一方で，各児の個人行動や二者関係が優勢順位の形成に及ぼす影響もあり得るという方向性も考慮する必要があるであろう。

また，観察した幼稚園では自由保育を主要な保育形態としている。従って，幼児自身が望む遊びを遊びたい友だちと一緒に長時間取り組むことを重視しており，遊びの中で葛藤場面が生じても即時に直接介入せず幼児自身による解決へのやりとりを見守る姿勢をとっている。そういった保育方針のもとに観察された事例であることを認識しておく必要があるであろう。

最後に本研究の問題点を挙げる。本研究では，3, 4歳男児9人による1つの集団のみを取り上げて，2ヶ月間の自由遊び場面での観察を通して，集団内のあらゆる成員同士の二者関係を検討することによって集団全体の関係を捉えようと試みた。しかし，集団内の関係が集団外の仲間との関係から影響を受けることが考えられ，また，ターゲット集団が進級するとともに対人的ネットワーク上にクラスメートやほかの男児集団も加わるであろう。そのため，幼児の友だち集団の特徴をより一般化するために，集団サンプル数の増加や観察期間の延長が必要であると考えられる。また，Kenny, & La Voie（1984）が指摘した関係性の非加算的特徴を考えると，集団の規模が大きければ大きいほど，集団内関係に影響を及ぼす三者間関係，もしくは四者間関係のような関係性要因が増えることが推測できる。つまり，集団全体のダイナミックな関係を論じるに当たって，最も基本的なユニットである二者間関係のみを分析の焦点とした本研究の方法に限界があるのではないかと考えられる。しかし，現段階における幼児の自由遊び場面での関係性評定法は三者間関係までを対象としており，それ以上の成員を含む集団内関係を網羅的に検討できるような尺度の開発が望まれる。

文　献

Block, J. (1978). *The Q-sort method.* Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.

Bukowski, W., & Hoza, B. (1989). Popularity and friendship; Issues in theory, measurement, and outcome. In T. J. Berndt, & G.W. Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development* (pp.15-45). New York: John, Wiley & Sons.

Farver, J. M. (1996). Aggressive behavior in preschoolers' social networks: Do birds of a feather flock together? *Early Childhood Research Quarterly,* **11**, 333-350.

Hinde, R. A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. (1985). Incidence of "friendship" and behavior toward strong associates versus nonassociates in preschoolers. *Child Development,* **56**, 234-245.

Kenny, D. A., & La Voie, L. (1984). The social relations model. *Advanced in Experimental Social Psychology,* **18**, 141-182.

Ladd, G. W., Kochenderfer, B. J., & Coleman, C. C. (1997). Classroom peer acceptance, friendship, and victimization: Distinct relational systems that contribute uniquely to children's school adjustment. *Child Development,* **68**, 1181-1197.

LaFreniere, P. J., & Charlesworth, W. R. (1983). Dominance, affiliation, and attention in a preschool group: A nine-month longitudinal study. *Ethology and Sociobiology,* **4**, 55-67.

Maccoby, E. E. (1990). Gender and relationships: A developmental account. *American Psychologist,* **45**, 513-520.

McGrew, W. C. (1972). *An ethological study of children's behavior.* New York: Academic Press.

Park, K. A., & Waters, E. (1989). Security of attachment and preschool friendships. *Child Development,* **60**, 1076-1081.

Parker, J. G., & Asher, S.R. (1993). Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology,* **29**, 611-621.

Parten, M. B. (1932). Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal Psychology,* **24**, 243-269.

Pettit, G. S., Bakshi, A., Dodge, K., & Coie, J. (1990). The emergence of social dominance in young boys' play groups: Developmental differences and behavioral correlates. *Developmental Psychology,* **19**, 830-838.

Ross, H. S., & Lollis, S. P. (1989). A social relations analysis of toddler peer relationships. *Child Development,* **60**, 1082-1091.

Strayer, F. F. (1980). Social ecology of the preschool peer group. In W.A. Collins (Ed.), *The Minnesota symposium on child psychology* (pp. 165-196). Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.

Strayer, F. F. (1984). Biological approaches to the study of the family. In R. D. Parke, R. Emde, H. Macadoo, & G. P. Sackett (Eds.), *Review of child development research: Vol. 7. The family* (pp. 1-19). Chicago: University of Chicago Press.

Strayer, F. F. (1992). The development of agonistic and affiliative structures in preschool play groups. In J. Silverberg, & J.P. Gray (Eds.), *Aggression and peacefulness in humans and other primates* (pp. 150-171). New York: Oxford University Press.

Strayer, F. F., & Strayer, J. (1976). An ethological analysis of social agonism and dominance relations among preschool children. *Child Development,* **47**, 980-989.

Strayer, F. F., & Trudel, M. (1984). Developmental changes in the nature and function of social dominance among young children. *Ethology and Sociobiology,* **5**, 279-295.

Vaughn, B., & Waters, E. (1981). Attention structure, sociometric status and dominance: Interrelations, behavioral correlates and relationships to social competence. *Developmental Psychology,* **17**, 275-288.

Weisfeld, G. E., Muczenski, D. M., Weisfeld, C. C., & Omark, D. R. (1987). Stability of boys' social success among peers over an eleven-year period. In J. A. Meacham (Ed.), *Interpersonal relations: Family, peers, friends* (pp. 58-80). Basel: Karger.

Youngblade, L. M., Park, K. A., & Belsky, J. (1993). Measurement of young children's close friendship: A comparison of two independent assessment systems and their associations with attachment security. *International Journal of Behavioral Development,* **16**, 563-587.

付記

本論文の作成にあたり，懇切丁寧なご指導をいただきました台湾大学公共衛生学部の李文忠教授，愛媛大学教育学部の深田昭三先生に心より御礼申し上げます。また，調査にご協力していただきました幼稚園の先生方，園児

の皆様に心より感謝いたします。さらに，本論文の審査過程において有益なコメントをくださいました査読者の諸先生方にも深く御礼申し上げます。

Hsieh, Wen-huei (The Doctoral Research Course in Education, Hiroshima University) & Yamazaki Akira (Faculty of Education, Hiroshima University). *An Ethological Analysis of Individual Characteristics, Dyadic Relationships, and Dominance Hierarchy in a Group of Three-and Four-Year Old Boys.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol. 12, No.1, 24-35.

This research evaluated the relations between individual behavioral characteristics, dyadic relationships, and the dominance hierarchy, in a 9-member friendship group of preschool boys. The behavior and dominance relationships of each boy as paired with each group member were measured, as observed during free play over a two-month period. The average dominance score for each pair was correlated with measures of cohesiveness, harmony, control, responsiveness, self-disclosure, and coordinated play. Group activities generally centered mainly on the most dominant boys. There was a linear relation within the observed group for dominance, with the most dominant child in the group showing considerably more affiliation and harmonious interaction with his group members, as well as the most control behavior. In contrast, the second dominant child showed diverse behavior in affiliation and harmony with other group members. Control behavior also was evident between children ranking lower in dominance. The results showed that among the 3- and 4-year old boys, individual characteristics and dyadic relationships were both related to their group's dominance hierarchy.

【Key Words】 Preschoolers, Peer group, Individuality, Dyadic relationships, Dominance hierarchy

1999.8.9 受稿，2001.1.18 受理

発達心理学研究
2001，第12巻，第1号，36-45

原　著

2〜4歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達的比較

櫻庭　京子　　今泉　敏
（名古屋大学大学院人間情報学研究科）（東京大学大学院医学系研究科）

本研究では2〜4歳の幼児（N=134）を対象に，「喜び」，「悲しみ」，「怒り」，「驚き」の基本4情動について，情動語を呈示してそれにあう表情図を選択させる課題（言語呈示課題）と，赤ちゃんの写真を提示して赤ちゃんが示す情動と共通の情動を示す表情図を選択させる課題（表情呈示課題）を実施した。その結果，両課題とも正答率は加齢とともに有意に上昇したものの，年齢によらず一貫して言語呈示課題の方が高かった。表情呈示課題では口など顔面構成要素の形状が共通である表情図を選択する傾向があり，それが成績を下げる要因であった。これらの結果は，情動語とそれに対応する表情の結びつきが2歳までには発達し始めていることを示唆する。

【キー・ワード】幼児，情動認知，表情認知，情動語，情動発達

問　題

情動は有機体にとって重要な心理的事象に対する「喜怒哀楽」などの反応であり(Dodge, & Garber, 1991; Frijda, 1986), 表情，言語，プロソディ，身振り等によって表出される。ある状況下で生じた他者の情動を認知するには，表情，言語，プロソディ，身振り等の背後にある情動を認知するか，状況から当然生じると思われる情動を推測する方略が考えられる。中でも表情は情動認知のための重要な要因であると考えられ，今までにも数多くの表情の認知能力を測定する実験が行われてきた（e.g., 星野, 1969; Izard, 1971)。

表情の認知能力は新生児にも観察されるという報告がある（Field, Woodson, Cohen, Greenberg, Garcia, & Collins , 1983 ; Field, Woodson, Greenberg, & Cohen, 1982)。乳児を対象に表情の認知能力を測る場合，主としてPreference法（呈示された2つの異なる表情に対する注視時間の差を表情認知の指針とする）か，Habituation法（表情を反復呈示した時に生じる馴化，脱馴化の反応を表情認知の指針とする）が使用されてきた。そのためPreference法では乳児の表情選好が一定していないなど注視時間の妥当性を疑問視する見解（Walker-Andrews, 1997)，Habituation法では表情の弁別能力が計測されているのであって認知能力は測れないとする見解（Proffitt, & Bertenthal, 1990）など，乳児の表情認知能力を疑問視する見解もある。

しかしながらSorce, Emde, Campos, & Klinnert (1985) のVisual Cliff実験（1歳児は母親の表情を認識して，人工的に作られた断崖を渡るか渡らないか決定した）から，1歳になれば少なくとも母親の表情から「勧誘」や「禁止」を感知することが可能であると考えられている。ただし，この実験は母親の動きのある表情の認知に関する知見であり，しかも「断崖を渡る」という状況が付加されている。従って，写真や絵のような静止画から感情を読み取るという表情認知実験と必ずしも同じというわけではない。

1歳以降になり，徐々に言語や認知能力が発達してくると，表情の認知能力を測る実験では，課題に言語が用いられるようになってくる。多くの研究では，情動語の理解・表出能力と表情認知能力を測定する複数の課題を実施しており，課題間の成績を比較することによって情動語の理解・表出能力と表情認知能力の発達を検討している。

例えばHarrigan（1984）は3, 6, 9, 12歳児を対象にEmotion Recognition（情動語を呈示して，複数の表情から情動語に対応する表情を選択させる）課題とEmotion Labeling（表情を呈示して，情動語を自由に産出させる）課題を施行し，どの年齢においても表情を選択する課題の成績の方が情動語を産出する課題より良好であることを示した。

Markham, & Adams (1992) は4, 6, 8歳児を対象に (1) Situation Discrimination（情動を喚起する短い物語と情動語を与えて，表情を選択させる課題)，(2) Matching Discrimination（表情を呈示して，異なる複数の人物が示す様々な表情から同一情動の表情を選択させる課題)，(3) Forced Choice Labeling（表情に対して情動語を数個呈示し，その中からふさわしい情動語を選択・復唱させる課題)，(4) Free Labeling（表情を呈示して，情動語を自由に命名させる課題）を施行した。その結果，Harrigan（1984）同様にどの年齢でも情動語を自

由に産出させる課題が一番難しいという結果を報告している。Izard（1971）も，Free Labeling，すなわち基本情動に関する情動語の産出は，8歳以降に成熟していく能力であることを示している。

それでは情動語の理解と表情認知に関しては，どちらが先に獲得されるのであろうか。Markham, & Adams (1992) の研究では全ての課題の成績は加齢とともに上昇したものの，Free Labeling 以外の3課題の成績はどの年齢においても有意差がなかった。

しかしながら Camras, & Allison（1985）のように，保育園児から小学校2年生を対象に facial expression response（情動を喚起する短い物語と合致する情動語を呈示して，表情を選択させる課題）と verbal label response（情動を喚起する短い物語と情動に合致する表情を呈示した後，数個の情動語を呼称して，合致する情動語を選択，復唱させる課題）を施行した場合には，情動語を選択する課題の成績の方が表情を選択する課題よりも良好という結果もある。

Walden, & Field（1982）は3, 4, 5歳児を対象に，Generalized Matching（表情を呈示して，異なる複数の人物の示す様々な表情から同一情動の表情を選択させる課題）の3条件（①表情図のみ呈示，②表情図と情動語を呈示，③表情図の顔面構成部位を指差す）と情動語のみ呈示して表情を選択させる課題を施行した。その結果，②表情図と情動語を呈示する条件及び情動語のみ呈示する課題が，①表情のみを呈示する条件よりも成績が良好であった。

以上の先行研究から，情動語の理解と表情認知の関係を分析すると，比較的高年齢群を対象にした Markham, & Adams（1992）の結果は別にして，3～5歳という低年齢群では，課題の呈示形式においては表情のみより情動語が与えられる課題が容易であり（Walden, & Field, 1982），回答においては表情より情動語を選択する方が容易である（Camras, & Allison, 1985）と言える。このことから，少なくとも3歳では，表情認知能力より情動語の理解力の方が勝っているということが示唆される。

Camras, & Allison（1985）は，保育園児～小学2年生において，情動語選択の課題の方が表情選択の成績より良好であるという自分の研究の結果と，乳児は表情の背後にある情動を認知可能であるという先行研究（Caron, Caron, & Meyers, 1982; Field, Woodson, Greenberg, & Cohen, 1982, etc.）の結果を考慮して，情動語の理解力と表情認知能力の関係に関する3つの仮説をたてた。それは初語の産出が始まる年齢を1歳前後とし，生後から初語開始時期までを前言語期と定義すると，(i-a) 前言語期から表情の認知能力は発達を開始するが，1歳以降から遅れて始まる情動語を理解する能力とほぼ同じ頃に成熟する，(i-b) 前言語期から表情の認知能力は発達を開始するが，1歳以降から遅れて始まる情動語を理解する能力の方が早く成熟する，(ii) 前言語期から情動語を理解する能力の方が表情認知能力に先行して発達を開始している，というものである。

また MacDonald, Kirkpatrick, & Sullivan（1996）は3, 4, 5歳児を対象に Label-based-condition（情動語を呈示して表情を選択させる）課題とContext-based-condition（情動を喚起する短い物語と情動語を呈示して表情を選択させる）課題を施行した。その結果，統計的な有意差は生じなかったものの，情動語だけを呈示する課題の成績の方が短い物語と情動語を呈示する課題より良好であった。そこで MacDonald et al.（1996）は，Camras, & Allison（1985）や自らの実験結果を考察して，低年齢の幼児の場合，課題の呈示形式や回答形式として「簡潔なものを好む」という結論を出した。つまり物語や表情より情動語の方が簡潔だからである。しかしながら，情動語を理解できない前言語期の乳児にとっては表情が他者の情動を認知するための手段として使われていると考えられる。そこで前言語期の乳児は表情によって情動を判断することになるものの，情動語が理解可能になると情動語の方を優先利用するようになる。つまり様々な認知能力の発達や成熟に従い，他者の情動認知の方略を変更していくという発達過程を提案している。

しかしながら，以上の仮説はすべてが前言語期では表情認知が可能であること（e.g., Serran, Iglesias, & Loeches, 1992, etc.）及び3歳以上では情動語の理解力が高まることから推測されたもので，同一実験によって表情認知と情動語の理解力の獲得時期や，それらの相互関係を検討したものではない。言語や認知の能力がめざましく発達を開始する時期は2歳であり，2歳であれば簡単な課題は理解可能で，年長の子どもと同一の課題を実施可能な最小年齢と考えられる。そこで2歳から数年年長の幼児を対象に表情認知能力と情動語理解力の発達過程を検討することは有意義であると考えた。

本研究の第1の目的は情動認知課題を2種類の刺激提示方法で2～4歳の幼児に実施し，表情認知能力と情動語理解力の発達的比較を行うことである。具体的には，情動語を呈示しその情動語が表す情動に最も相応しい表情図を選択肢の中から選ばせる言語呈示－表情選択課題（以下言語呈示課題とする）と，表情図を呈示し，その表情図が表す情動に最も相応しい表情図を選択肢の中から選ばせる表情呈示－表情選択課題（以下表情呈示課題とする）を行い，情動の呈示形式（情動語か表情図か）に応じて反応に有意差があるかどうか，それが発達的に変化するかどうかを検討した。本研究では違った方法で呈示された目標刺激の情動が理解できるかどうかを検討するため，回答を得る方法は両課題で共通にした。つまり，両課題とも4枚の表情図を呈示して目標刺激の情動

に対応する情動の表情図を指差してもらった。これは，本研究の被験者の最小年齢が2歳であり，言語表出や文字単語の選択が困難であると考えたためである。

本研究の第2の目的は個々の情動の認知の発達過程をみるものである。情動は階層的で多様であると考えられる。つまり，快対不快のような基本的情動，不快の中でも怒りや悲しみなど細分化された情動，激しい怒りや秘めた怒りなどさらに細分化された情動があり，このように多様な情動の認知が精緻化されていく発達過程は全ての情動で共通というよりそれぞれに異なっていると考える方が自然である。そこで，それぞれの情動認知の発達過程が情動の種類に応じて違うかどうかを検証するものである。

方　　法

被験者　被験者は首都圏在住の個人，及び保育園，幼稚園に通う2～4歳（24～59カ月）の幼児，計134名（男児68名・女児66名，平均月齢＝42カ月（*SD*7.60））で，各年齢の内訳はTable 1に示した。

対象情動　「怒り」「喜び」「悲しみ」「驚き」の4情動を使用した。

情動語　目標刺激に使用した情動語は表情を外的表出活動の面でとらえた活動表出的語彙（例；笑っている），表情の背後にある情緒質そのものを表す情緒表出的語彙（例；嬉しい）及びオノマトペ（例；ニコニコ）などであった。星野（1969）は活動表出語彙，情緒表出語彙共に，感情や気分などの心的状態を表すという意味で両者は共通のものとみなしている。オノマトペは，幼児向けの絵本において，登場人物の情動を表現する場合に比較的頻繁に使用される語彙である（藤永，1991，他）。本研究では，これらの語彙は全て心内の情動を表現しているものとみなした。

パイロットスタディにおいて，実験者が「嬉しくて笑っている子はどおれ？」と被験者に質問した際，同席した母親や保育者が「ニコニコしてる子」など，他の語彙に言い換えることがあった。本研究の最小年齢は2歳であり，この年齢の幼児では，母親や保育者が頻繁に使用する語彙をよく理解しているなど，環境による偏りがあると考えられる。そこで「嬉しくて笑ってる○○どおれ？」「ニコニコしてる○○どおれ？」など，複数を順不同に与えた。また，実験者の語りかけの調子は特に統制せず，自然に子どもに語りかけるようにした。

Table 1　*被験者の月齢の内訳*

年齢	人数	平均月数	標準偏差
2歳	40(16)	31.48	3.374
3歳	68(40)	41.49	3.560
4歳	26(10)	51.04	2.778

（　）内は女児の数

表情図　MacDonald et al.（1996）は，例えば幼児虐待を受けた子ども達は成人の表情写真を見ると不安を掻き立てられるとして，子どもが被験者の場合，写真より抽象的な線画を用いる利点を述べている。これは，虐待経験は別にしても，幼児が被験者の場合，表情を示す人物の嗜好が結果を左右する可能性があるということを示唆するものである。また，針塚（1977）は「象徴としての表情を認知するということは，表情の強度など認知の正確さを意味するのではなく，表情を他の人と共通の象徴として認知しうるかという問題であり，象徴的な絵を用いた方が妥当」と述べている。本研究でも問題とするのは，幼児が表情を共通の象徴として認知可能かということであり，表情図を用いることが妥当と考えた。また，幼児の注意や興味をよりひきつけるため，抽象画ではなく，幼児に人気のあるアニメのキャラクターを用いた。

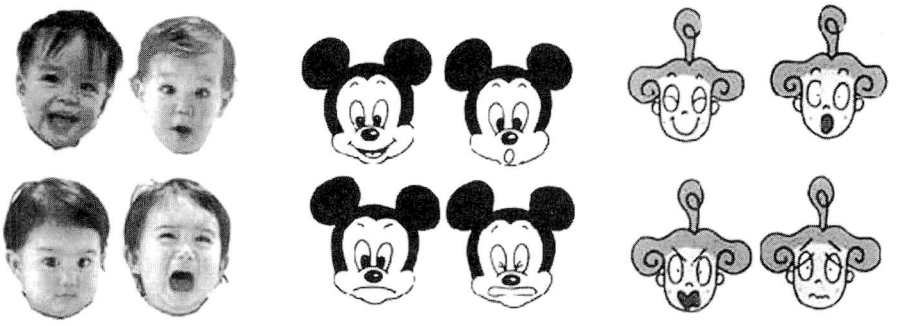
選択肢表情図に用いられたキャラクターの選定には，幼児向け雑誌や玩具で使用されているキャラクターで使用頻度の高いものから，2～3歳児のいる母親への電話アンケート調査を行い，幼児に好まれるもので，なおかつ性差による好みがでないものとして，ミッキーとコニーを選択した。

パイロットスタディにおいて，アニメのキャラクターの表情どうしをマッチングさせたところ，表情自体よりも一部の線や図形の同一性に基づき「同じ」と判断するケースが見受けられた。そこで表情自体に注意を向けさせる工夫として，子ども向け知育絵本（藤永，1991）からオノマトペと共に掲載してある赤ちゃんの写真を採用した。Figure 1は本実験で用いられた刺激材料である。

表情認知において，どの顔面構成部位が主要な手がかりとして判断されるかについて，研究者によって目，眉などと諸説有り一致しておらず，被験者がその部位のみを情動認知に使用しているという明確な実証もない（今井，1978）。しかしながら，本研究のパイロットスタディでは目標刺激の表情図が口を開けている場合，選択肢表情図の中で口を開けているもの全てを選択する例が見受けられた。このことから幼児は口に対して比較的注意を向けやすいことが示唆される。

そこで，本研究では2つの選択肢のうちコニーにおいて「驚き」以外，口の開閉を刺激の赤ちゃんとは逆にし，ミッキーにおいては赤ちゃんと同じにした。「驚き」だけを三者とも口を開けた理由は，「驚き」は「目を見開いて口を開ける」という表情が一般的であり，キャラクターの口を閉じた場合，成人対象の判別実験でも他の情動に混同されることがあったためである。選択肢表情図に対して何らかの交互作用が生じた場合には，課題で使用される選択肢表情図が表情認知能力の測定に影響を及ぼすことが示唆される。

赤ちゃんの表情図*　　ミッキーの表情図　　コニーの表情図



＊（講談社ディズニーベビー絵本『にこにこあはは』より引用）

Figure 1　*赤ちゃん，ミッキー，コニーの表情図*

これらの表情を，言語呈示課題では全て10cm × 15cmのカード形式にして呈示した。一方，表情呈示課題では目標刺激となる「赤ちゃん」の写真は言語呈示課題のカードをそのまま使用したが，選択肢のミッキーとコニーは各キャラクターごとに4つの情動を1枚の紙（A4サイズ）に2 × 2列で並べ，ラミネート加工したものを4枚ずつ用意した。1枚ごとに表情図の並びが異なるように配置した。

なお，表情図は成人（N=10）による言語呈示課題で全て100%の正答をえたものである。

実験場所　保育園，幼稚園では個室あるいは事務所の一角を使用した。実験は被験者ごとに個別に行われたが，被験者の状態により保育者に同席してもらった。個人宅でも，被験者の状態により母親に同席してもらった。

手続き　最初に言語呈示課題，次に表情呈示課題を行う群と，最初に表情呈示課題，続いて言語呈示課題を行う群をランダムに振り分け，表情呈示課題8試行｛2キャラクター（ミッキー，コニー）× 4情動（喜怒悲驚）｝，言語呈示課題12試行｛3キャラクター（赤ちゃん，ミッキー，コニー）× 4情動（喜怒悲驚）｝の計20試行を行った。「赤ちゃん」を選択肢とした言語呈示課題は本研究の分析の対象からは除外したが，表情呈示課題で目標刺激に使用したため，幼児が「赤ちゃん」の表情をどのくらい認識しているかの参考にするため実施したものである。

言語呈示課題では赤ちゃん，ミッキー，コニーの表情を各情動毎のカードにして呈示した。キャラクターごとに4つの情動のカードを呈示した後，「ミッキーちゃんだね。いろんなお顔してるね。いろんなこと思ってるんだよ。どんなこと思ってるのかな？」と導入し，「この中で嬉しくて笑ってる子どれ？」「ニコニコしてる子どおれ？」と質問した。指差しの反応を確認後，テーブル上の4枚のカードを全て回収し，あらためてテーブルの上の異なる場所に並べ，同様の質問を情動ごとに繰り返した。キャラクター及び情動の呈示の順番は被験者間でランダムに割り当てた。

表情呈示課題ではキャラクターの4情動の表情図を載せたA4サイズのボードを呈示し，「ミッキーちゃんだね。いろんなお顔してるね。いろんなこと思ってるんだよ。どんなこと思ってるのかな？」と導入した。その後で，赤ちゃんの写真を1枚取り出し，「この赤ちゃんと同じ気持ちのミッキーちゃん，同じこと思ってるミッキーちゃんはどれかな？」と質問し，反応がない場合には「同じお顔どおれ？」という短い質問に変え，表情図を指差しさせた。幼児の反応を確認後，キャラクターの情動の配列が異なるボードと赤ちゃんの写真を取り出し同様の質問をした。また，どの課題でも正答をフィードバックすることは一切行わなかった。こちらの質問に何らかの反応を示せば全て誉め，課題への興味や集中力を失わせないよう，終始努めた。

結果の分析　誤りを含めたすべての反応の生起確率がどのような要因の効果として表されるかを，χ^2検定法の一般化された方法である対数線型法で解析した。対数線型法はSASのCATMODによった（SAS Institute, 1999）。

本論文と類似の手法を用いている先行研究（Walden, & Feild,1982）では，反応データとして正解に1，不正解に0を割り当てた2値数列を，複数要因の一般線型モデル（SAS Institute, 1999）で予測する形式の分散分析で解析している。この場合，2値数列に分散分析を適応する妥当性が問題になる。一方，本論文では，ある刺激情動に対してある情動を選択した被験児数を課題，年齢，表情図を要因とする多次元の表としてまとめ，対数線型モデルで解析した。この場合，課題，刺激情動，表情図は本来繰り返

し要因となり，対数線型モデルでの分析が最適とはいえないものの，現在のところより優れた方法が見あたらないので対数線型モデルを使用した。

そのため，まず初めに，ある刺激情動に対してある情動を選択した被験児数を課題，年齢，表情図を要因とする多次元の表としてまとめた。この場合，表の最大値は，年齢によって異なるものの，2歳児で40，3歳児で68，4歳児で26となり，3次以上の交互作用を求めるのに十分な観測数と判断した。

解析に用いた要因は，年齢（2,3,4歳の3水準），課題（言語呈示課題と表情呈示課題の2水準），課題呈示順序（1番目と2番目の2水準），目標刺激として提示した情動（刺激情動；喜び，悲しみ，怒り，驚きの4水準），選択された情動（選択情動：刺激情動に「無反応・その他」を加えた5水準），選択肢として用いた選択肢表情図（ミッキーとコニーの2水準）である。

対数線型モデルではより少ないパラメーターで，尤度比が有意でないモデルを選択した。まず，少なくとも年長の被験児は刺激情動に対応した情動を選択できることを前提としたので，刺激情動・選択情動の交互作用が有意になると仮定した。さらに，この刺激情動と選択情動との関係が，加齢，課題，表情図に応じて有意に変化すると仮定した。これらの仮定にしたがって，刺激情動・選択情動，刺激情動・選択情動・年齢，刺激情動・選択情動・課題，刺激情動・選択情動・表情図を要因とする不飽和モデルを規準として選定した。ただし，これら以外の要因が有意にならないと言う保証を得るために，上記の不飽和モデルを出発点として有意な要因をすべて含むモデルで尤度比が最大になるモデルを探索した。

結　　果

Table 2には，幼児の反応を年齢・課題・刺激情動・選択情動別にまとめた。後に示すように対数線型モデル（Table 3）で主効果・交互作用ともに有意でなかった課題呈示順序を除いて表を理解しやすくしてある。表内の数値は反応数を刺激総数（2歳40名，3歳68名，4歳26名）に対する百分率で表したものである。対角線上にある太字の数値は正答率である。行は刺激情動であり，列は選択情動を表す。

対数線型モデルによる分析の結果，Table 3に示すように，年齢（$\chi^2(2)=142.33$, $p<0.0001$）及び選択情動（$\chi^2(4)=36.39$, $p<0.0001$）の主効果，刺激情動と選択情動の交互作用（$\chi^2(12)=1082.07$, $p<0.0001$），さらに，年齢・刺激情動・選択情動（$\chi^2(24)=173.74$, $p<0.0001$），課題・刺激情動・選択情動（$\chi^2(12)=73.03$, $p<0.0001$），選択肢表情図・刺激情動・選択情動（$\chi^2(12)=33.14$, $p=0.0009$），課題・刺激情動・選択情動・選択肢表情図（$\chi^2(12)=21.93$, $p=0.038$）の交互作用を含むモデルが選択された。尤度比は391.49で，有意ではなかった（$p=0.61$）。課題呈示順序とそれが関与する交互作用はすべて有意にならなかった。

年齢の主効果が有意になったのは，課題を通過できた被験者数に2歳児で40名，3歳児で68名，4歳児で26名と，被験者数に年齢間差異があったためである。また，選択情動の主効果が有意になったのは，「その他」の回答が平均で9%と他の回答に比べて少ないためである。

Table 2　*年齢・課題・選択肢表情毎の幼児の反応*

		言語呈示課題										言語平均	表情呈示課題										表情平均	平均	年齢別全体平均	言語感情別平均	表情感情別平均	感情別全体平均
		ミッキー					コニー						ミッキー					コニー										
		喜	悲	怒	驚	他	喜	悲	怒	驚	他	正答率	喜	悲	怒	驚	他	喜	悲	怒	驚	他	正答率	正答率				
2歳	喜	65	15	3	13	5	60	5	10	18	8	63	33	20	18	15	15	20	15	23	25	18	26	44		80	56	68
	悲	8	78	8	5	3	8	43	28	3	20	60	15	60	3	15	8	15	33	25	18	10	46	53		78	64	71
	怒	5	28	53	15	0	15	15	40	10	20	46	23	23	33	5	18	30	15	18	18	20	25	36		76	37	56
	驚	20	15	18	28	20	20	18	23	30	10	29	33	15	15	25	13	20	15	25	30	10	28	28	40	55	56	55
3歳	喜	87	3	4	3	3	85	0	3	9	3	86	68	6	9	12	6	51	3	3	29	13	60	73				
	悲	1	90	3	4	1	4	75	3	4	13	82	3	78	3	7	9	6	57	15	9	13	68	75				
	怒	4	4	81	6	4	0	3	91	4	1	86	18	3	56	10	13	19	16	26	19	19	41	64				
	驚	13	13	13	50	10	7	7	9	68	9	59	13	4	3	74	6	13	7	7	65	7	69	64	69			
4歳	喜	88	4	0	4	4	96	4	0	0	0	92	81	0	4	4	12	81	0	4	8	8	81	87				
	悲	0	88	0	4	8	0	92	4	0	4	90	0	81	0	4	15	4	73	4	4	15	77	84				
	怒	0	4	92	0	4	4	0	96	0	0	94	8	4	62	19	8	27	12	31	15	15	46	70				
	驚	12	4	4	73	8	4	12	0	81	4	77	12	0	4	73	12	12	4	8	69	8	71	74	79			
平均正答率		80	85	75	50		80	70	76	60		72	61	73	50	57		51	54	25	55		53	63				
選択肢表情別平均												ミッキー	70	79	63	54	コニー	66	62	50	57							

注．数値は各セル内の反応人数を，刺激総数（2歳40名，3歳68名，4歳26名）で割った%値である。　　（単位：%）

Table 3　*分析に使用した対数線型モデル*

Source	DF	Chi-Square	Prob
年齢	2	142.33	0.0000
選択情動	4	36.39	0.0000
刺激情動*選択情動	12	1082.07	0.0000
課題*刺激情動*選択情動	12	73.03	0.0000
選択肢表情*刺激情動*選択情動	12	33.14	0.0009
年齢*刺激情動*選択情動	24	173.74	0.0000
選択肢表情*課題*刺激情動*選択情動	12	21.93	0.0383
尤度比 (LIKELIHOOD RATIO)	400	391.49	0.6100

刺激情動と選択情動の交互作用は高度に有意となり，両者の間に有意な相関関係があることがわかった。Table 2 に示されるように刺激情動と選択情動との対応関係を正答率でみると全体の平均値が 63%となり，チャンスレベルの 20%に比べて高く，対応は規則的であると言える。誤答反応には一定の傾向がみられなかった。情動別の全体平均正答率では，成績の良好なものから順に「悲しみ」(71%)，「喜び」(68%)，「怒り」(56%)，「驚き」(55%) の順になった。

年齢・刺激情動・選択情動の交互作用が有意となり，選択情動つまり反応が年齢と刺激情動によって有意に異なることが検証された。Table 2 から分かるように，全課題を総合した平均正答率は 2 歳児では 40%と低いのに対して，3 歳児 69%，4 歳児で 79%と上昇し，加齢とともに刺激情動と選択情動の対応に一貫性が増した。情動ごとに成績を比べると，「悲しみ」(2 歳 53%，3 歳 75%，4 歳 84%) と「喜び」(2 歳 44%，3 歳 73%，4 歳 87%) が「怒り」(2 歳 36%，3 歳 64%，4 歳 70%) や「驚き」(2 歳 28%，3 歳 64%，4 歳 74%) より高くなった。

また，課題・刺激情動・選択情動の交互作用が有意なことは，課題と刺激情動によって成績が変化することを示す。対象とした 4 情動に関して平均すると，言語呈示課題の正答率は 72%，表情呈示課題のそれは 53%となり，いずれの年代においても言語呈示課題の方が表情呈示課題よりも成績が良好であった。しかし，情動ごとに細かく比較すると，「喜び」(言語呈示課題 80%，表情呈示課題 56%)，「悲しみ」(言語呈示課題 78%，表情呈示課題 64%)，「怒り」(言語呈示課題 76%，表情呈示課題 37%)，「驚き」(言語呈示課題 55%，表情呈示課題 56%) となり，「喜び」と「怒り」では課題間差異が大きく，「驚き」では差が無かった。

選択肢表情・刺激情動・選択情動の交互作用が有意になったのは，選択肢表情と刺激情動によっても成績が変化することを示す。平均正答率を選択肢表情図ごとに比較すると，「喜び」(ミッキー 70%，コニー 66%)，「悲しみ」(ミッキー 79%，コニー 62%)，「怒り」(ミッキー 63%，コニー 50%)，「驚き」(ミッキー 54%，コニー 57%) となり，「悲しみ」と「怒り」で差が大きく，「驚き」では差がなかった。

Table 4　*赤ちゃんの言語呈示課題の反応*

		喜	悲	怒	驚	他
2歳	喜	50	13	18	15	5
	悲	3	73	8	5	13
	怒	5	23	35	15	23
	驚	20	25	13	25	18
3歳	喜	90	0	1	1	7
	悲	0	90	0	1	1
	怒	4	1	90	15	13
	驚	16	7	13	47	16
4歳	喜	88	0	0	8	4
	悲	0	100	0	0	0
	怒	4	0	81	4	12
	驚	8	19	4	62	8
平均正答率		76	81	69	45	

(単位；%)

さらに課題・選択肢表情・刺激情動・選択情動の交互作用も有意になり，選択肢表情・刺激情動・選択情動の関係が課題によって異なることが示された。つまり，言語呈示課題では，ミッキーで 73%，コニーで 71%と差が無く，表情呈示課題ではミッキーの 60%に対し，コニーは 46%と低くなった。これは，表情呈示課題において刺激情動の赤ちゃんの表情と口形を含む表情を似せたミッキーの方が，そうでないコニーよりも成績が良好であったことによる。

なお，赤ちゃんとミッキー，コニーの 3 選択肢表情図を使用して言語呈示課題を行い，対数線型法によって分析した。Table 4 は選択肢表情が赤ちゃんの時の言語呈示課題における幼児の反応を示している。これは，表情呈示課題の目標刺激に用いた赤ちゃんと両課題で選択肢表情図として使用したミッキーやコニーを比較し，選択肢表情図の違いによって言語呈示課題の成績に差がないことを確認するためである。その結果，選択肢表情図の主効果と他の要因との交互作用はどれも有意にはならなかった。この結果は，言語呈示課題では選択肢表情図の違いが成績に影響しないこと，赤ちゃんの表情の背後にある情動も他の選択肢表情図と同程度に理解されたことを示す。

考　　察

情動認知の課題間差異

正答率は加齢とともに上昇したものの，表情呈示課題の正答率は言語呈示課題のそれよりもどの年齢群においても低かった。今回の実験では表情呈示課題（表情呈示ー

表情選択)，言語呈示課題（言語呈示－表情選択）とも反応の方法は共通で，4種の表情図からどれか1つを選ぶ方式で統一した。反応選択の段階では両課題とも表情認知が必要であるものの，課題間における正答率の差異は呈示方法の違いを反映する。

2歳においても表情を呈示するより情動語を呈示した方が良いという結果は，情動の発達過程において言語が重要な役割を果たすことを示唆するものである。北山（1998）は「腹立たしい」などの内的な感覚が，感情として成立するためには，周囲からの働きかけなどによって感情として意味づけられる必要があると述べている。これは，例えば幼児が泣いた時，「何故悲しいか？」などのように周囲のものが幼児の心的状態を「悲しい」とラベル付けしてあげることで，内的な感覚が各情動のカテゴリーに分類され，情動として成立していくことを示唆するものである。

また，どの年齢でも言語呈示課題の成績が表情呈示課題より良好だったことは，課題による処理過程の違いが影響したと考えられる。

言語呈示課題では情動語（ラベル）が抽出されると，記憶の中にある辞書と照合され，ラベルの意味が理解される。その後，選択肢の中からラベルによりふさわしい表情を選択するものと考えられる。星野（1969）は表情には多義性があり，言語呈示課題における選択肢表情図の選択は情動語と表情の1対1対応を示す絶対的なものでなく，他の選択肢表情図と比較して情動語に一番ふさわしいものを選択する相対的な評価であると述べている。

一方，表情呈示課題では処理過程に3つのルートが考えられる。第1のルートはWalden, & Field（1982）が示唆するように，ラベルの利用を介するルートである。つまり表情を認知した際，それにふさわしいラベルを想起し，その後，言語呈示課題と同じ処理過程を辿るというルートである。

第2のルートは目標刺激の表情を認知し，記憶の中にある表象と照合後，その表象を用いて選択肢の表情と1つ1つと照合し，一致するものを選択するというものである。Hebb（1972）は乳児の人見知りを記憶の中にある既知の顔の表象と照合し，既知か未知かを判断するという「不一致仮説」で説明した。表情の認知に関しても同様のルートが使われる可能性がある。

第3のルートは表情の目や口といった顔面構成部位などの物理的な形状に注目し，選択肢表情図の顔面構成部位の形状とマッチングする，というものである。故に第3のルートを使用する場合，表情には目が向けられず，顔面構成部位の形状にとらわれてマッチングする可能性も考えられる。Patterson, & Baddeley（1977）は顔面構成部位に着目してマッチングを行った場合，成人でも表情呈示課題が難しくなると指摘している。個々の顔面構成部位の変化が表情を構成するものの，個々の部位に拘った場合には逆に表情が認知しにくくなることが示唆される。

総括すると，表情呈示課題においては，第1ルートでは情動語の想起というFree Label課題と同様の困難さがある。第2ルートでは刺激の表情の意味は把握できたとしても，表情の情動別カテゴリーが獲得されていない場合，選択肢から他の同じ情動を示す表情を適正に選択することには困難が伴うと思われる。つまり個々の表情の意味は理解していても，それを同じ情動カテゴリーに分類することが難しいのである。第3ルートでは顔面構成部位の形状が異なると，マッチングが難しくなると考えられる。

本実験では，課題・刺激情動・選択情動と課題・選択肢表情・刺激情動・選択情動の交互作用が有意であり，言語呈示課題より表情呈示課題の成績が悪く，表情呈示課題で刺激情動の赤ちゃんの口形を似せたミッキーの方が，そうでないコニーよりも成績が良好であった。これらのことから，表情呈示課題は第2,3のルートに頼って遂行されているものと考えられる。つまり表情の意味はわかっていても，カテゴリー分類が難しかったり，表情の一部の形状の違いに注意が奪われるためにマッチングが難しかったのである。

情動認知の発達過程

両課題の得点を総合した情動認知の成績は良好なものから順に「悲」，「喜」，「怒」，「驚」となった。多くの先行研究では施行された課題や刺激や年齢幅に若干の違いはあるものの，どの課題も情動語の表出，あるいは理解する能力の測定を含むものである。それらの先行研究の結果では，「喜び」が最も正確に認知され，次に「悲しみ」で，「怒り」や「驚き」は比較的認知能力の獲得が遅れる情動になっている（Broke, 1973; Glitter, Mostofsky, & Quincy, 1971; LaBarbera, Izard, Vietze, & Parisi 1976; Nelson, Morse, & Leavitt, 1979)。

「喜び」と「悲しみ」が表情による情動認知の容易さの1,2番目に位置する研究結果は圧倒的に多い(e.g., Walden, & Field, 1982)。これは幼児の表情認知が，表情をまず2つのカテゴリーに分類することから始まるということを予測させるものである。本研究では実験中の観察から幼児が自発的に表情にラベリングする際，「泣いてる，泣いてない，泣いてない…」と1つの情動を軸にして，残りの情動をその否定形で表現する例がしばしば見受けられた。これは表情の認知の発達が1つのキーになるPositiveあるいはNegativeな情動の獲得とそれ以外の情動という，二項のカテゴリーに分割される形で始まることを示唆するものではないだろうか。

情動認知において，情動による発達差が生じる理由として，情動の共感性もあると考えられる。「悲しみ」「喜

び」の情動を示す発信者に対して，その情動を受信する側も発信者と同様の情動で共感することができる。ところが「怒り」は，発信者と受信者で情動を共有しにくい。発信者・受信者ともに「怒り」の情動を共有する場合もあるが，発信者が「怒り」を表す場合，受信者はそれに対して「恐怖」「嫌悪」などの否定的な情動を喚起する場合も，特に乳幼児では多いと考えられる。発信者と受信者の情動のズレが認知能力の習得の遅れに関係するのではないだろうか。

情動による認知成績の課題間差異

情動認知の発達過程には課題や刺激によらない共通した傾向も存在するものの，Markham, & Adams (1992) が指摘するように，実施する課題によっては認知しやすい情動や難しい情動が存在する (Camras, & Allison, 1985; Harrigan, 1984; Michalson, & Lewis, 1985)。本研究では，「驚き」の成績が表情呈示・言語呈示の両課題でほぼ同じになり，「怒り」の成績は両課題間において大きく解離した。そこで，「驚き」と「怒り」において何故そのような課題間格差の違いが生じたかを検討する。

まず，「驚き」の表情呈示課題では開いた口を手がかりにマッチング可能であるものの，言語呈示課題では情動語を獲得していないと正答できない。つまり「驚き」では情動語の獲得が他の情動に比較して遅れていることが示唆される。この理由として，情動の持続時間の差が考えられる。「悲しみ」「喜び」「怒り」はその持続時間が「驚き」の情動に比べて長い。ということは他者が「悲しみ」や「喜び」の情動でいる状態を観察することも多くなるし，周囲の大人が「笑ってる」「泣いてる」という命名する機会も多くなる。一方「驚き」は，それに比べて情動の持続時間が短く，命名の機会も少ないと考えられる。「驚き」は一瞬の情動であり，すぐに他の情動へ移行していくものである。Tomkins (1962) は「驚き」を表出中の情動から他の情動へ移るための情動として捉え，"channel clearing emotion" と命名している。

MacDonald et al. (1996) は「驚き」が瞬時の情動であり，他の情動へすぐに移行することから，幼児は "a happy surprised face" のように情動を混ぜこぜにして使用したり，次に移行する情動と合わせて1つの情動（例；驚いた後，その結果に失望したら，驚きも disappointment に含める）のように認知している可能性を示唆している。本研究でも，言語呈示課題で4歳女児が「びっくりする？地震の時使うよね。地震の時泣いちゃうから，これ」と悲しみの表情を指差した例があった。「驚き」の情動語は4歳においても獲得途中であることを示す例といえる。

感情音声を研究している Scherer (1986) は「怒り」を質の違いによって hot anger（激怒）と cold anger（イライラ）という異なるカテゴリーに分類している。音声に質の違いがあるように表情にも質の違いがあることが予測される。表情呈示課題で「怒り」の成績が言語呈示課題に比べて良好でなかったのは，言語では「怒り」として分類される表情も，表情呈示課題のように表情どうしを対応させる場合，表情による感情の質の違いが影響した可能性も考えられる。

今回の結果は，ある情動を示す表情を選択する場合，2歳児でも情動語を与えられた場合の方が，表情図を与えられた場合より成績が良いこと，表情図を与えられた場合必ずしも情動判断の決め手になっていない口形などの共通性に左右されて成績が悪くなること，両課題の成績は交差することなく接近しながら上昇していくこと，を示している。このことは，表情呈示，言語呈示，いずれの課題でも情動のカテゴリー化が重要な要素過程となっており，情動語を呈示された場合の方が表情図を呈示された場合より，より安定したカテゴリー化ができること，表情から情動をカテゴリー化することが2歳児では3, 4歳児より難しいこと，その困難さには情動に応じた違いがあること，を示唆している。情動語理解と表情認知のどちらが先に始まるかという Camras, & Allison (1985) の問題設定に関して言えば，本研究の結果は，表情から口形など余分な情報に惑わされずに情動をカテゴリー化できるようになるためには情動語理解の並行的な発達が前提となることを示唆するものだと考えることが可能である。

結　論

ある情動を表す表情あるいは単語を呈示して，その情動に対応する表情を選択させる2つの課題を2～4歳児に行い，対数線型モデルによって解析した。その結果，正答率は両課題とも加齢とともに有意に上昇したものの，年齢によらず一貫して言語呈示課題の方が高かった。表情呈示課題では口など特定部分の形状が刺激と選択肢間で共通かどうかに影響された。年齢や課題，選択肢表情図による正答率の変化は情動に依存して違っていた。これらの結果は，2～4歳の間に情動認知が急速に発達すること，情動語の理解が早期から始まること，それぞれの情動に固有の発達過程があることを示唆する。この発達段階においては，口形の共通性など必ずしも情動に直結しない特徴に左右されるために，情動をカテゴリー的に処理することが言語呈示課題より表情呈示課題でより未熟であることが明らかになった。

文　献

Borke, H. (1973). The development of empathy in Chinese and American children between three and six years of age: A cross-culture study. *Developmental Psychology*, **9**, 102-108.

Camras, L., & Allison, K. (1985). Children's under-

standing of emotional facial expressions and verbal labels. *Journal of Nonverbal Behavior,* **9**, 84-94.

Caron, R., Caron, A.,& Meyers, R. (1982). Abstraction of invariant face expressions in infancy. *Child Development,* **53**, 1008-1015.

Dodge, K. A., & Garber, J. (1991). Domains of emotion regulation. In J. Garber, & K. A. Dodge(Eds.), *The development of emotion regulation and dysregulation* (pp. 3-11). Cambridge: Cambridge University Press.

Field, T. M., Woodson, R. W., Greenberg,R., & Cohen, C. (1982). Discrimination and imitation of facial expressions by neonates. *Science,* **218**, 179-181.

Field, T. M., Woodson, R. W., Cohen, D., Greenberg, R., Garcia, R., & Collins,K. (1983). Discrimination and imitation of facial expressions by term and preterm neonates. *Infant Behavior and Development,* **6**, 485-489.

Frijda, N. H. (1986). *The emotions.* Cambridge: Cambridge University Press.

藤永　保（監修）. (1991). *ディズニーベビー知育えほん「にこにこあはは」*. 東京：講談社.

Glitter, A. G., Mostofsky, D. I., & Quincy,Jr., A.J. (1971). Race and sex differences in the child's perception of emotion. *Child Development,* **42**, 2071-2075.

針塚　進. (1977). 表情図分類行動における精神分裂病者の認知. *心理学研究*, **48**(4), 231-238.

Harrigan, J. (1984). The effects of task order on children's identification of facial expressions. *Motivation and Emotion,* **8**, 157-169.

Hebb, D. O. (1975). *行動学入門*(白井　常他,訳). 東京: 紀伊国屋書店. (Hebb, D.O. (1972). *Textbook of psychology* (3rd ed.). Philadelphia: W. B. Saunders Company.)

星野喜久三. (1969). 表情の感情的意味理解に関する発達的研究. *教育心理学研究*, **17**, 90-101.

今井靖親. (1978). 表情図による情緒認知の発達的研究. *教育心理学研究*, **26**(2), 129-132.

Izard, C. E. (1971). *The face of emotion.* New York: Appleton-Century-Crofts

北山　忍. (1998). *自己と感情*. 東京：共立出版.

LaBarbera, J. D., Izard C. E., Vietze, P., & Parisi, S. A. (1976). Four-and six-month-old infants' visual responses to joy, anger , and neutral expressions. *Child Development,* **47**, 535-538.

MacDonald, P. M., Kirkpatrick, S. W., & Sullivan, L. A. (1996). Schematic drawings of facial expressions for emotion recognition and interpretation by preschool-aged children. *Genetic Social and General Psychology Monographs,* **122**(4), 373-388.

Markham, R., & Adams, K. (1992). The effect of type of task on children's identification of facial expressions. *Journal of Nonverbal Behavior,* **16**(1), 21-39.

Michalson, L., & Lewis, M. (1985). What do children know about emotions and when do they know it ? In M. Lewis, & C. Saari (Eds.), *The socialization of emotions* (pp.117-139). New York: Plenum.

Nelson, C. A., Morse, P. A., & Leavitt, L. A. (1979). Recognition of facial expressions by seven-month -old infants. *Child Development,* **50**, 1239-1242.

Patterson, K. E., & Baddeley, A. D. (1977). When face recognition fails. *Jounal of Experimental Psychology, Human Leaning and Memory,* **3**, 406-417.

Proffitt, D. R., & Bertenthal, B. I. (1990). Converging operations revisited: Assessing what infants perceive using discrimination measures. *Perception. and Psychophysics,* **47**, 1-11.

SAS/STAT User's Guide. (1999). SAS Institute. **6.17**.

Scherer, K. R. (1986). Vocal affect expression: Review and a model for future research. *Psychological Bulletin,* **99**(2), 143-165.

Serrano, J. M., Iglesias, J., & Loeches, A. (1992). Visual discrimination and recognition of facial expressions of anger, fear,and surprise in 4-to 6-month -old infants. *Developmental Psychobiology,* **25**(6), 411-425.

Sorce, J. F., Emde, R. N., Campos, J., & Klinnert, M. D. (1985). Maternal emotional signaling: Its effect on the visual cliff behavior of 1-year-olds. *Developmental Psychology,* **21**(1), 195-200.

Tomkins, S. (1962). *The positvie affects: Vol.1 Affect, imagery, and consciousness.* New York: Springer.

Walden, T. A., & Field, T. M. (1982). Discrimination of facial expressions by preschool children. *Child Development,* **53**, 1312-1319.

Walker-Andrews, A. S. (1997). Infants' perception of expressive behaviors: Differentiation of multimodal information. *Psychological Bulletin,* **121**, 437-456.

付記

本研究は1998年度に上智大学大学院言語学研究科の修士論文として提出したものに，加筆修正を加えたものである。本論文作成にあたり，上智大学の飯高京子先生，道又爾先生，荻野美佐子先生，中央大学の鎌倉稔成先生，老人総合研究所の伏見貴夫先生，下川昭夫先生，常盤大

学の西澤弘行先生に数々の有益な御助言をいただきましたこと，深く感謝いたします。実際の調査に際して，快くご協力いただきました保育園・幼稚園の先生方，保護者の皆様，園児の皆様方に心からお礼申し上げます。

Sakuraba, Kyoko (Graduate School of Human Infomatics, Nagoya University) & Imaizumi, Satoshi (Graduate School of Medicine, University of Tokyo). *Affect Label Comprehension and Facial Expression Interpretation in 2-to 4-Year Olds: A Developmental Study.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol. 12, No.1, 36-45.

Two affective tasks were performed by 2-, 3- and 4-year olds (N = 134) to measure their ability to understand labels of emotions and to discriminate facial expressions. On a label-to-face matching task, children were given an emotion label and asked to select the one of 4 pictures (representing happiness, sadness, anger and surprise) corresponding to the emotion label. On the face-to-face matching task, children were given a photograph of a baby and asked to select one picture matching the emotion of the baby. Although the percentages of correct matching increased with age on both tasks, performance by all age groups on the label-to-face matching task was significantly better than on the face-to-face matching task. For the face-to-face matching task, children tended to select a picture with a mouth shape and other features similar to that in the presented photograph, regardless of the emotion, and this resulted in a lower matching rate. Label-to-face matching was easier than face-to-face matching even for 2-year olds, suggesting that a cognitive connection between emotional labels and facial expressions had emerged by age 2.

【Key Words】 Preschoolers, Emotional recognition, Facial expression, Emotional label, Affective development

1999.6.23 受稿，2001.1.19 受理

発達心理学研究
2001，第12巻，第1号，46-57

原　著

成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して

北村　琴美　（お茶の水女子大学人間文化研究科）
無藤　隆　（お茶の水女子大学生活科学部）

本研究では，母娘関係が成人の娘の適応状態を規定する度合いを検証するとともに，娘の結婚や出産といったライフイベントによって母娘関係がどのような発達的移行を経るのかを探索的に調べるために，成人女性415名を対象とした横断的データに基づいて，独身女性，既婚で子どもがいない女性，既婚で子どもがいる女性間での比較検討を行った。その結果，母親との親密性は独身の娘の心理的適応と関連していると同時に，既婚で無職の娘の心理的適応に対してもある程度の効果を持つという結果が得られた。一方，母親への過剰な依存・接触は，職業の有無に関わらず，既婚で子どもがいない女性の心理的適応と負の関連を示していた。また，ライフイベントによる成人期の母娘関係の発達的移行に関しては，独身あるいは有職の娘と比較して，既婚で無職の娘は，母親との親密性が高く，サポートを求める気持ちが強いことが見出された。

【キー・ワード】母娘関係，成人期，心理的適応，ライフイベント

問　題

ライフサイクル全体を展望した心の発達は，近年，様々な領域から注目されるようになっている。しかしながら，女性の発達に関する研究は驚くほど少ない。発達心理学の中で，女性の発達は理論的にも実証的にも見過ごされてきた歴史がある（岡本，1999）。例えば，エリクソンのアイデンティティ概念は，男性のライフサイクルを念頭において理論化されたものであるし，コールバーグの道徳性の発達もまた同様である。このような状況の中で，男性とは異なる女性の発達的特質が指摘され，従来の理論や研究に対する見直しが行われてきた（高橋・柏木，1995; 岡本，1999）。女性の視点からの研究（e.g., Josselson, 1996）は，女性の発達においては他者との関係性が重要であることを研究者たちに強く認識させた。特に，女性の場合は，親との結びつきが幼少期はもちろんのこと青年期以降においても維持され，アイデンティティ発達や自立過程において，その関係のあり方が様々に影響を及ぼすことが分かっている。例えば，福島（1992）は，思春期から成人に至るまでの心理的自立の研究を行っているが，それによると，特に女子は，親との信頼関係を軸として自己の確立に至る傾向があるという。また，親との信頼関係の確立が大学生以降に急激に高まることが見出され，青年期にとどまらず，成人期においても依然として親子関係の質が重要な意味を持ち続ける可能性が示唆されている。青年期以降のアイデンティティ・ステイタスの変化プロセスを検討しているJosselson（1996）によれば，女性の場合は，青年期以降も，母親との強い結びつきを維持しており，常に母親の視点との対比で自己の視点を捉え，相互調整を続けるという。

ところで，一般に，成人期は結婚や親になることなどの大きなライフイベントに出会い，自ずと自己概念や重要な他者との関係の再編を迫られる重要な移行期であると言われている（Brooks-Gunn, & Zahaykevich, 1989; Cowan, 1991; Deutsch, Brooks-Gunn, Fleming, Ruble, & Stangor, 1988）。親との関係もその例外ではなかろう。成人は，多くの場合，それまでの親との関係（子の親に対する一方向的依存）を見直し，より互恵的な関係性を構築していかなくてはならない（落合・佐藤，1996）。殊に女性は成人期から中・高年期までに結婚・妊娠・育児・子離れといった出来事によって，様々な意味での自己の再構築を求められることになるが，この女性の自己形成において特に重要となってくるのが「関係性」の再体制化であるという（福島，1993）。

少数の研究によってではあるが，実際，成人の娘とその母親との関係が，年齢を重ねるにつれ，いくつかの重要な発達的移行を経ることが確認されている。例えば，Fischer（1981）は，娘の結婚や出産に着目し，母娘関係の移行について検討している。具体的には，母娘関係の特徴を2つの領域（妻役割，母役割という点での母娘のお互いの評価，接触や援助パターン）から捉え，娘の結婚や出産により両領域において母娘関係の再調整が生じること，すなわち，お互いに対する評価が高まり，接触や相互の援助が増し，より親密な関係になることを見出している（特に出産の重要性が高いという）。このように成人期におけるライフイベント，特に親になることによって，

自身の親との関係に相応の変化が生じることを認めた研究は他にも存在する (e.g., Cowan, Cowan, Heming, & Miller, 1991)。

しかしながら，これらの知見に異議を唱える研究者もある。例えば，Barnett, Kibria, Baruch, & Pleck (1991) は，先の Fischer (1981) の研究に反して，娘の婚姻の有無，子どもの有無により母娘関係の質に相違は見られないという結果を得ている。もっとも，Barnett et al. (1991) は，自分たちの研究結果を Fischer (1981) の結果に反するものとして議論を進めているが，両者の結果を単純に比較して考えることには疑問が持たれる。Barnett et al. (1991) は，母娘関係の報酬に関する側面と損失に関する側面を取り上げ，母親との関係において報酬があると感じるか，あるいは損失があると感じるかといった心理的状態によって母娘関係の質を測定している。一方，先述した通り，Fischer (1981) は，妻役割，母役割という点での母娘のお互いの評価と接触や援助パターンを問題としており，明らかに2つの研究間で焦点を当てている関係性の側面に相違が見られる。また，調査対象者の年齢にもかなりの違いがある。Fischer (1981) の研究では，21歳～31歳の女性が対象となっているのに対し，Barnett et al. (1991) の研究対象者は，下は25歳から上は55歳にまで及んでいる。このように2つの研究の間には無視できない方法論上の食い違いがあるため，娘の結婚や出産によって，母親と娘の関係性に変化が生じるのかどうか，生じるとすればどのような側面にいかなる形で変化が起きるのかといったことについては，現時点において明確な結論を下すことができない。変化が想定される関係性の複数の側面について同時にデータをとるなど，新たな研究計画の下，さらなる検討が必要であると考えられる。

上で見たように，成人期の母娘関係の発達的移行そのものの性質を問題にした研究がある一方で，そうした母娘関係の質が，娘あるいは母親の適応状態にどのような影響をもたらすのかについて検討した研究も少なからず存在する。それらによれば，多くの場合，母親と娘のポジティブな関係 (親密性) が母娘双方の適応状態の良さと関連しており，母娘関係がお互いの適応状態にとって重要であることが示唆されている (e.g., Umberson, 1989, 1992)。これに関連して挙げておくならば，娘の婚姻の有無や子どもの有無を考慮し，母娘関係の質と娘の適応状態との関連を検討した Barnett et al. (1991) は，母親との関係の質によって適応状態が最も影響されやすいのは独身女性または既婚で子どものいない女性であるのに対し，最も影響を受けにくいのは有職の既婚女性であることを見出し，娘が従事する (就業者，妻，母親などの) 役割の数が多いほど，母親との関係の質が娘の全体的な心理的健康に及ぼす影響が減少するという先行研究の知見 (Baruch, & Barnett, 1983) を支持している。しかし，その一方で，母親との関係性が，既婚女性，特に自身が母親となった成人の娘に及ぼす影響が少なくないことを示唆する証拠もいくつか見られる。例えば，Abernethy (1973) は，自分自身の母親との接触頻度が，初めて母親となった女性の有能感と関連していることを報告している。

これに関連づけて日本の状況を振り返ると，妊娠中の不安についての相談，育児に対する協力，育児に関する相談において，実の母親は夫と同等かそれ以上に頼りにされ，産後の退院先も実家であることが頻繁に見られる (佐藤，1994) ことなどから，欧米の研究で確認されている以上に，既婚女性，特に自らが母親である女性において，実の母親との関係性が際だって重要であることが推測される。実際，伊藤・北島 (1980) は，子どもがいる既婚女性にとって，母親は夫に次いで心の支えとしての機能を果たすことを見出している。このようなことから，日本において，母親との関係の質が成人の娘の適応状態にいかなる影響を及ぼすのか，その影響のあり方が娘の結婚や出産により変化するのかどうかといったことについて精細な検討を試みることはきわめて興味深いことと言えるのではないだろうか。また，母親との関係以外の成人女性を取り巻く重要な他者との関係や環境（夫や子どもとの関係，友人との関係，仕事など）から得られるサポートや満足感，あるいは，そこから生じるストレスが女性の適応状態に少なからず影響を与えていること (青木・松井・岩男，1986; 野村・吉森，1994; 尾形・宮下，1998; 佐藤・菅原・戸田・島・北村，1994; 詫摩・菅原・小泉・菅原・八木下，1998) を考えるならば，当然，それらの要因と比較して，母親との関係性が娘の適応状態にどの程度の影響力を有するのかという点についても検討する必要があると言えよう。

以上概観してきたように，成人期以降の母娘関係がどのような発達的移行を経るのか，あるいはまた，その質が個人の適応状態にどれだけどのような形で影響を及ぼすのかについては，未だ必ずしも十分に見解の一致が認められていないというのが現状である。また，文化によって，女性の社会的立場，家族間の関係のあり方が大きく食い違うことも想定され，その意味で，欧米で報告された見解をそのまま日本の文化的土壌に一般化して考えることはできないだろう。そこで，本研究では，先述した Fisher (1981) や Barnett et al. (1983, 1991) 等の研究の枠組みを意識しながら，日本の母娘関係を対象に調査研究を行っていく。

本研究における課題を検証するため，以下の要因・変数を設定した。母娘関係については，3つの領域から測定し，その内容は，アタッチメントと自立プロセスに関連する母親との親密的・依存的関係，娘から認識する母親との間での情緒的・道具的サポートの期待度と現状，母親との接触頻度により検証される具体的相互作用の内容

とその頻度，である。また，娘の心理的な幸福感と不安や抑うつ的な傾向とでは，母娘関係との関連の仕方が異なるという先行研究の結果(Barnett et al., 1991)を踏まえ，娘の適応状態は抑うつ傾向と生活満足度の程度から検討する。さらに，娘の生活実態から心理状態に関係すると想定される変数として，職業満足感，夫婦関係満足感，育児への肯定感，家族以外からのサポートを設定した。

この研究の第1の目的は，母娘関係が娘の適応状態を規定する度合いを検証することである。具体的には，母親との間での情緒的関係が良好である場合，母親から十分なサポートを受け取っている場合は，娘の適応状態が良好であることが予測される。その際，娘の婚姻状態と生活実態に関する要因については，探索的な検討を試みる。第2の目的は，娘の結婚や出産といったライフイベントによって成人期以降の母娘関係がどのような発達的移行を経るのかを，独身女性，既婚で子どもがいない女性，既婚で子どもがいる女性間での比較を通して，探索的に調べることである。

方　　法

調査対象・実施方法　調査対象者は，東京にある2つの4年制女子大学の卒業生415名とその母親231名。同窓会名簿により，昭和62年度から平成3年度までの卒業生の中からランダムにサンプリングし，郵送法による調査を実施した。まず，往復はがきにより本人及びその母親に調査協力を依頼した[1)](娘のみ有効回収率26.1%)。その後，返送されたはがきに基づき，質問紙を郵送した(娘のみ有効回収率96.3%)。調査対象者は，あらかじめ調査内容を了解して調査に応じていることから，相対的に母娘の関係が良好である可能性が高いことが推測される。調査は，1996年9月から11月にかけて実施された。なお，今回の報告では，娘から得られた回答のみを用い，分析を行うことにする。

調査対象者の属性　娘の年齢は27歳から34歳までに分布しており，平均年齢は29.8歳であった。またその内訳は，独身者116名(平均年齢29.2歳)，既婚で子どもがいない者121名(平均年齢29.6歳)，既婚で子どもがいる者178名(平均年齢30.4歳：末子の平均年齢1歳4ヶ月)であった。就業状態に関しては，独身者では，6名を除いた全ての者が職業を有していた。既婚で子どもがいない者の33.9%，既婚で子どもがいる者の71.8%は「専業主婦」であり，残りは何らかの形で職業を持っていた。独身者では，66.1%が親と同居していた。既婚者に関して，母親と娘の居住距離は，子どもの有無に関わらず，「車や電車で1～2時間のところ」「車や電車で日帰りするには困難なところ」という回答が，ほぼ同様の割合で，あわせて70%以上を占めていた。実の母親と同居している既婚の娘は4名のみであった。母親の現在の健康状態は，「非常に健康」「健康だが無理はきかない」があわせて90%以上を占め，大半のケースで母親の身体状態に問題のないことがうかがえた。

質問紙の内容　娘に対する質問は，母親との関係に関するもの，適応状態に関するもの，娘の生活実態に関するもの，フェイスシート等からなる。今回の分析で用いた質問項目を以下に示す。①母親との関係に関するもの。(a)現在の母親との親密的・依存的関係：アダルト・アタッチメント及び青年期から成人期にかけての自立に関する先行研究(West, & Sheldon-Keller, 1995; 久保田，1993; 福島，1992; 落合・佐藤，1996)の尺度項目を基に，選択または修正を加え，33項目からなる質問項目を作成した。なお，その際，West, & Sheldon-Keller (1995)の記述を参考に，“情緒的支援”“親密さ・接触に対する過剰な願望”“親密さの回避”の各領域を測定する3つの下位尺度を想定し，それぞれの項目がその3つのいずれかに対応するよう配慮した。(b)母親に対するサポート期待度・現状：母親からのサポートを期待する程度及び娘から認識する母親との間でのサポートの現状を測定するために，ソーシャルサポートに関する先行研究(嶋，1991; 和田，1989, 1992)の尺度項目を基に質問項目を作成した(各10項目)。サポート内容には，心理的なサポート，道具的・手段的なサポートの両方が含まれている。(c)母親との接触頻度：母親と同居の場合には，母親と一緒に夕飯を食べる頻度，一緒にテレビを見たり話をしたりする頻度，一緒に外出をする頻度について，別居の場合には，電話の回数，お互いの家を訪ねる頻度，一緒に外出する頻度について評定を求めた。②適応状態に関するもの。(a)抑うつ傾向：Zungの尺度に準じ，南・稲葉・浦(1988)が使用した抑うつ傾向を測定する尺度項目を基に13項目からなる質問項目を作成した。(b)生活満足感：内田(1990)が作成した生活感情尺度の下位尺度のうち，現実目標の領域に関する質問項目から7項目を選択し，さらに5項目を新たに作成し，計12項目を生活満足感を測定する項目とした。③娘の生活実態に関するもの。(a)妻役割に対する感情や態度：夫との関係における満足感を測定することを目的とし，Barnett, & Baruchの尺度を土肥・広沢・田中(1990)が邦訳し，かつ新たな項目を加えて作成した妻役割達成感の尺度項目を基に7項目からなる質問項目を作成した。(b)母役割に対する感情や態度：育児についての意識や母親であることに対する気持ちを測定するために，小野(1994)，柏木(1995)，Ruble, Brooks-Gunn, Fleming Fitzmaurice, Stangor, & Deutsch (1990)，中西(1991)の尺度項目を基に19項目からなる質問項目を作

1) 娘本人と母親が同居していない場合には，娘を通して母親の調査協力の意思を確認した。本人の住所・氏名，可能であるならば，母親の住所・氏名が記入されたはがきを回収した。

Table 1　*現在の母親との親密的・依存的関係に関する項目についての因子分析結果*

項　　目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	共通性
19. 自然に母親と温かい関係を保つことができる。	.85	.10	.73
*10. 母親との間には崩しがたい壁がある。	−.74	.03	.55
*33. 母親をうっとうしく感じる。	−.74	.04	.55
*28. 母親は私の期待を裏切ることが多い。	−.72	−.04	.52
* 3. 母親に対して，穏やかな感情を持って接することができずに，ついイライラしてしまう。	−.70	.09	.50
1. 母親は私の感情を理解しようとしてくれていると思う。	.67	.15	.47
*31. 理由もなく，母親に対して怒りを感じることがある。	−.66	.10	.45
4. 非常に困ったときには，母親が話を聞いてくれると思う。	.65	.20	.46
5. 母親は私のことを信頼してくれていると思う。	.62	.04	.39
7. 母親は干渉しないが，いつも私のことを気にかけてくれる。	.58	.06	.34
*20. 母親は私に関心を示さない。	−.46	−.11	.22
*24. 母親に頼られたくない。	−.43	−.22	.23
*27. 母親がもっと自分のために時間を割いてくれても良いはずだと，母親に対して怒りを感じる。	−.39	.16	.18
23. 母親がいないと，私は何もできないだろう。	.00	.66	.44
17. 母親に相談しないと自分のすべきことに自信を持てない。	.06	.60	.40
13. 自分の思い通りに，母親が自分のそばにいてくれないとイライラする。	−.12	.57	.34
22. 母親に反対されると自信がなくなる。	.07	.53	.29
*18. 母親のことをあれこれ心配しすぎることはない。	.01	−.53	.28
9. 母親に守られていた子どもの頃に，もう一度戻ることができたらと思う。	.13	.52	.29
15. あれこれと母親の世話をせずにはいられない。	.01	.52	.27
11. 母親が問題を抱えていることを知ると，自分の仕事に手がつかなくなる。	.14	.51	.28
2. 母親にあまりにも頼りすぎていると思う。	.18	.50	.28
8. 私は自分のことよりも母親のことを優先する。	.19	.44	.23
32. 母親のために何かしてあげることが，私にとって非常に重要なことである。	.26	.43	.27
21. 母親から慰めを得られないと(母親が相談相手として頼りにならないと)腹を立てることがある。	−.31	.39	.25
*26. 母親のために自分のことを犠牲にすることはない。	−.22	−.38	.19
二乗和	5.75	3.57	
寄与率（%）	22.10	13.74	

注．項目 No. は原質問紙のもの。
　＊逆転項目

成した。(c) 就業者役割に対する感情や態度：仕事に対する意欲や満足感を測定するために，三隅・篠原・杉万 (1976) による勤労意欲の測定のための尺度項目を基に 9 項目からなる質問項目を作成した。(d) 家族以外のサポートネットワークサイズ：家族以外の人々からのサポートを測定するために，Cohen et al. の尺度を稲葉・高橋・小林・浦・高根・南 (1986) が修正，変更した尺度項目から 6 項目を選択した。この尺度は，実際に得られたものとしてのサポートではなく，認知されたところの入手可能性を測定するものである。独身者には，そのうちの 4 項目について，既婚者には 6 項目全てについて回答を求めた。さらに，子どもの世話に関するサポートを測定するために，新たに 2 項目を加え，子どもがいる対象者には，計 8 項目について回答を求めた。④フェイスシート。娘及び母親の年齢，職業，家族構成などを尋ねた。

なお，回答の仕方は，全て 5 ないし 4 件法である[2)]。

結　　果

1. 基礎的統計

まず，本研究で作成した各尺度に関する基礎的データを報告する。母親との関係に関する尺度では，「現在の母親との親密的・依存的関係」項目について，娘から得られた全データに基づいて，主因子法による因子分析の後バリマックス回転を行い，固有値と解釈可能性を考慮して 2 因子を抽出した。その結果として共通性が極端に低い 1 項目を除き，再び因子分析を行った。バリマックス回転後，因子負荷量が .35 に達しない項目と .35 以上の因子負荷量が両因子に現れる項目 6 項目を削除して，最終

2) 「ほとんどない」から「ほぼ毎日」の 5 件法(① (c))，「ぜんぜんない」から「いつでもそうだ」の 5 件法(② (a))，「まったくいない」から「何人もいる」の 4 件法(③ (d))，残りの質問に対しては，「ほとんど当てはまらない」から「よく当てはまる」の 5 件法を用いた。

Table 2 *各尺度の信頼性係数（Cronbach's α）*

母娘関係に関する尺度	
母親との親密性（13項目）	.90
母親への過剰な依存・接触（13項目）	.80
サポート期待（10項目）	.89
サポート現状（10項目）	.88
母親と娘の接触頻度	
同居（3項目）	.71
別居（4項目）	.71
適応状態に関する尺度	
抑うつ傾向（13項目）	.83
生活満足感（12項目）	.89
生活実態に関する尺度	
職務満足感（9項目）	.86
夫婦関係満足感（7項目）	.91
育児への肯定感（16項目）	.88
家族以外からのサポート（4項目）	.80
（6項目）	.82
（8項目）	.85

的に26項目を採用した。各因子における項目ごとの因子負荷量は，Table 1のようになっている。第Ⅰ因子は，母親と安定した，親密な関係にあるかどうかに関連する因子であると解釈し，〈母親との親密性〉因子とした。第Ⅰ因子に見られる項目は，最初に想定した“情緒的支援”“親密さの回避”の各領域の項目にほぼ該当している。第Ⅱ因子に見られる項目は，最初に想定した“親密さ・接触に対する過剰な願望”の項目にほぼ該当しており，〈母親への過剰な依存・接触〉因子とした。母娘関係に関するそのほかの尺度，すなわち，〈サポート期待〉〈サポート現状〉〈接触頻度〉については，固有値の減衰状況（スクリープロット・テスト）から1因子構造をなしていると判断した[3]。

各因子に負荷量の高い項目を選択し，それらの評定値を加算することによって，各因子の内容を反映する合成得点を作り上げた。〈母親との親密性〉得点の高さは母親との関係が親密的であることを，〈母親への過剰な依存・接触〉得点の高さは母親との関係が依存的であることを，〈サポート期待〉得点の高さは母親へのサポート期待度が高いことを，〈サポート現状〉得点の高さは母親からのサポートが高いことを，〈接触頻度〉得点の高さは母親との接触頻度が高いことを表す。

次に，適応状態に関する尺度と生活実態に関する尺度についてのデータを報告する。「生活満足感」「抑うつ傾向」「妻役割に対する感情や態度」「母役割に対する感情や態度」「就業者役割に対する感情や態度」「家族以外のサポートネットワークサイズ」項目の各々について，娘から得られた全データに基づいて因子分析を行い，固有値の減衰状況（スクリープロット・テスト）から1因子構造をなしていると判断した[4]。各々の変数名は，〈生活満足感〉〈抑うつ傾向〉〈夫婦関係満足感〉〈育児への肯定感〉

Table 3 *母娘関係に関する尺度間の相互相関*

	①	②	③	④	⑤	⑥
①親密性		.17***	.56***	.64***	.05	.24***
②過剰な依存・接触			.54***	.45***	.26*	.35***
③サポート期待				.78***	.46***	.33***
④サポート現状					.38***	.50***
⑤接触頻度（同居）						–
⑥接触頻度（別居）						

注．$N = 415$。接触頻度（同居）は $N = 81$，（別居）は $N = 334$。
$^{*}p < .05$，$^{***}p < .001$

〈職務満足感〉〈家族以外からのサポート〉とした。

各因子に負荷量の高い項目を選択し，それらの評定値を加算することによって，各因子の内容を反映する合成得点を作り上げた。〈生活満足感〉得点の高さは生活満足感が高いことを，〈抑うつ傾向〉得点の高さは抑うつ傾向が高いことを，〈夫婦関係満足感〉得点の高さは夫との関係における満足感が高いことを，〈育児への肯定感〉得点の高さは育児に対する感情や態度が肯定的であることを，〈職務満足感〉得点の高さは仕事に対する意欲や満足感が高いことを，〈家族以外からのサポート〉得点の高さは家族以外のサポートの入手可能性が高いことを示す。

各尺度の信頼性係数（standardized Cronbach's α）はTable 2に示す通りである。全体的に高いα係数が得られており，内的整合性は高いと考えられる。

母娘関係に関する各尺度間の相関をTable 3に示す。〈母親との親密性〉と〈母親への過剰な依存・接触〉との間の相関は有意ではあったが，非常に弱い関連であった。〈サポート期待〉と〈サポート現状〉との間には強い正の相関が見られた。また，〈サポート期待〉〈サポート現状〉は〈母親との親密性〉〈母親への過剰な依存・接触〉のどちらとも比較的強い正の相関を持っていた。ただし，〈母親との親密性〉は〈サポート現状〉と，〈母親への過剰な依存・接触〉は〈サポート期待〉とより強い相関を示した。〈接触頻度〉に関しては，同居の場合の〈接触頻度〉と〈母親との親密性〉との間に関連が見られなかった他は全て有意な正の相関が認められた。なお，娘の婚姻状態，子どもの有無により分類した群別（独身/既婚・子無/

3) 1因子構造をなしていると判断された母娘関係に関する尺度の1因子での説明率は，〈サポート期待〉が47.80%，〈サポート現状〉が44.49%，同居の場合の〈接触頻度〉が45.02%，別居の場合の〈接触頻度〉が37.22%である。

4) 適応状態に関する尺度と娘の生活実態に関する尺度の1因子での説明率は，〈生活満足感〉が43.96%，〈抑うつ傾向〉が30.09%，〈夫婦関係満足感〉が58.69%，〈育児への肯定感〉が30.34%，〈職務満足感〉が46.25%，〈家族以外からのサポート〉が49.09%，45.66%，43.06%（対象者の属性にあわせて3種類の尺度が構成された）である。

既婚・子有）の分析によっても，ほぼ同様の結果が得られた。

2. 娘の適応状態と母娘関係

(1) 適応状態に関する尺度と母娘関係に関する尺度との関連　娘の適応状態と母娘関係との関連を調べるため，ピアソンの単相関係数を求めた（Table 4）。娘の婚姻状態に関する要因について検討する目的から，娘の結婚，出産というライフイベントに着目し，対象者を3群（独身/既婚・子無/既婚・子有）に分け，それぞれの群ごとに分析を行った[5]。以下，各群について，独身群，結婚群，出産群と呼ぶことにする。独身群においては，〈母親との親密性〉〈サポート現状〉が〈抑うつ傾向〉とは負の，〈生活満足感〉とは正の有意な相関関係にあり，母親との関係が親密であったり，母親からサポートを多く受け取っていると感じていると，抑うつ傾向が低く，生活満足感が高いことが示唆された。一方，結婚群においては，これらの間には何ら有意な相関関係は認められず，〈母親への過剰な依存・接触〉が〈抑うつ傾向〉とは正に，〈生活満足感〉とは負に有意に関連していた。すなわち，母親に対して依存しすぎたり，母親のことを気にかけすぎたりする方が，抑うつ傾向が高く，生活満足感が低いということである。出産群においては，〈母親との親密性〉が〈抑うつ傾向〉とは負に，〈生活満足感〉とは正に，弱いが有意な関連を示した。娘の適応状態と母娘関係との関連を調べる上で，娘の婚姻状態と同様に娘の職業の有無が無視できない要因であることが先行研究から分かっている（Barnett et al., 1991）。そこで，次に，結婚群，出産群において，有職者と無職者ごとに相関を見ると，結婚群においては，無職群においてのみ〈母親との親密性〉と〈抑うつ傾向〉との間に有意な負の相関が見出された。出産群においては，有職者と無職者との間にそれほど大きく異なった結果は見られなかった。ところで，母娘関係に関する尺度のうち，〈接触頻度〉は独身，既婚いずれの女性の適応状態にも関連を示さず，Mancini, & Blieszner (1989) の，単なる接触頻度と主観的幸福感との間に連関を見出している研究はほとんど見られないという報告を支持している。

(2) 適応状態を規定する要因の探索　母娘関係以外の要因，すなわち，夫婦関係，母親役割等に関わる諸要因をコントロールした上で，母娘関係[6]が娘の適応状態に有意な説明力を有しているかどうかを検討するために，〈抑うつ傾向〉〈生活満足感〉を基準変数とする階層的重回帰分析を行った。基準変数及び説明変数の各変数間の相互相関は Table 5 の通りである。説明変数間の相互相関は比較的弱いものであると言える[7]。2つの基準変数，〈抑うつ傾向〉と〈生活満足感〉は有意な負の相関関係にある。

分析は，婚姻の有無，子どもの有無，職業の有無の組み合わせによって分類された5群（独身群有職，結婚群有職，結婚群無職，出産群有職，出産群無職）ごとに別々

5) 各群において，母親の平均年齢，母親の就業割合，娘の出生順位に関して大きな違いは見られなかった。

6) 母娘関係に関する尺度間で比較的強い関連が見られたため（Table 3），適応状態との関連がより多く見出された〈母親との親密性〉〈母親への過剰な依存・接触〉の2つの変数を母娘関係に関する要因の代表として用いることにした。

7) 説明変数どうしで重回帰分析を行ったところ，その決定係数の値が .01 ～ .34 と比較的低かったこと，また，許容度が著しく小さい説明変数がないことから，多重共線性の問題はないと判断した。

Table 4　*適応状態に関する尺度得点と母娘関係に関する尺度得点との間の相関係数*

			親密性	過剰な依存・接触	サポート期待	サポート現状	接触頻度（同居）	接触頻度（別居）
抑うつ傾向	独身群		−.44***	.12	−.15	−.37***	−.10	−.08
	結婚群		−.17	.43***	.03	−.03	/	.04
	出産群		−.27***	.12	−.06	−.07	/	−.05
	結婚群	有職	−.03	.48***	.17	−.08	/	.04
		無職	−.40*	.37*	−.07	−.14	/	.09
	出産群	有職	−.21	.20	−.07	−.08	/	.10
		無職	−.27**	.05	−.07	−.08	/	−.09
生活満足感	独身群		.42***	−.03	.29**	.44***	.03	.18
	結婚群		.06	−.35***	−.02	.01	/	.05
	出産群		.22**	−.11	−.01	.01	/	.06
	結婚群	有職	.06	−.35**	−.03	−.00	/	.04
		無職	.14	−.31*	−.02	.09	/	.08
	出産群	有職	.28	−.29	−.05	.00	/	.07
		無職	.20*	−.03	.02	.02	/	.06

注．Nは次の通り。独身群 116，結婚群 121（有職 78，無職 43），出産群 176（有職 47，無職 129）。
$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$

Table 5　*重回帰分析に用いた変数間の相互相関*

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧	
①母親との親密性				.14		.15		−		−		.24*		−.44***		.42***
②母親への過剰な依存・接触	.21*	.17*				−.15		−		−		.04		.12		−.03
③職務満足感	−.03	.07	−.35**	−.05				−		−		.23*		−.43***		.57***
④夫婦関係満足感	.10	.18*	−.12	−.10	.01	.16				−		−		−		−
⑤育児への肯定感	−	.21**	−	.02	−	.05	−	.11				−		−		−
⑥家族以外からのサポート	.12	−.01	−.27**	.02	.10	.03	.23*	.13	−	.27***				−.45***		.40***
⑦抑うつ傾向	−.17	−.27***	.43***	.12	−.45***	−.27	−.36***	−.42***	−	−.55***	−.29	−.28***				−.68***
⑧生活満足感	.06	.22	−.35***	−.11	.54***	.36*	.49***	.42***	−	.53***	.32***	.35***	−.75***	−.70***		

注．表の右上部は独身群（N=116），左下部の左側は結婚群（N=121;有職N=78），右側は出産群（N=176;有職N=47）。結婚群，出産群において有職者，無職者別に相関を見たところ，出産群の有職者において，〈夫婦関係満足感〉と〈母親への過剰な依存・接触〉〈家族以外からのサポート〉との間の相関が有意（r=.30程度）であったほかは，ほぼ同様の結果が得られた。
*p<.05，**p<.01，***p<.001

に行われた[8]。その結果(Table 6)，独身群では，〈抑うつ傾向〉に対しては〈母親との親密性〉が，〈生活満足感〉に対しては〈職務満足感〉が最も大きい説明力を有していた。結婚群では，有職者の場合，〈抑うつ傾向〉〈生活満足感〉いずれに対しても〈職務満足感〉が最も大きな説明力を有していた。無職者の場合は，〈抑うつ傾向〉〈生活満足感〉のどちらにとっても〈夫婦関係満足感〉の説明力が最も大きかった。有職者と異なる点として，〈母親との親密性〉が〈抑うつ傾向〉に対して有意な効果を持つという結果が得られた。出産群では，有職者の場合，〈抑うつ傾向〉〈生活満足感〉のいずれに対しても最も大きな説明力を有していたのは〈夫婦関係満足感〉であった。一方，無職者に関しては，〈育児への肯定感〉が〈抑うつ傾向〉〈生活満足感〉のいずれに対しても最も大きな説明力を有し，〈夫婦関係満足感〉がそれに次ぐ説明力を持つという結果が得られた。有職者と異なる点としては，〈家族以外からのサポート〉が〈生活満足感〉〈抑うつ傾向〉の両方に対して，〈母親との親密性〉が〈抑うつ傾向〉に対して相対的に弱い説明力ではあるが有意な効果を持っていた。

ここでの結果をまとめる。独身女性においては母親との関係や家族以外の者との関係が，既婚で子どもがいない女性においては夫との関係が，既婚で子どもがいる女性においては夫との関係及び子どもとの関係が適応状態を規定する重要な要因となることがうかがえた。それに加えて，有職者では，仕事に対する満足感も適応状態を規定する重要な要因となり得ることが示された。すなわち，成人女性の適応状態を規定する要因は，各々の女性を取り巻く重要な対人関係や環境を反映する形で，それぞれ(独身者－既婚者，子どもがいる者－いない者，有職者－無職者)で異なっていると言えるだろう。

母親との関係の質が娘の適応状態にいかなる関連を持

8) 娘の年齢と各種変数(母娘関係に関するもの，適応状態に関するもの)との間に有意な相関が見られないこと，また，年齢を独立変数に加えた重回帰分析や年齢を統制したグループ間の比較(共分散分析)によっても結果が変わらないことが確認されている。

Table 6　*重回帰分析の結果*

	抑うつ傾向					生活満足感				
	独身群	結婚群		出産群		独身群	結婚群		出産群	
	有職	有職	無職	有職	無職	有職	有職	無職	有職	無職
	(N=100)	(N=70)	(N=39)	(N=40)	(N=110)	(N=101)	(N=71)	(N=40)	(N=41)	(N=106)
家族以外からのサポート	−.32***	−.14	−.04	.04	−.20**	.24**	.19	.02	.13	.28***
職務満足感	−.27**	−.33**	−	−.15	−	.43***	.48***	−	.32**	−
夫婦関係満足感	−	−.24*	−.43**	−.55***	−.30***	−	.37***	.62***	.40**	.29***
育児への肯定感	−	−	−	−.43**	−.49***	−	−	−	.35**	.42***
母親との親密性	−.33***	−.06	−.39**	.09	−.17*	.31***	−.01	.14	.01	.11
母親への過剰な依存・接触	.16	.31**	.28*	.04	.06	−.05	−.11	−.23*	−.08	−.05
決定係数	.42	.40	.47	.58	.49	.47	.48	.50	.62	.45
自由度調整済決定係数	.40	.36	.41	.50	.47	.44	.44	.45	.56	.42
F値	17.20***	8.69***	7.57***	7.53***	20.35***	20.83***	12.05***	8.86***	9.42***	16.04***

注．表中の数値は標準偏回帰係数β。
*p<.05，**p<.01，***p<.001

つのかといった点から結果を検討してみると，〈母親との親密性〉は，独身の娘の適応状態と比較的強い関連があると同時に，既婚で無職の娘の適応状態に対してもある程度の関連を持っていること，〈母親への過剰な依存・接触〉は，既婚で子どもがいない女性の適応状態と負の関連があることが分かった。

3. 母娘関係と娘の婚姻の有無・子どもの有無・職業の有無との関連

(1) 娘の婚姻の有無・子どもの有無との関連　独身群，結婚群，出産群の各群において，母娘関係に関する尺度得点の平均値に違いが見られるかどうかを検討した(Table 7)。一要因の分散分析の結果，〈母親との親密性〉〈サポート期待〉において群の主効果が有意であった(親密性　$F(2, 399) = 4.50$, $p < .05$；サポート期待　$F(2, 407) = 9.46$, $p < .001$)。多重比較(Tukey 法)によると，〈母親との親密性〉〈サポート期待〉のいずれにおいても出産群の平均が独身群の平均よりも有意に大きかった。すなわち，出産群の方が独身群よりも母親との親密性が高く，母親へサポートを求める気持ちが強いことが示された[9]。また，〈接触頻度〉について，結婚群と出産群の2群により比較を行ったところ，出産群の平均が結婚群の平均よりも有意に大きく($F(1, 292) = 6.82$, $p < .01$)，出産群の方が結婚群よりも母親と頻繁に電話をしたり，お互いの家を行き来したりしていることが示唆された。これらの結果は，Fischer(1981)の，結婚や出産を機に母親とより親密な関係になるという知見の方向性にある程度沿うとともに日本での子育て状況を反映したものだと考えられる。

(2) 娘の職業の有無との関連　娘が既婚である場合，娘の職業の有無によって母親との関係のあり方が異なることも予想される。そこで，対象者を5群(独身・有職/既婚・無職・子無/既婚・有職・子無/既婚・無職・子有/既婚・有職・子有)に分類し，同様に分析を行ったところ，〈母親との親密性〉〈サポート期待〉において，群の主効果が有意であり(親密性　$F(4, 384) = 3.83$, $p < .01$；サポート期待　$F(4, 392) = 6.03$, $p < .001$)，多重比較(Tukey 法)の結果，出産群無職及び結婚群無職の娘の方が独身群有職の娘よりも，有意に母親との親密性が高く，母親にサポートを求める気持ちが強いという結果が得られた(Table7)。既婚女性の職業の有無が母親との関係のあり方に及ぼす効果をさらに検討するために，結婚群，出産群の各群において有職者と無職者による比較を行った。その結果，結婚群で〈母親との親密性〉〈サポート現状〉において無職者の平均が有職者の平均よりも有意に大きく(親密性　$F(1, 115) = 4.37$, $p < .05$；サポート現状　$F(1, 116) = 5.51$, $p < .05$)，無職の娘の方が有職の娘よりも，母親との親密性が高く，母親から受け取っているサポートが多いことが示された。出産群では，〈母親との親密性〉にお

9) 独身女性においては，親との同居の有無により，母親との関係のあり方が異なることも考えられる。本研究の結果に関連して挙げておくならば，〈サポート期待〉において同居者の平均が別居者の平均よりも有意に大きかった($F(1, 111) = 6.26$, $p < .25$)。〈母親との親密性〉においては有意差は見られなかった。したがって，〈サポート期待〉〈母親との親密性〉に関する独身者と既婚者との間の相違は，単なる母親との同居の有無による相違であるとは言えないだろう。

Table 7　*群別にみた母娘関係に関する尺度の平均値（SD）と分散分析の結果*

		親密性	過剰な依存・接触	サポート期待	サポート現状	接触頻度(別居)
独身群	(N = 115)	52.06(9.57)	29.52(7.25)	34.38(8.47)	36.13(7.87)	/
結婚群	(N = 120)	54.24(8.58)	30.88(7.94)	36.43(8.00)	37.18(7.93)	9.48(5.28)
出産群	(N = 177)	55.18(7.84)	30.28(6.86)	38.50(7.47)	38.29(7.31)	10.19(5.39)
F 値		4.50 *	1.03	9.46 ***	2.78	6.82 **
多重比較		出産>独身*		出産>独身***		出産>結婚**
独身群 有職	(N = 110)	51.96(9.45)	29.28(7.10)	34.08(8.37)	35.85(7.93)	/
結婚群 有職	(N = 78)	53.42(9.08)	30.82(8.08)	35.71(7.97)	36.21(8.14)	9.38(2.38)
無職	(N = 41)	56.73(6.23)	31.02(7.57)	38.27(7.33)	39.42(6.79)	9.66(2.40)
出産群 有職	(N = 47)	53.39(8.22)	28.87(5.96)	37.66(7.62)	38.11(7.40)	10.18(2.17)
無職	(N = 124)	55.61(7.65)	30.83(6.86)	38.78(7.43)	38.32(7.27)	10.23(2.32)
F 値		3.83 **	1.34	6.03 ***	2.83	2.51
多重比較		結婚無職>独身有職*		結婚無職>独身有職*		
		出産無職>独身有職*		出産無職>独身有職***		

注．本研究の対象者のうち，実の母親と同居している既婚の娘はごく少数であるため，同居の場合の接触頻度については，分析を行わなかった。また，別居の場合の接触頻度については，対象者の独身女性の7割近くが親と同居しているため，独身群は分析から除き，結婚群と出産群のみで検定を行った。
表中の N は欠損値がない場合の人数。それぞれの変数ごとに欠損値データは除いてあるので，各変数により N は多少異なる。
$^{*}p < .05$，$^{**}p < .01$，$^{***}p < .001$

いて無職者の平均が有職者の平均よりも有意に大きい傾向が見出され ($F(1, 166) = 3.40, .05 < p < .10$)，結婚群と同様に，無職の娘の方で母親との親密性が高いことが示唆された。しかし，結婚群とは異なり，〈サポート現状〉においては，有職者と無職者との間に有意な差は見られなかった。

考　　察

1. 娘の適応状態と母娘関係

母娘関係，夫婦関係，母親役割等といった，娘の生活実態から心理状態に関係すると想定される諸要因の中で，母娘関係が娘の適応状態を規定する度合いを検討した階層的重回帰分析の結果から，その度合いには娘の婚姻状態や子どもの有無によって違いが見られることが明らかになった。まず，〈母親への過剰な依存・接触〉は，既婚で子どもがいない女性の適応状態との関連が強いことが見出された。配偶者との新たな関係を築いていく時期に，母親に対して依存しすぎたり，母親のことを気にかけすぎたりすると，新しい家庭での安定した生活習慣等を確立していくことが難しくなる可能性が考えられる。その結果，生活に不満を抱いたり，抑うつ的になったりするのかもしれない。次に，〈母親との親密性〉は，独身女性の適応状態との間に強い関連が見出された。親や友人・恋人などから並置的に構成されていたサポートシステムが，結婚を機に自分の新しい家族を核としたシステムへと再構成される（川浦・池田・伊藤・本田，1996）ことにより，既婚女性では母親との関係性が適応状態に及ぼす影響が相対的に小さくなるのだろう。子どもがいる娘においてよりも独身の娘や既婚で子どもがいない娘において，母親との関係の質と適応状態との関連が強いという結果の傾向は，Baruch, & Barnett (1983) の，母親役割に従事する娘において，特に母親との関係の質が及ぼす影響が少ないという指摘にある程度沿うものだと考えられる。しかしながら，母親との関係の質と適応状態との関連には，既婚女性の職業の有無により大きく異なる点もあることが示唆された。すなわち，既婚で無職の娘の適応状態と〈母親との親密性〉との間には有意な関連が認められたが，既婚で有職の娘の適応状態との間にはそのような関連は見出されなかったのである。Baruch, & Barnett (1983) は，母親役割に従事する娘において，特に母親との関係の質が及ぼす影響が少ないことを報告し，母親であることが自分自身の母親の重要性を“減じる要因”(reducer) であるという指摘をしているが，本研究で得た結果からすると，既婚で職業を有することも自分自身の母親の重要性を減じる主要な要因であるのではないかと考えられる。本研究と先行研究 (Baruch, & Barnett, 1983) との結果の相違は，対象者の年齢の違い（本研究の対象者が27歳から34歳であるのに対し，Baruch, & Barnett (1983) では25歳から55歳にわたる女性が対象）や女性の就業を取り巻く社会・文化的状況の違いに因るところがあるのかもしれない。例えば，結婚や出産を機に退職したり，出産により一時職を離れる女性が少なくない日本の現状においては，職業の継続を選択する際に，特に女性の自立意識というものが大きく関与するのではないかと考えられる。結婚，出産後も仕事を続ける女性，すなわち，自分で生活を確立していくという意識が強いであろう女性にとっては，母親からのサポートが必ずしも重要な役割を果たさないとうことがあるのではないだろうか。

出産を終えた母親が実家に一定期間戻ることが少なくない（佐藤，1994）という日本の現状を考えると，自らが母親である女性において，特に子どもが乳幼児である場合には，実の母親との関係性が重要である可能性が推測されたが，本研究ではそれを支持するような明確な結果は見出されなかった。しかし，本論文での分析は，母親との関係性が娘の全体的な心理的適応を予測するかどうかといった点に的を絞ったものであるため，母親からの具体的な育児援助や情緒的サポートが娘の育児ストレスを和らげる方向に働くのか，その結果，娘の適応状態に肯定的な影響がもたらされるということがあるのか等については，まだ検討の余地が残されていると言えるだろう。特に仕事を有する既婚女性の場合，仕事役割，家庭役割の各々におけるストレスや仕事－家庭役割間で生じる葛藤及びそれを緩和するサポートとの間の複雑な関係が報告されており (Parasuraman, Greenhaus, & Granrose, 1992)，他の諸要因と母親との関係という要因とが絡み合い，有職の既婚女性の適応状態に関与しているという可能性が考えられ，今後の検討事項として残されている。

ところで，本研究では，適応状態を測定するものとして〈抑うつ傾向〉と〈生活満足感〉という2つの指標を用い，それを基準変数として個別に分析を行ったが，現実にはそれぞれが無関連ということはないだろう。実際，この2変数間の相関係数を求めたところ，かなりの相関 ($r = -.70$) が認められた。しかしながら，〈抑うつ傾向〉と〈生活満足感〉の各々を規定する要因は全く同様という訳ではなかった。母親との関係の質が娘の適応状態に及ぼす影響という点に注目すると，特に〈母親との親密性〉の関与の仕方に差異が見られた。すなわち，独身女性では，〈母親との親密性〉は〈抑うつ傾向〉と〈生活満足感〉のいずれにも関連していたが，既婚女性（無職）では〈抑うつ傾向〉のみにその有意な関与が見出された。成人の愛着について言及している Cicirelli (1991) は，成人になって親と離れても愛着対象の心的表象が心理的な安心感を得るために利用されることを強調している。また，伊藤・北島 (1980) は，既婚女性にとって母親が心の

支えとしての機能を果たすことを報告している。これらの知見を踏まえるならば，母親との親密性が心理的安定の基盤を与えるという意味で，娘のポジティヴな感情を高めるという方向でというよりもネガティヴな感情を緩和するという方向で働くということはあり得そうなことである。

2. 成人期における母娘関係の発達的移行

娘の結婚及び出産といったライフイベントに着目し，成人期以降の母娘関係がどのような発達的移行を経るのかを探索的に検討するために，独身女性，既婚で子どもがいない女性，既婚で子どもがいる女性間での比較を行った。その結果，既婚で無職の娘は独身の娘よりも母親との親密性が高く，母親に対してサポートを求める気持ちが強いことが示された。結婚や出産を機に母親とより親密な関係になるという Fischer (1981) の知見を踏まえるならば，結婚や出産を機に退職し専業主婦となる娘は母親とより親しさが増すと解することができるかもしれない。無職の女性の場合，職場でのネットワークがない分，有職女性に比べソーシャルネットワークの広がりが狭いと考えられる。そのため，より親しい親族や友人に依存する割合が高くなるのかもしれない。ただ，今回のデータは，結婚前と結婚後，あるいは，出産前と出産後との被験者内比較ではないため，結果の解釈にあたっては慎重にならざるを得ない。近代社会において，女性の就業が初めは独身女性中心であり，結婚すれば退職するというのが長らく一般的であったことを考えると，本研究の対象者となった女性の母親たちの多くは，結婚や出産を機に退職というコースを辿ったであろうことが推測される。そのような母親のライフコースを考慮すれば，1つの可能性として，独身時代から相対的に母親とより親しい関係にあった者が，母親世代と類似したライフコースを辿りやすいという意味で，結婚や出産により職を辞める傾向があるのではないかという可能性も否定できないのである。ただし，データの性質上，安易な結論はできないが，既婚で子どもがいない場合には無職の娘の方が有職の娘よりも母親から受け取っているサポートが多いのに対し，子どもがいる場合には有職者と無職者との間にそのような違いは見出されないという結果からすると，娘の出産により，少なくとも具体的なサポートという面では，娘が有職であるか無職であるかに関わらず，母親との関係が変化する可能性が考えられるのではないだろうか。子どもが生まれることで，有職の娘，無職の娘ともに育児援助（その程度は様々であると思われるが）という形での母親からのサポートが新たに加わることが推測されるが，そのような変化により，育児援助以外の母親からのサポートに関しても何らかの変化が生じるのかもしれない。

今後の課題として次のようなことが考えられる。第1に，本研究では，独身女性，既婚で子どもがいない女性，既婚で子どもがいる女性間での比較を通して，娘の結婚や出産といったライフイベントによる母娘関係の発達的移行を探索的に調べた訳だが，ライフイベントによる関係性の変容を確認するには，継時的変化そのものを捉える縦断的研究が望まれるだろう。第2に，本研究の実施方法上，対象となった母娘のペアは，母集団と比べてその関係が相対的に良好であろうこと，また，東京の4年制の女子大学の卒業生とその母親という社会経済的な地位が高く，全体的に「恵まれた」サンプルであることに留意する必要があるだろう。Cowan, Cowan, Heming, & Miller (1991) は，子が親になったときに親子関係の変化を経験することを主張しているが，ある者にとっては，それは自身の親との再接近，和解の時期であるが，別の者にとっては，昔の緊張状態や家族闘争の復活に直面する時期でもあるという。本研究では，変化の肯定的な側面を示したに過ぎない。成人の子とその親との関係は，愛着研究の領域では，その個人差が顕著であることが分かっている (e.g., Pearson, Cowan, Cowan, & Cohn, 1993)。より幅広いサンプルからデータを収集し，発達過程の個別性を検討することが必要であると考えている。最後に，本研究では，娘から見た母娘関係に主眼を置いている先行研究の知見 (e.g., Barnett et al., 1983, 1991; Fisher, 1981) との比較を試みようとする意図もあり，娘に対する質問紙調査のデータの分析のみを行った。母親のデータの分析も加えて，母娘の特性が，相互の心理的適応，あるいは，ライフイベントによる母娘関係の発達的移行にどのように影響しているかは，今後検討したい問題である。

文　献

Abernethy, V. D. (1973). Social network and response to the maternal role. *International Journal of Sociology of the Family,* **3**, 86-92.

青木まり・松井　豊・岩男寿美子. (1986). 母性意識から見た母親の特徴：ライフ・ステージ，自己評価，充実感との関係から. *心理学研究*, **57**, 207-213.

Barnett, R. C., Kibria, G., Baruch, G. K., & Pleck, J. H. (1991). Adult daughter-parent relationships and their associations with daughters' subjective well-being and psychological distress. *Journal of Marriage and the Family,* **53**, 29-42.

Baruch, G., & Barnett, R. C. (1983). Adult dauthers' relationships with their mothers. *Journal of Marriage and the Family,* **45**, 601-606.

Brooks-Gunn, J., & Zahaykevich, M. (1989). Parent-daughter relationships in early adolescence: A developmental perspective. In K. Kreppner, & R.

M. Lerner (Eds.), *Family systems and life-span development* (pp.223-246). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Cicirelli, V. G. (1991). Attachment theory in old age: Protection of the attached figure. In K. Pillemer, & K. McCartney (Eds.), *Parent-child relations throughout life* (pp.25-42). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Cowan, P. A. (1991). Individual and family life transitions: A proposal for a new definition. In P. A. Cowan, & M. Hetherington (Eds.), *Fmily transitions* (pp.3-30). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Cowan, C. P., Cowan, P. A., Heming, G., & Miller, N. B. (1991). Becoming a family: Marriage, parenting, and child development. In P. A. Cowan, & M. Hetherington (Eds.), *Family transitions* (pp.79-109). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Deutsch, F. M., Brooks-Gunn, J., Fleming, A., Ruble, D. N., & Stangor, C. (1988). Information-seeking and maternal self-definition during the transiton to motherhood. *Journal of Personality and Social Psychology,* **55**, 420-431.

土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫. (1990). 多重な役割従事に関する研究：役割従事タイプ，達成感と男性性，女性性の効果. *社会心理学研究*, **5**, 137-145.

Fischer, L. (1981). Transitions in the mother-daughter relationship. *Journal of Marriage and the Family,* **43**, 613-622.

福島朋子. (1992). 思春期から成人にわたる心理的自立：自立尺度の作成及び発達的検討. *発達研究*, **8**, 67-87.

福島朋子. (1993). 自立に関する概念的考察：青年・成人及び女性を中心として. *発達研究*, **9**, 73-85.

稲葉昭英・高橋　潔・小林和久・浦　光博・高根定信・南　隆男. (1986). 家族ストレス論による単身赴任家族研究の試み. *哲学*, **83**, 251-286.

伊藤裕子・北島順子. (1980). 既婚女性における依存性. *教育心理学研究*, **28**, 319-323.

Josselson, R. L. (1996). *Revising herself: The story of women's identity from college to midlife.* New York, NY: Oxford University Press.

柏木惠子. (1995). 親子関係の研究. 柏木惠子・高橋惠子（編），*発達心理学とフェミニズム* (pp.18-52). 京都：ミネルヴァ書房.

川浦康至・池田政子・伊藤裕子・本田時雄. (1996). 既婚者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート：女性を中心に. *心理学研究*, **67**, 333-339.

久保田まり. (1993). 過去及び現在の母親との関係に関する感情傾向：認識と，対人関係，親和欲求との関連. *母子研究*, **14**, 22-31.

Mancini, J. A., & Blieszner, R. (1989). Aging parents and adult children: Research themes in intergenerational relations. *Journal of Marriage and the Family,* **51**, 275-290.

南　隆男・稲葉昭英・浦　光博. (1988).「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけて：若干の資料. *哲学*, **85**, 151-183.

三隅二不二・篠原弘章・杉万俊夫. (1976). 地方官公庁における行政管理・監督者のリーダーシップ行動測定法とその妥当性. *実験社会心理学研究*, **16**, 77-98.

中西雪夫. (1991). 親であることに対する態度の内部構造と家族周期の変化に伴う変容過程. *家庭教育研究所紀要*, **13**, 64-77.

野村泰代・吉森　護. (1994). 幼児をもつ母親のハッピネスに関する研究(2). *日本心理学会第58回大会発表論文集*, 123.

落合良行・佐藤有耕. (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. *教育心理学研究*, **44**, 11-22.

尾形和男・宮下一博. (1998). 家族システムの中の父親の役割（Ⅲ）：父親の協力と母親の精神的ストレスおよび幼児の社会性の発達との関係. *日本発達心理学会第9回大会発表論文集*, 349.

岡本祐子. (1999). 女性の生涯発達に関する研究の展望と課題. 岡本祐子（編），*女性の生涯発達とアイデンティティ：個としての発達・かかわりの中での成熟* (pp.1-30). 京都：北大路書房.

小野けい子. (1994). 現代日本の母性意識：世代差と職業差の調査より. *発達*, **57**, 51-58.

Parasuraman, S., Greenhaus, J. H., & Granrose, C. S. (1992). Role stressors, social support, and well-being among two-career couples. *Journal of Organizational Behavior,* **13**, 339-356.

Pearson, J. L., Cowan, P. A., Cowan, C. P., & Cohn, D. A. (1993). Adult attachment and adult child-older parent relationships. *American Journal of Orthopsychiatry,* **63**, 606-613.

Ruble, D. N., Brooks-Gunn, J., Fleming, A. S., Fitzmaurice, G., Stangor, C., & Deutsch, F. (1990). Transition to motherhood and the self: Measurement, stability, and change. *Journal of Personality and Social Psychology,* **58**, 450-463.

佐藤　仁. (1994). 最近の女性の妊娠・出産意識と子育て. *母子保健情報*, **29**, 9-15.

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島　悟・北村俊則. (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, **64**, 409-416.

嶋　信宏. (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究. *教育心理学研究*, **39**, 440-447.

高橋惠子・柏木惠子(1995). 発達心理学とフェミニズム. 柏木惠子・高橋惠子（編), *発達心理学とフェミニズム* (pp.1-16).京都：ミネルヴァ書房.

詫摩紀子・菅原ますみ・小泉智恵・菅原健介・八木下暁子. (1998). 夫婦関係と子どもの発達(2)：親の精神的健康との関連. *日本発達心理学会第9回大会発表論文集*, 359.

内田圭子. (1990). 青年の生活感情に関する一研究. *教育心理学研究*, **38**, 117-125.

Umberson, D. (1989). Relationships with children: Explaining parents' psychological well-being. *Journal of Marriage and the Family,* **51**, 999-1012.

Umberson, D. (1992). Relationships between adult children and their parents: Psychological cosequences for both generations.*Journal of Marriage and the Family,* **54**, 664-674.

和田　実. (1989). ソーシャル・サポート(Social Support)に関する一研究. *東京学芸大学紀要：第1部門教育科学*, **40**, 23-38.

和田　実. (1992). 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響. *教育心理学研究*, **40**, 386-393.

West, M. L., & Sheldon-Keller, A. E. (1995). The measurement of adult attachment.In M.L.West, & A. E. Sheldon-Keller (Eds.), *Patterns of relating: An adult attachment perspective* (pp.95-117). New York, NY: The Guilford Press.

付記

本論文は，第一著者がお茶の水女子大学に提出した1996年度修士論文の一部を加筆修正したものです。調査にご協力いただいた対象者の方々に心より感謝申し上げます。また，本論文を作成するにあたり，貴重なご助言を頂きました九州大学の遠藤利彦先生に心よりお礼申し上げます。

Kitamura, Kotomi (Ochanomizu University) & Muto, Takashi (Ochanomizu University). *The Influence of Adult Mother-Daughter Relationships on Daughters' Psychological Well-Being: Life Events of Marriage and Childbearing.* THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 2001, Vol. 12, No.1, 46-57.
This investigation concerned the relationship between the quality of adult daughters' experiences and current relationships with their mothers, and indices of daughter's well-being (life satisfaction and depressive symptoms). A cross-sectional sample of 415 daughters (single; or married with or without children) completed questionnaires. The results showed that married and unemployed daughters felt closer to their mothers than did unmarried or employed daughters. The association between the quality of daughters' relationships with their mothers and their psychological well-being depended on daughter's marital, parental and employment status. Among unmarried daughters, a close mother-daughter relationship was associated with reports of high life satisfaction and lack of depressive symptoms. The relationship between mother-daughter closeness and depressive symtoms among married daughters was found only for unemployed women. Excessive care seeking and care giving to their mother had a significant negative association with the psychological well-being of married daughters without children, whether or not they were employed.

【Key Words】 Mother-daughter relationship, Adult development, Psychological well-being, Life events

2000. 5. 25 受稿，2001. 1. 22 受理

発達心理学研究
2001，第12巻，第1号，58-65

意見論文

質問紙研究が観察研究を補う条件：水野・本城論文に対するコメント

荘厳　舜哉
（大阪学院大学）

水野・本城（1998）論文は，幼児の自己制御機能の発達について，非常に多角的な視点から分析がなされた労作であるが，同時に幾つかの手続き的な問題と，そこから派生する幾つかの疑問を含んでいる。

【論文の特色】　本研究の最大の特徴は，質問紙調査と観察研究を組み合わせた点にある。周知の如く，質問紙調査の最大の利点は多くの被験者を対象とすることを可能にすることにある。逆にその弱点は，回答された内容が本当に各被験者の行動傾向や心的内容を反映しているのかの保証がないことにある。一方，観察研究の最大の利点は，被験者の実際の行動を研究者の目で見ることができ，ある行動が出現する文脈を分析することによって，行為者の心的プロセスに対する理解に迫ることができることにある。逆にその弱点は，特にマイクロなビデオ映像分析において膨大な時間を要することから，データを大量に収集することの難しさにある。

【２重の仮説】　水野・本城論文はこの相反する２つの方法を統合し，研究に適用したことが評価に値する。しかしながら同時に，課題の性質上やむを得ない面があるにしても，質問紙の結果が事実であるという仮説の上に，更に仮説を積み重ねていることが問題である。

水野・本城論文では，「行動的抑制傾向」と「気質的扱いにくさ」という，いわゆる遺伝的に規定された気質の影響が，自己制御機能発達の基礎に認められるという仮説が基本となっている。この仮説は，さまざまな先行研究に照らし合わせても正しい。ただ，このような仮説検証型の実験で注意しなければならないのは，仮説の下になっているデータが，信頼できる手続きの下に集められたか否かということである。

【被験者選定】　本論文では全部で３回，被験者が選ばれている。まず第１回は，825名の調査対象者から464名の有効回答を得た。この時点の子どもの平均年齢は11.5カ月齢，質問紙はRITQ日本語版で，郵送回収方式でおこなわれた。この手続きは多数の被験者を対象とするときに有効な方法である。しかしながら気質のような，遺伝的基盤を持つ行動傾向を調査する場合，果たしてこのような方法が妥当か否かに問題が残る。

実は筆者も，被験者が1歳の誕生日を迎える前後１週間に，子どもの感情発達の聞き取り調査を，136名の母親に実施したことがある。その時強く印象に残ったのは，直近のエピソード記憶に関してはほぼ間違いがないが，６カ月以前の子どもの状態に対する記憶となると非常に曖昧で，思い出せないとか，大体こうだったと思うという，母親の主観が非常に強いと感じた経験がある。その意味で，NBASのように，研究者の手によって誕生直後に測定された気質を別として，果たして質問紙でどこまで正確な気質的内容が拾えているか，しかも対象者の全てが第１子であり，主観が働きやすいことから，果たして母親にどれだけ客観的な評価が可能であったか，ここに最初の疑問が発生する。

第２回の調査はそれから更に３年から３年半後に，前回の調査後，追跡が可能であった352名の対象者に対してBSQが実施され，有効回答254名が得られている。この時点で平均年齢が3.7カ月となっているが，第１回調査は10～12カ月齢になる子どもたちを対象に，1990年10月から1991年４月におこなわれているのであるから，仮に1991年４月に10カ月齢であった子どもたちでも，1994年４月の第２回調査が実施された時点では46カ月齢に達しているはずである。この年齢は論文に記載されている第２回調査時点の子どもの平均年齢よりも大きい。ここに，些末な問題ではあろうが，収集手続きに関する第２の疑問が発生する。

第３回調査では254名の対象者に質問紙を発送し，最終的に150名の有効回答を得，その中から更に，研究室に来訪可能と答えた64名中47組の母子を対象に，観察研究がおこなわれた。実際には予備実験の被験者母子５組と条件統制から外れた２組を分析対象から除いているので，初回の有効回答被験者総数の8.6%を対象として観察研究がおこなわれた。

観察研究の結果として，母親をも巻き込んで効果的な自己主張をおこなった群の，乳児期における気質的扱いにくさが，他の２群に比較して有意に低いことが導かれている。この結論自体は非常に妥当であると考える。しかしながらここに本研究の問題が凝縮される。つまり，母親自身のパーソナリティや感情制御要素，家庭環境の要素など，子どもを取り巻く周辺環境の要因が一切排除され，子どもの気質的側面が完全に独立変数として取り扱われていることである。

【遺伝と気質】　確かに気質は，欧米の先行研究を見ても個体の行動傾向に安定的に結びついている。しかし，

例えばThomas, & Chess (1977) の先行研究にしても，Colorado Adoption Project(CAP)を実施したPlomin, & DeFries (1985) やNBASを尺度とした幾つかの先行研究 (e.g., Woodson, & da Costa, 1989; Muret-Wagstaff, & Moore, 1989) にしても，新生児期に研究者自身の手によって被験者の気質検査がおこなわれている。ところが本研究でその後の分析の基礎になっているのは，母親の主観的な評価に過ぎない。この時，確かに総合的考察の第二項目でその点の必要性が指摘されてはいるものの，母親側に存在する要因を軽視して，自己制御能力の発達が気質に関連しているという著者たちの主張が裏づけられたと断定することは難しい。なぜならば筆者は，新生児期及び乳児期の自己制御，例えば自己沈静能力のあり方は遺伝決定であることに同意するが，3歳を過ぎて子どもが社会との接点を急増させるとき，自己制御のあり方は家族環境を含む外部要因の影響が大きくなると考えるからである。

著者たちも，子どもの葛藤体験と母親の説明方略の関係調査をおこなってはいる。しかしこの時期の子どもにとって，より重要な要素は母子の共感であろう。最近の子どもの言語発達は早い。従って親は説明的しつけを採用しがちであるが，前操作期にある3歳前後の子どもにとって，これが有効であるとは思えない。むしろここでは母親の共感的態度を測定し，両者の関係を押さえておくべきである。共感こそが良好な感情の社会化を保証するものであり，自己制御の発達に重要な影響を及ぼすからである。

【気質と感情】 もう一つ問題が積み残されている。つまり，気質と感情表出の制御傾向は密接に結びついているが，子どもたちの感情的側面の検討が一切なされていないことである。例えばTable 2に，第3回調査に使用した18項目が掲載されている。18項目の内8項目が自己主張的自己制御機能，6項目が自己抑制的自己制御機能を表していると分析されているが，これらの項目には感情的行動が多く含まれている。従って，気質との関連を分析しようとする場合，感情を伴う行動に関して，日常，子どもたちがどのように振る舞っているのかを調査しておく必要があろう。母親のしつけ方略は，まさに子どもたちの感情表出傾向に沿って立案されている可能性が高いのである。

これに関する具体的な証拠が，荘厳・益谷・今川・中道 (1989) の観察研究から得られている。すなわち，母親が自分の感情を包み隠さず子どもに表出するとき，同様に子どもたちの感情表現は豊かである。逆に母親が自分の感情表出を抑制するとき，同様に子どもたちの感情表出は抑制される。母子相互作用は子どもの社会化の基礎である。確かに多くの先行研究に示されているように，特に6カ月以後の相互作用のイニシアティブは子どもに移る。しかしながら，3歳以後の両者は必ずしも同期した関係ではなくなる。それは子どもの世界の広がりを意味しているのであるが，同時に母親側からも子離れの過程が開始されることを意味する (e.g., Buss, & Plomin, 1984)。つまり，著者たちが観察対象とした年齢の子どもたちは，遺伝的な気質傾向を根底に持ちながらも，自分の環境を構造化し，変形し，働きかけていく，まさにその渦中にある。そのダイナミクスを押さえることなしに，相互作用研究は無意味である。

そこで自己制御の発達を，母親の説明方略と関連づけた著者たちの方法論が正しいのかどうか，疑問が残ったままとなる。このような研究をおこなう場合，著者はむしろ，第1回の調査時に観察に応じる被験者集団を募集し，最初から幾つかの課題場面に導入した観察研究をおこなうべきではないかと考えるのである。

実験的観察研究には，確かに場所的な制約が加わる。しかし少数であっても，家庭訪問で幾つかの行動カテゴリーの生起頻度をサンプリングしていく方法もあるし，何人かの子どもたちを遊び場面に導入し，それぞれの自己制御のあり方を相互作用から検討する方法もある。自己制御の発達研究においては，行動の背後環境を調査するために何らかの質問紙，あるいは聞き取り調査を同時並行的におこなう必要があるが，観察研究を中心に結果を導き出す工夫が必要とされるであろう。いずれにしても気質と行動の関連を分析するとき，遺伝的要素をどのように測定するか，また発達環境を含む周辺環境の要因をいかに整理するか，なかなか問題は複雑である。今回の指摘に対する著者たちの反論を待つ。

文 献

Buss, A. H., & Plomin, R. (1984). *Temperament: Early developing personality traits.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

水野里恵・本城秀次. (1998). 幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連. *発達心理学研究*, **9**, 131-141.

Muret-Wagstaff, S., & Moore, S. G. (1989). The Hmong in America: Infant behavior and rearing practices. In J. K. Nugent, B. M. Lester, & T. B. Brazelton (Eds.), *The cultural context of infancy: Vol.1* (pp.319-339). Norwood, NJ: Ablex.

Plomin, R., & DeFries, J. C. (1985). *Origins of individual differences in infancy: The Colorado adoption project.* New York: Cambridge University Press.

荘厳舜哉・益谷　真・今川真治・中道正之. (1989). 母親の感情表出スタイルと13ヶ月齢の子供の感情行動. *教育心理学研究*, **37**, 353-358.

Thomas, A., & Chess, S. (1977). *Temperament and development.* New York: Brunner-Mazel.
Woodson, R. H., & da Costa, E. (1989). The behavior of Chinese, Malay, and Tamil newborns from Malaysia. In J. K. Nugent, B. M. Lester, & T. B. Brazelton (Eds.), *The cultural context of infancy: Vol.1* (pp.271-294). Norwood, NJ: Ablex.

2000.9.11 受稿，2000.11.27 受理

保育の場における仲間関係を規定する要因：刑部論文によって刺激されるもの

本郷　一夫
（東北大学教育学研究科）

論文を評価するポイントは複数存在する。たとえば，1．新たな問題の発見，2．ある現象（従属変数）を説明する新たな要因（独立変数）の提示，3．独立変数間の関連性についての発見，4．よく知られている現象についての実証的データの提示，5．データの分析方法の提案，などの点である。刑部論文は，このうち主として上記の2と5に関連して評価されるだろう。すなわち，研究の目的にかかわらず常に一定の研究方法と分析方法を用いるいわゆる「定食型研究」(a fixed menu study) ではなく，仲間関係の成立と展開に及ぼす要因の多様性を示すと共に子ども間の仲間関係に対する新たなアプローチの可能性を追求したということである。以下では，刑部論文に対する単なる賞賛や批判ではなく，新たな研究の可能性を探るという点から，刑部論文によって刺激されたことがらに言及しながら，保育の場における仲間関係を捉える視点についての考えを述べることにする。

1．仲間関係に影響を及ぼす他者の存在
――保育者という要因――

保育の場における子どもの仲間関係の成立と展開を捉えようとする場合，いくつかの要因を想定することができる。1つは，個人の認知，言語・コミュニケーションの発達水準，情動理解や表出の特性など広く「個体能力」に属する要因群である。もう1つは，現在及び過去からの他児との関係，ある時点での子ども間の相互作用にかかわらない第3者の存在と役割などの「関係性」に属する要因群である。このうち，刑部論文で描かれている「ストーリー」の1つは，保育者とK児との相互作用が他児とK児との相互作用において再生産されたり協働的に構築される過程である。すなわち，従来の研究では重要であるにもかかわらず積極的に取り上げられることが少なかった保育者に焦点を当て，子ども間の相互作用に直接かかわらない第3者としての保育者の役割について述べられている。

一般に，子ども間の相互作用に対する保育者の役割として2つのものが考えられる。1つは子ども間の相互作用に介入し，子ども間の相互作用の展開と終結に直接的に影響を与える役割である（本郷・杉山・玉井，1991）。もう1つは子ども間の相互作用に間接的な影響を与える保育者の存在（保育者がその場にいるだけで子ども間の相互作用が変化する）と役割である。このうち，刑部論文の事例2（保育者の働きかけを再現する子ども）に示される焦点児Kと他児とのやりとりは後者の役割の例として位置づけることができる。しかし，保育者の間接的影響は，保育者と特定の子どもとの相互作用を他児が再現する場合にとどまらない。子どもに対する日常的な保育者の働きかけ方略（特定の子どもに対する働きかけに限らない）を子どもが自ら変形し，子ども間の相互作用の中で用いるという現象も観察される（結城，1998）。したがって，保育の場における子どもの仲間関係を捉えようとする場合，第1に，子ども間の相互作用にのみ焦点を当てるのではなく，子ども間の相互作用に直接的，間接的に影響を与える保育者の役割について捉えることが重要となる。第2に，保育者の影響の方向と大きさを明らかにするためには，保育者の行動を記述するだけでなく，保育者が果たしうる役割のいくつかの側面を事前に想定しておく必要があると考えられる。さらに，保育者の行動が変化したような場合には，保育者存在のあり方，あるいは保育者自身が自分をどう位置づけているかを捉えることも必要となってくるだろう。この最後にあげた第3の点は，刑部論文で描かれている保育者のK児に対する働きかけの変容を捉えようとする場合などに関わってくる問題である。刑部論文で描かれている保育者は，10月のケース検討会の結果，今までの働きかけによって行動の変化が起きないK児を「ほっておく」ことにしている。そして，K児と他児とのやりとり（事例6）が観察されるようになった12月の段階でもK児の変化を「変化」として意識おらず，むしろもっと気になる他児の存在を指摘するようになったと述べられている。また，このような経過は「共同体全体の営みの中にKの存在が自然に溶け込む関係性へと変容したからである」と解釈されている。しかし，このような解釈に至る前に，保育者が自分の位置づけをどのように変化させた結果に基づく働きかけの変容なのかということを明らかにしておくス

テップが必要であろう。

子どもにとっての保育者は大きく2つの存在として位置づけることができる。第1に「個の発達を促す存在としての他者」としての保育者である。刑部論文の事例1におけるF保育者の働きかけ（全員がおやつを食べ終わったのに，一人で食べているK児に対する働きかけ）にみられるように，通常保育者は自分自身をこのような存在として位置づけていることが多いと推測される。それは，単に集団からの逸脱を減少させることによって「ちょっと気になる」(刑部論文ではdifficultと表記されているが）状況を解決することだけを目的としているわけではなく，個の発達を促すことによってその状況の改善を目指していると考えられる。このような存在としての保育者は，「積極的に働きかける」だけではなく，子どもの発達を促すために時には「ほっておく」という行動もとることになる。一方，この「ほっておく」という行動自体は別の存在の保育者がとりうる行動でもある。すなわち，個の発達の促進を直接の目的としないで子どもと関わろうとする保育者の行動でもある。これは，これまでの発達経過や現在の発達水準，行動の逸脱を「問題にしない」保育者の存在であり，どのような発達水準の子どもとも可能な相互作用を展開するという意味で「個の発達を『無効にする』存在としての他者」（このような存在によって子どもの発達が促されることもある）として位置づけられる。それでは刑部論文で描かれている保育者はどのように位置づけられるのであろうか。K児に対して「ほっておく」ことにした保育者は，むしろ気になる他児を「発見」している点からすれば，少なくとも後者の存在としての保育者に変化しているわけではない。一方で，前者の「個の発達を促す存在」としての位置づけを変更することなく，働きかけだけを変容しているとも論文からは読み取れない。保育者の存在がどのようなものであれ，子どもは保育者からの直接的働きかけを受けないという点では同じであるため，保育者の位置づけは一見大きな問題ではないように思われるかもしれない。しかし，保育者が自分の存在についての認識や子どもに対する働きかけの原則を変更した上で子どもに対する働きかけを変容させているのか否かということは，その後子ども同士の仲間関係に異なる影響を及ぼすと考えられる。したがって，子ども間の相互作用の変化を縦断的に捉えようとする場合，保育者の存在のあり方を記述しておくことは重要となってくるのではないだろうか。

2．個体能力の変化に伴う仲間関係の成立と展開

刑部論文では，K児の「参加」の広がりは，個人の能力の獲得やスキルの獲得ではなく，周囲との関係づくりによる変化であるとされる。しかし，ここで取り上げられている個人の能力とはどのようなものであろうか。論文中に直接言及されているものとしては「着替えの最中に遊ばなくなる」という能力である。いわば，対人関係に直接関係しない能力についての言及であり，子ども間の仲間関係の変化に直接かかわると考えられる対人関係能力については触れられていない。この点については刑部論文の結果の言及や考察が不十分だという批判も成り立つ。しかし，このように対人関係に直接関連しない能力が仲間関係の変化と大きくかかわることも保育場面では観察される。そこで，刑部論文で取り上げられているのとは違う方法で個体能力に焦点を当ててみることも可能であろう。たとえば，三輪車に乗れるようになったことをきっかけとして子ども間の相互作用が変化することがある。通常「三輪車に乗れる」ということは対人関係能力とは考えられない。しかし，三輪車に乗れるようになったことによって，他児との接触の機会が増加したり，三輪車に乗って行う焦点児の活動に対する他児の評価（「個の発達を評価する存在としての他者」）が変化する結果，子ども間の相互作用が変化することが観察されている(本郷，1998)。したがって，仲間関係を捉えようとする場合，古典的な社会的スキル・トレーニングで取り上げられるような狭い意味での「対人関係能力」だけでなく，「対人関係に直接かかわらない能力」の変化にも着目する必要がでてくる。それと関連して，保育の場における仲間関係を捉えようとする場合，何を目的としてどのような個体能力に焦点を当てようとしているのかを研究者自身が自覚しておく必要があると考えられる。すなわち，「1対1の関係の中で求められる能力なのか，集団の中でのふるまいを規定する能力なのか」「状況への依存性が高い能力なのか，複数の状況における行動に共通する能力なのか」「年齢と共に増加することが期待される能力なのか，年齢には必ずしも依存しない能力（特性）なのか」などといった点である。

しかし，個体能力の次元と関係性の次元をいくら細かく分類した要因空間を想定したとしても，個体能力の変化と関係性の変化のどちらか一方の要因群を取り上げ，その関数として仲間関係の変化の過程を描こうとするには無理がある。なぜならば，ある時点の仲間関係は個体能力の発達によって説明しうるかもしれないが，別の時点の仲間関係は関係性の変化として描きうるからである。たとえば，三輪車に乗れるようになったことが対人関係を変化させ，対人関係の変化が新たな能力の発達を促し，それがまた対人関係の変化をもたらすといった場合のように，［個体能力の変化―関係性の変化―個体能力の変化―関係性の変化］といったように個体能力と関係性の各々の層がしばしば変化の各々原因と結果を成しながら時系列的に変化していく過程が考えられる。このような時系列的な因果関係の変化を分析し，記述する方法及び方法論についての追求は，発達心理学研究において急務

だと感じる。

以上，刑部論文に言及しながら，保育の場における仲間関係を規定する要因について述べてきた。最後に，刑部論文の目的から少し離れて簡単に2点について述べることにする。1つは，先に触れたように，刑部論文の中では上記の要因すべてが取り上げられているわけではない。その点では不十分だという批判が成り立つ。しかし，一般に，1つの研究においては，観察記録の中から何が抽出されたかよりも何が捨てられたかという点の方がしばしば重要となる。捨てられた要因を列挙して，その要因が考慮されていないという批判を展開するのは比較的容易な作業だろう。捨てられた要因が重要な場合は当然それは妥当な批判ということになろうが，寄与率が比較的低い要因の場合，すべての要因を取り上げることはかえって研究の価値を失わせてしまうことにもなりかねない。もう1つは，保育の場における発達援助にかかわる問題である。刑部論文は，発達援助を直接目的としたものではない。しかし，描かれている子どもの変化と保育者の変化を考えた場合，発達心理学の視点から，対象となっている子どもと子ども集団，そして保育者に対するどのような援助が必要なのか，あるいは必要でないのかといった発達援助のあり方についての議論を展開することの重要さに気づかされる。それは，ある時点での仲間関係を形成するための発達援助だけでなく，新たな子ども集団が形成された場合の仲間関係の形成をも視野に入れた発達援助のあり方についての議論である必要があるだろう。

文　献

刑部育子．(1998)．「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析．*発達心理学研究*，9，1-11.

本郷一夫．(1998)．子どもの対人世界をみつめる ――「個」がつくる「関係」・「関係」が育てる「個」．長崎勤・本郷一夫（編），*能力という謎*（pp.198-220），京都：ミネルヴァ書房.

本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子．(1991)．子ども間の働きかけに対する保母の働きかけの効果 ―― 保育所における1～2歳児の物をめぐるトラブルについて．*発達心理学研究*，1，107-115.

結城　恵．(1998)．*幼稚園で子どもはどう育つか ―― 集団教育のエスノグラフィ*．東京：有信堂.

2000.10.23 受稿，2000.12.27 受理

コミュニケーションとしての査読

尾見　康博
（山梨大学教育人間科学部）

1．はじめに

一般に，心理学の各学会が発行する機関誌に掲載されている論文は，学会が設置した編集委員会の査読を経ている。また，投稿する側に立てば，査読を経た論文の有無，あるいはその数が，採用・昇任人事の際の（唯一ではないが）重要な基準となっていることが一般的なので，査読のあり方は，（わが国の現状ではとくに若い）研究者にとって本来重大な問題である。

佐藤（1997）は，わが国の心理学における論文査読のあり方が混乱しているとし，査読する立場をコメンテイター，レフリー，ジャッジ，エディターの4つに分類することによって，査読のあり方を整理している。またそこでは，レフリー，とくにピアレフリーという立場で査読することが推奨されている。その他にも，『発達心理学研究』の意見論文では，査読に関する論考が数多く見られ，ピアレフリー型，あるいはそれに準じた査読を支持する意見がいくつも表明されている。

では，『発達心理学研究』の査読の現状はどうであろうか。私には本誌の常任編集委員の経験があるわけではないので，多数の事例を通じた一般的見解を論じることはできない。しかし，11巻1号に掲載された私の意見論文（尾見，2000）の査読のプロセスで，査読者あるいは（常任）編集委員会に対して不信感を抱かざるを得なかったという苦い経験がある。そこで以下では，その具体的事例を紹介しながら，査読の問題について述べたいと思う。

2．円滑な査読コミュニケーションを！

査読のあり方については，渡辺・加藤（1999）が「査読の姿勢」「査読のルール」「迅速な査読」の3点にまとめて論じている。これから紹介する例は，これらのいずれにも該当するとも言えるが，とりわけ，査読のルールに関するものと考えられる。

まず，私の手元にある郵便物の消印等から，私の論文が投稿されてから掲載されるまでをまとめておく（Table 1）。なお，本節の以下の部分に限り，「査読」ではなく「審査」という用語を用いる（用語の使い分けについては佐藤〔1997〕を参照）。

この審査プロセスで私は，審査一般の問題と意見論文独自の問題のそれぞれについて疑問を抱いた。

はじめに審査一般の問題について述べる。

Table 1 *尾見（2000）が掲載にいたるまで*

1998.5.初旬	投稿
1998.8.10.	審査結果：「修正再審査①」投稿後約90日
1998.12.18.	再投稿→編集委員会受稿
1999.5.7.	審査結果：「修正再審査②」投稿後約150日
1999.8.23.	再投稿→編集委員会受稿
1999.10.21.	審査結果：「修正採択」 投稿後約60日
1999.11.11.	再投稿→編集委員会受稿
1999.12.16.	審査結果：「採択」 投稿後約30日

まず，「修正再審査①」で概ね好意的なコメント（具体性を増すようにとの要求はあったが）であった審査者Aが，「修正再審査②」では「趣旨が分かりにくい」とまったく内容の異なるコメントに変わったことが挙げられる。これにはほんとうに驚いた。論文の中身が大幅に変更になったというならしかたがないが，審査者Cが奇しくも指摘したように，中身としては「ほとんど前回と同様」だったのである。迷ったあげく再投稿し，編集委員会宛てに，審査者Aの審査内容に関する質問文を送った。

しばらくして返送されてきた審査結果には，「修正採択」の結果とともに，質問状に対する返事も書き添えてあった。「前回のA委員のコメントに関しましては，不手際があり，深くお詫び申し上げます。」というものである。どういう不手際なのかは不明である。その上，今度は前回「意見は意見として採択し，討論の機会を増やす方が会誌のためにもなる。」としていた審査者Bが一転，厳しいコメントをしてきた。ふたたび，編集委員会に質問文を添えて返送した。その結果，『修正意見』と『参考意見』との区別が明確に著者に伝わらなかったこと」が，私の不信感の主原因ではないか，といった返答を編集委員長名でいただくこととなった。そしてその件についてお詫びまでいただいた。誠実に回答していただいたことにはいまでも感謝しているが，私の不信感がこれで収まったわけではない。

まず，「参考意見」は気にしなくてもいいということであるが，そうはいっても気になるし，「参考意見」にも応じないと，その審査者からプラスの評価を得られない，ひいては全体としての審査結果にも影響するのではないかと感じてもさほど不自然ではないと思う。しかしそれよりも，同じ審査者Aのコメントがなぜ，あたかも別人格であるかのような内容になるのか，という点の方が不思議でしかたなかった。これについては，先の返答の中で，「審査者が交代することがある」と書かれていた。それに加えて，審査者の交代があった場合に，「審査内容が継続することを基本方針としている」とも書かれていた。だからこそ，不手際があったということなのかもしれないが，同じ時に返ってきた審査者Bの審査内容が，前回と継続しているとはとても思えない内容だったのである。常任編集委員会はそこまでチェックすることはできないのだろうか。もしもできないというならば，審査者が交代したら，審査者Aでなく，Dにすべきではなかろうか。しかし，審査内容の継続性が保証されない場合，審査者が代わるたびに，新たなコメントに応じる必要がでてくるという問題が生じる。

その他にも，「修正再審査①」のときの「発達心理学独自の研究対象に対する記述を可能な限り取り入れて…」というコメントに対して，「これまでの意見論文にも発達心理学独自の研究対象に対する記述がほとんどないものもある」と具体的な論文名（複数）も添えて返答し，私の答えに対する意見を求めたのだが，それに対する回答はなかった。審査者が代わっていたら回答がないのも当然なのかもしれない。

以上の経過には，同一審査者による審査に継続性がなかったこと，審査者への問いかけに対する回答がなかったことの2つの問題が複雑に絡み合っており，それに直接間接に関わる編集委員会の対応の問題が加わっている。その意味で，査読者に対しても，編集委員会に対してもコミュニケーション不全を感じざるをえなかった。

3．意見論文の査読のあり方

つぎに，意見論文という『発達心理学研究』独自のカテゴリーの論文査読に限定した問題について述べたい。私が，先回意見論文を投稿したのは，意見論文のファンであったことが大きい。また，意見論文は実質的な依頼論文が多そうに思えたし，ある意見論文を受けた形で書かれた意見論文も，純粋な投稿によるものとは思えなかった。そういうこともあって，当時の私には，一般会員から投稿して意見論文欄を盛り上げようという，きわめて僭越な発想があったのである。非常に甘い考えであったことは上記の通りである。

投稿した論文の中身も，さして目新しいことを述べているわけでもないし，厳しい結果が返ってきても本来不思議ではないかもしれない。しかし，私が甘い考えを持つにいたったのは，それなりの理由がある。そして，そのことは意見論文，ひいては『発達心理学研究』の査読の持つ根本的問題にも関連する。

甘い考えを持つにいたった第一の理由は，意見論文の場合，受稿から受理までの期間（査読期間）が極端に短いことである。第11回大会のラウンドテーブル「発達心理学会のこれまでの歩みと将来展望」での話題提供のため，査読期間等について調べる機会を得たときのデータをここに紹介する。第10巻3号までに全部で60編の意見論文が掲載されているが，受稿および受理の年月日が記載されている論文で，査読期間の中央値を求めたところ47日であった。最大値は402日，最小値はなんと2日である（いずれも誤植の可能性あり）。ほとんどの論文は

100日以内である。私が甘い考えを持った理由もご理解いただけるのではないだろうか。これらの数値をTable 1と比べてみると，私の論文の査読期間（608日）が他論文に比べて極端に長いことがわかる。しかも発行までさらに半年以上かかっており，投稿してから日の目を見るまで実に2年以上かかっている（原著論文なら異例の長さというわけではない。しかし，8巻から10巻の原著論文の巻ごとの平均査読期間がいずれも500日弱だから，原著論文も含めた論文一般の査読期間としてもかなり長かったといえる）。とはいえ，そもそも今まで掲載された論文と私が投稿した論文を比べること自体おこがましいことであり，論文内容の出来具合に歴然とした差があるために，査読期間が長くなったという可能性もある。

しかし，私が甘い考えを持つにいたったもう一つの理由，つまり，論文中に執筆者が常任編集委員であることや，直近まで常任編集委員であったことが記載されていることが多く見られるという事実は，論文内容の出来具合という問題ではないことを明確にする。いわば「私は常任編集委員です」と書かれた（実質的な）記名論文に対して通常の（他論文と同様な）査読ができようか。編集規定には明記されていないものの，意見論文に対する査読のありようが，原著論文のそれとはずいぶん異なるだろうと判断することは間違っているだろうか。

4．提案

今回の個人的経験から，査読に関する私の提案，というよりお願いは，ピアレフリーの立場で，というような大所高所からの話ではなく，きわめて具体的，直接的なものである。

1つは，意見論文に限定したものであるが，常任編集委員の論文と他の一般会員の間の論文の扱いに差を設けないでほしいというものである。私の知り合いが6年ほど前に意見論文を投稿したときも，半年ほど音沙汰なしであったために，「私のような若僧は相手にしてくれないのかな」と思って取り下げたという事例もある。査読を公平にしてほしい，というごくごくあたりまえのお願いである。意見論文のファンとして一言付け加えるなら，常任編集委員クラスの論文が今まで通り掲載され続けるためにも，全体として基準を甘くしてほしい。たとえば，意見論文については，「てにをは」レベルの修正のみにとどめ，あまりに非人道的な内容である場合や，日本語の文章としての体裁が整っていない場合などを除き，原則として掲載することにしてはどうだろうか。もしも現状のようにダブルスタンダードでの査読を続けるのなら，そのことを編集規定にきちんと明記すべきである。それが一般会員に対する最低限の誠意ではないか。

もう1つは，意見論文に限定しないものである。それは，「修正再審査」を原則1回とし，次回の査読時に採択方針か不採択かを決定する，というものである。編集サイドにたつと難しいことなのかもしれないが，「修正再審査」のくり返しでは，実質的に生殺し状態である。投稿者の立場に立てば，さっさとリジェクトされて，他の学会機関誌や紀要などに投稿した方が生産的だとも考えられる。

論文の査読は投稿者だけでなく，査読者にとってもコストのかかる作業であることは理解しているつもりではある。しかし，だからといって，（常任）編集委員会，そして査読者の方々には，査読のあり方に無反省であってほしくない。迅速で透明な査読をお願いしたい。

文　献

尾見康博．(2000)．母集団はどこに？：高木論文(1998)で避けられた問題について．*発達心理学研究*，**11**，55-56.

佐藤達哉．(1997)．わが国心理学界における学会誌の論文査読のあり方を巡って ── 心理学論（へ）の挑戦 (2)．人文学報（東京都立大学）*第278号*，123-141．（サトウタツヤ・渡邊芳之・尾見康博．(2000)．心理学論の誕生 ── 「心理学」のフィールドワーク．京都：北大路書房　所収）

渡辺恒夫・加藤義信．(1999)．『発達心理学研究』の審査のあり方への一提言．*発達心理学研究*，**10**，137-138.

2000.9.11 受稿，2000.12.25 受理